

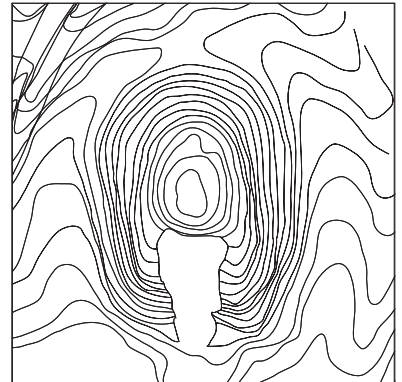
ありなしやま 蟻無山古墳群・つかやま 塚山古墳群・すせみやうらやま 周世宮裏山古墳群

測量調査報告書

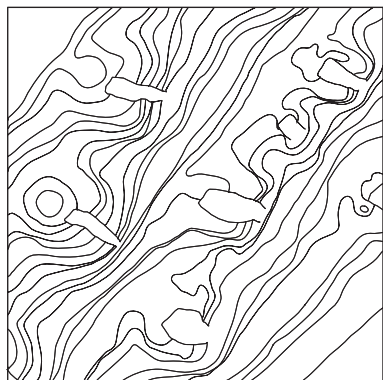
■千種川流域最大の中期古墳「蟻無山1号墳」を含む蟻無山古墳群の測量調査



■総数50基を越す後期群集墳「塚山古墳群」の測量調査



■小規模墳で構成される後期群集墳「周世宮裏山古墳群」の測量調査



2011年3月
兵庫県赤穂市教育委員会

蟻無山古墳群



蟻無山古墳群（写真中央）は、相生市域（写真右）から上郡町域（写真上）に至るルート上に立地し、眺望が約 270 度得られる絶好の位置にある（南から、2009 年撮影）。



蟻無山古墳群近景。南西に張り出した独立丘陵上に位置する（2004 年撮影）。丘陵頂部に、造出し付き帆立貝形古墳である蟻無山 1 号墳がある。



蟻無山1号墳北側斜面。写真右の墳頂部から左側にかけて、二段築成の様子を良好に残す。テラス部分には、葺石と見られる円礫が多く認められる。(西から)



蟻無山1号墳東斜面。写真左側の墳頂部から造出しが張り出す。造出しの平坦面は、円丘部のテラスと接続している。(南から)



蟻無山古墳群採集円筒埴輪の一部。右3点は有年考古館收藏品。
左2点は赤穂市教育委員会所蔵の伝・蟻無山古墳群採集遺物。



蟻無山古墳群出土須恵器の一部。68～70は蟻無山2号墳出土とされる。
(68・70は「アリナシII号」、69は「西側陪塚」の注記。)

塚山古墳群



塚山古墳群Ⅰa支群。左にⅠ-1号墳があるほか、奥にいくつかの古墳が見える。
緩やかな斜面地に大規模な墳丘が築かれている。



塚山古墳群Ⅱc支群。緩斜面から斜面地にかけて、大規模な古墳が密集して築かれる。
Ⅱ-11号墳から南を見た写真で、ここには4基の墳丘が写っている。



塚山Ⅰ－6号墳。塚山古墳群で最大規模の墳丘、石室をもつ（兵庫県指定史跡）。
玄室に間仕切り構造をもつ右片袖式の横穴式石室である。石室残存長 10.3m。



塚山Ⅱ－9号墳の石室。右片袖式の横穴式石室であり、玄室に造り付けの間仕切りが付属する。



塚山Ⅱ-12号墳の石室。無袖式の横穴式石室であるが、造り付けの間仕切りが認められる。間仕切り前面には、敷石、框石もしくは扉石と評価できる板状石材が散乱している。



有年考古館に収蔵されている塚山古墳群採集遺物。

周世宮裏山古墳群



周世宮裏山古墳群の遠景。21号墳から北を見たところ。現地に立っても気づかない程度の低墳丘墳で構成され、背後の傾斜変換点には比較的大規模な古墳が築かれている。



有年考古館に収蔵されている周世宮裏山古墳群採集遺物。

序 文

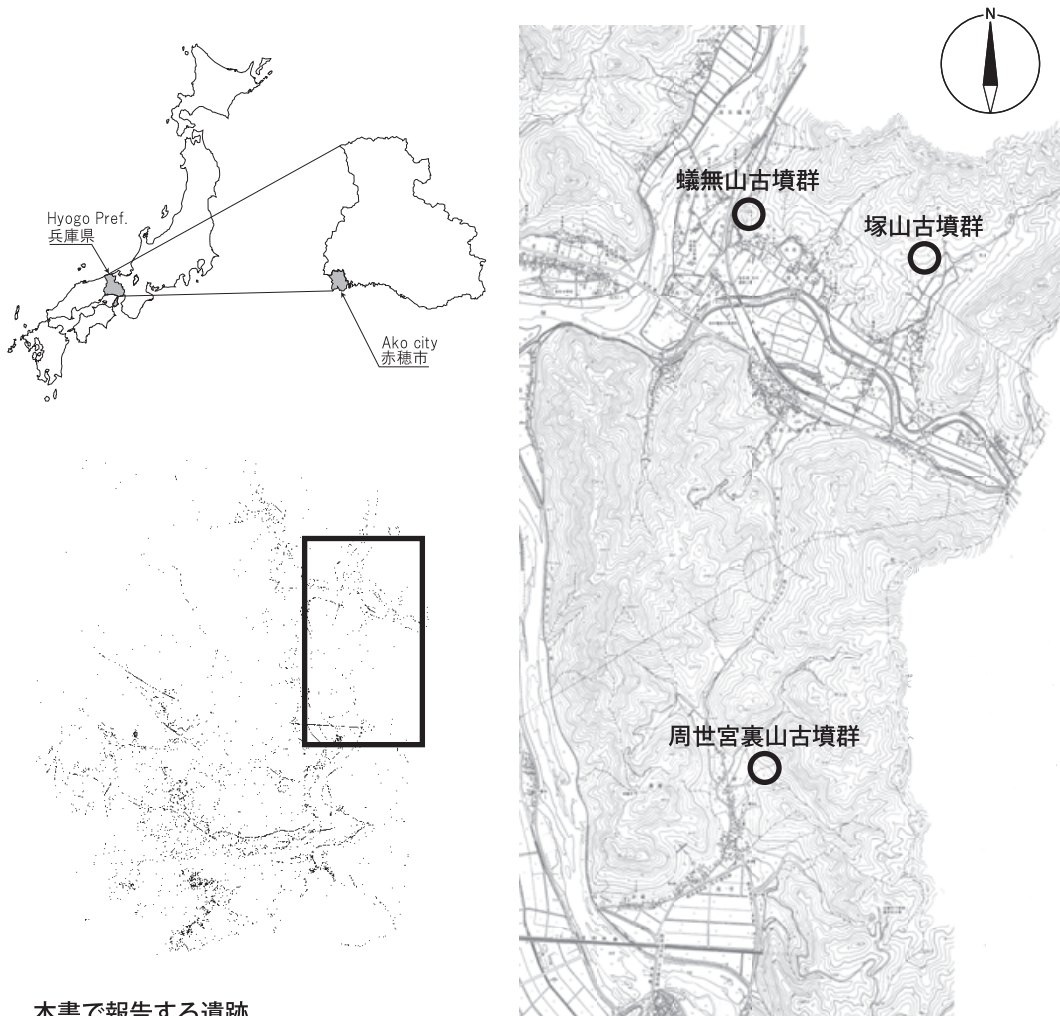
兵庫県の最西端にあたる赤穂市には、古来より交通の基幹手段であった清流千種川が南北に貫流しています。この千種川交通の発達には赤穂市に大きな進展をもたらしましたが、一方で市北部の有年地域では東西の交通網も発達し、古代における発展の礎となっていました。

それが古代山陽道に代表される陸路であり、赤穂市内にも、東の相生市から有年を抜け、北の上郡町もしくは西の岡山県へ行くルートが、近世西国街道の前身として自然に形成されていたに違いありません。

そのことを証明するのが、有年原周辺に集中する多くの古墳群や集落遺跡です。蟻無山1号墳は、中期古墳としては千種川流域最大の古墳であり、塚山古墳群は千種川流域有数の群集墳です。また、周世宮裏山古墳群はもう一つのルート、つまり南北の千種川流通のなかで形成された権力に裏づけされた大規模群集墳と言えるでしょう。

本書は、これらの重要遺跡の測量調査成果を報告するもので、多くの成果が明らかとなりました。本書の刊行により、赤穂市ひいては播磨の歴史がまたひとつ紐解かれることを願ってやみません。最後になりましたが、本書の刊行にあたり、ご協力、ご指導いただいた多くの方々に深く感謝申し上げます。

赤穂市教育委員会
教育長 室 井 久 和



例 言

- 1 本書は、蟻無山古墳群（赤穂市有年原所在）、塚山古墳群（同有年牟礼所在）及び周世宮裏山古墳群（同周世所在）の測量調査報告書である。
- 2 測量調査は、蟻無山古墳群については平成 22 年度、塚山古墳群については平成 21 年度、周世宮裏山古墳群については平成 14 年度に赤穂市教育委員会が実施したものである。蟻無山古墳群及び塚山古墳群測量調査は、国宝重要文化財等保存整備費補助金の採択を受け、国庫補助事業として実施した。すべての測量調査は、赤穂市教育委員会生涯学習課文化財係の荒木幸治が担当した。
- 3 蟻無山古墳群の測量調査は平成 23 年 1 月 11 日～3 月 11 日（実働 20 日）にかけて、塚山古墳群の測量調査は平成 22 年 2 月 19 日～3 月 31 日（実働 22 日）にかけて、周世宮裏山古墳群の測量調査は平成 14 年 4 月 24 日～平成 15 年 3 月 31 日（実働 20 日）にかけて実施した。本書の整理作業は、平成 22 年 4 月 1 日～平成 23 年 3 月 31 日まで、赤穂市埋蔵文化財調査事務所（赤穂市東有年 68 番地）にて実施した。
- 4 調査後の整理作業及び報告書作成は、赤穂市教育委員会が費用負担のもと実施した。
- 5 本書に掲載した蟻無山古墳群採集遺物は、有年考古館（松岡秀樹館長）に依頼して所蔵資料を借り受けたものと、教育委員会所蔵のものがある。教育委員会所蔵資料は、今回の測量調査にて採集したものと、個人の方から寄贈を受けたものがある。
- 6 本書の執筆及び編集は荒木が行った。掲載遺物の実測は荒木、篠宮欣子（整理調査員）、入江麻紀（整理作業員）、大川加奈子（同）、坂井美和（同）、西野維子（同）が実施し、遺物写真、遺構写真撮影は荒木が実施した。
- 7 写真は、デジタルカメラ NIKON D300（1,230 万画素）及び Olympus E520（1,000 万画素）により撮影を行っている。なお巻頭写真の蟻無山古墳群周辺空中写真は、平成 16 年度に兵庫スカイフォトサービス及び平成 21 年度に株式会社エイテックに委託し、撮影したものである。
- 8 本書で使用する方位は、蟻無山古墳群の調査記録を除き磁北である。塚山古墳群、周世宮裏山古墳群ともに、座標に落とすことはできていない。また、既存の 2 級基準点を使用して測量したものであるため、標高は旧来の日本測地系（V 系）となっていることに注意されたい。蟻無山古墳群については、GPS を用いて設置した基準点をもとに測量したため、世界測地系に基づいた座標に落とされている。
- 9 本書での標高値は、東京湾標準潮位（T.P.）を用いている。
- 10 蟻無山古墳群の測量作業は、赤穂市の委託を受けた株式会社大設が行った。
- 11 本報告に係る記録資料は、赤穂市教育委員会が赤穂市埋蔵文化財調査事務所において保管している。広く活用されることを希望する。赤穂市教育委員会生涯学習課 0791-43-6962
- 12 測量調査、整理調査に際しては、調査対象地の地権者をはじめ下記の方々や機関に資料提供、ご指導、ご協力、ご助言をいただいた。特に蟻無山 1 号墳の墳丘形態については岸本一宏氏の、蟻無山古墳群採集埴輪に関しては、高橋克壽氏から多くのご教示を受けた。また、岸本道昭氏及び山本博利氏からは、蟻無山 1 号墳で採集された埴輪を提供いただき、中久保辰夫氏からは蟻無山古墳群採集遺物の実測図を提供いただいた。記して深く感謝申し上げます。

上田健太郎、岸本一宏、岸本道昭、惣那敬三、島田 拓、高橋克壽、中久保辰夫、森岡秀人、山本博利、有年考古館、兵庫県立考古博物館

目 次

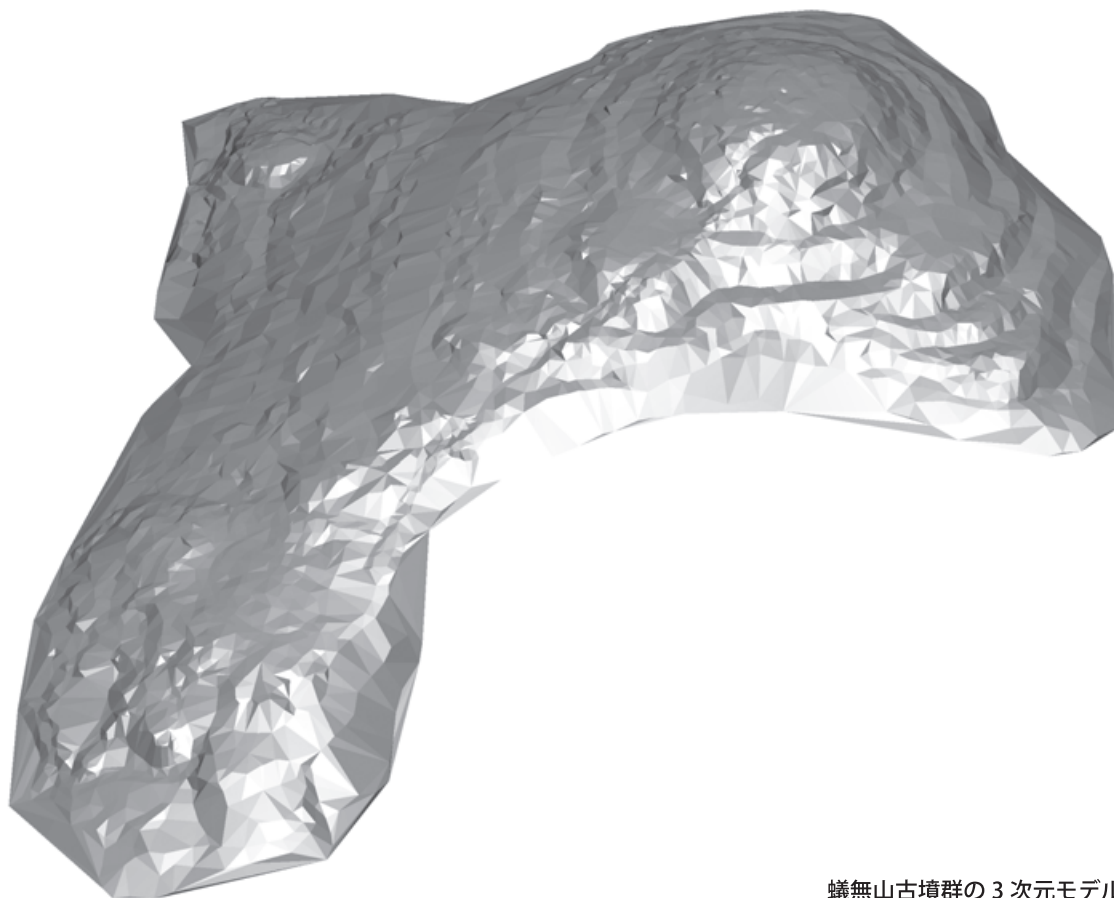
第 1 章 蟻無山古墳群の測量調査	1
1 調査の概要	1
(1) 調査に至る経緯	(2) 調査体制
(3) 調査の概要	
2 地理的・歴史的環境	2
(1) 地理的・歴史的環境	(2) 蟻無山古墳群への言及
3 調査成果	12
(1) 測量調査	(2) 採集資料
4 まとめ	28
第 2 章 塚山古墳群の測量調査	29
1 調査の概要	29
(1) 調査に至る経緯	(2) 調査体制
(3) 調査の概要	
2 地理的・歴史的環境	31
(1) 地理的・歴史的環境	(2) 塚山古墳群への言及
3 調査成果	36
(1) 支群・小支群の設定	(2) I a 支群の測量調査成果
(3) I b 支群の測量調査成果	(4) I c～I e 支群の踏査成果
(5) 第Ⅱ支群の踏査成果	
4 まとめ	45
第 3 章 周世宮裏山古墳群の測量調査	47
1 調査の概要	47
(1) 調査に至る経緯	(2) 調査体制
(3) 調査の概要	
2 地理的・歴史的環境	49
(1) 地理的・歴史的環境	(2) 周世宮裏山古墳群への言及
3 調査成果	52
4 築造変遷の検討	57
(1) 墳丘形状と築造変遷	(2) 奥壁用石法との相関性
(3) 立地との相関性	
第 4 章 本書のまとめ	59

写真図版

挿図・表目次

図 1	蟻無山古墳群周辺の遺跡地図	3
図 2	有年原・田中遺跡 旧河道出土の初期須恵器ほか	4
図 3	奥山古墳群 採集遺物 (1)	5
図 4	奥山古墳群 採集遺物 (2)	6
図 5	川西宏幸氏によって行われた埴輪の広域編年	7
図 6	『赤穂市史』記載の蟻無山古墳群測量図	8
図 7	岸本道昭氏による播磨の大型古墳編年案 (1)	10
図 8	岸本道昭氏による播磨の大型古墳編年案 (2)	11
図 9	特異な波状文の類例	12
図 10	蟻無山古墳群 測量図	13
図 11	蟻無山 1 号墳 測量図	15
図 12	蟻無山 1 号墳 墳丘推定図	16
図 13	蟻無山 2 号墳 墳丘推定図	18
図 14	蟻無山 3 号墳 墳丘推定図	18
図 15	蟻無山古墳群 採集遺物 (1)	20
図 16	蟻無山古墳群 採集遺物 (2)	22
図 17	蟻無山古墳群 採集遺物 (3)	23
図 18	蟻無山古墳群 採集遺物 (4)	24
図 19	蟻無山古墳群 採集遺物 (5)	25
図 20	蟻無山古墳群 採集遺物 (6)	26
図 21	蟻無山古墳群 採集遺物 (7)	27
図 22	塚山古墳群周辺の遺跡地図	32
図 23	有年地域の特異な横穴式石室の例	33
図 24	『赤穂市史』第四巻に掲載された塚山古墳群の位置図と第一群集墳の測量図	34
図 25	塚山古墳群 採集遺物	35
図 26	塚山古墳群 石室実測図	36
図 27	塚山古墳群 古墳分布図	37
図 28	塚山古墳群 I a・I b 支群 基準点配置図	38
図 29	塚山古墳群 I a・I b 支群 平板測量図	39
図 30	塚山古墳群 I a・I b 支群 墳丘復元想定図	40
図 31	周世宮裏山古墳群周辺の遺跡地図	50
図 32	『赤穂市史』第四巻に掲載された周世宮裏山古墳群の位置図	51
図 33	周世宮裏山古墳群 採集遺物	51
図 34	周世宮裏山古墳群 平板測量図	53
図 35	周世宮裏山古墳群 墳丘復元想定図	54
図 36	周世宮裏山古墳群 変遷推定図	58
表 1	塚山古墳群 古墳データ (1)	42
表 2	塚山古墳群 古墳データ (2)	43
表 3	周世宮裏山古墳群 古墳データ (1)	55
表 4	周世宮裏山古墳群 古墳データ (2)	56

第1章 蟻無山古墳群の測量調査



蟻無山古墳群の3次元モデル

1 調査の概要

(1) 調査に至る経緯

赤穂市産業振興部農林水産課(当時)が、平成13年度に実施した森林空間総合整備事業によって、周知の遺跡で兵庫県指定史跡でもある蟻無山1号墳の墳頂部周辺が間伐された。この間伐は、北の上郡町、南西の東有年から南東の有年原地区まで、およそ270度に広がるパノラマ景色を目的として実施されたものであったが、この事業により墳頂部及びその周辺の踏査が可能となった。踏査を行ったところ、史跡外ではあるものの、造出し部もしくは前方部とされている箇所へと続く南斜面が、登山道や植栽等のために改変著しいことや、古墳斜面に葺石の一部が露呈してしまっていることが判明した。さらに、北側斜面には多量の葺石とともに明確な段築が確認され、これまでの測量図には表されていない墳丘地形の存在が明らかとなった。

そこで赤穂市教育委員会では、兵庫県指定史跡を含む蟻無山古墳群の範囲及び形状を明らかにするため、蟻無山古墳群全体を一括して測量する計画を立てた。森林と化している現状では測量が困難なため、可能な範囲で間伐を行い、平成23年1月より3月にかけて、7,890㎡の測量調査を業務委託によって実施した。測量作業は、赤穂市の委託を受けた株式会社大設が実施した。

(2) 調査体制

調査体制は以下のとおりである。

赤穂市教育委員会事務局

測量・整理調査

平成22(2010)年度

【教育長】室井久和 【教育次長】高山康秀

【文化財担当参事兼生涯学習課長】宮崎素一

【文化財係長】中田宗伯 【事務担当】加藤章江 【民俗・普及担当】藤田忠彦

【調査・整理担当】荒木幸治 【整理調査員】篠宮欣子

【整理作業員】入江麻紀、大川加奈子、坂井美和、西野維子

【発掘調査作業員】社団法人赤穂市シルバー人材センター

小川國夫 島浦正行 寺本徳義 中戸 隆 中平敏雄 名倉紀世志 平野茂樹

門野 實 安井義樹 渡代三郎

(3) 調査の概要

調査に先立って樹木の間伐を行い、等高線間隔を20cmとしたトータルステーションによる測量を業務委託によって実施し、古墳の所在、形状を把握した。

2 地理的・歴史的環境

(1) 地理的・歴史的環境

蟻無山古墳群は赤穂市有年原字中北原に位置し、有年原背後の通称「奥山」から南西に突き出した独立丘陵に所在する(図1)。『赤穂市史』によれば、蟻無山古墳群は3基の古墳によって構成され、全長52m、高さ7mの規模をもち丘陵頂にある蟻無山1号墳、1号墳の南西にあり直径17mの円墳である蟻無山2号墳、さらに南東にある直径13mの円墳である蟻無山3号墳が存在している(松岡1981・1984)。2号墳が盗掘を受けた以外に発掘調査歴はなく、詳細は不明であるが、後述するように、採集遺物として初期須恵器や円筒・形象埴輪類が認められ、古墳時代中期、5世紀前半の時期が与えられている。昭和50年3月18日には、兵庫県指定文化財(史跡・指定番号46)となっている。

蟻無山古墳群の周辺は、文化財の宝庫と呼ばれる有年地域でも、特に重要な遺構、遺物の集中するところであり、山麓の平野には、赤穂市を代表する集落遺跡である有年原・田中遺跡がある。この遺跡では弥生時代中期前葉からの集落跡が確認されており、特に著名なのは弥生時代後期に位置づけられる突出部と陸橋部をもつ円形周溝墓で、一部が兵庫県指定史跡となって公園化されている(宮崎・藤田1991)。さらに、多くの竪穴建物跡や木棺墓が見つかるほか、分銅形土製品、銅鐸形土製品、初期須恵器や高床倉庫柱材など貴重な資料が出土している。初期須恵器は、円形周溝墓2基が見つかった調査区の北西近くで、主に旧河道内から見つかり、焼きひずみのある須恵器(図2の13)が出土していることから、近隣に窯の存



図1 蟻無山古墳群周辺の遺跡地図 (S = 1 : 25,000)

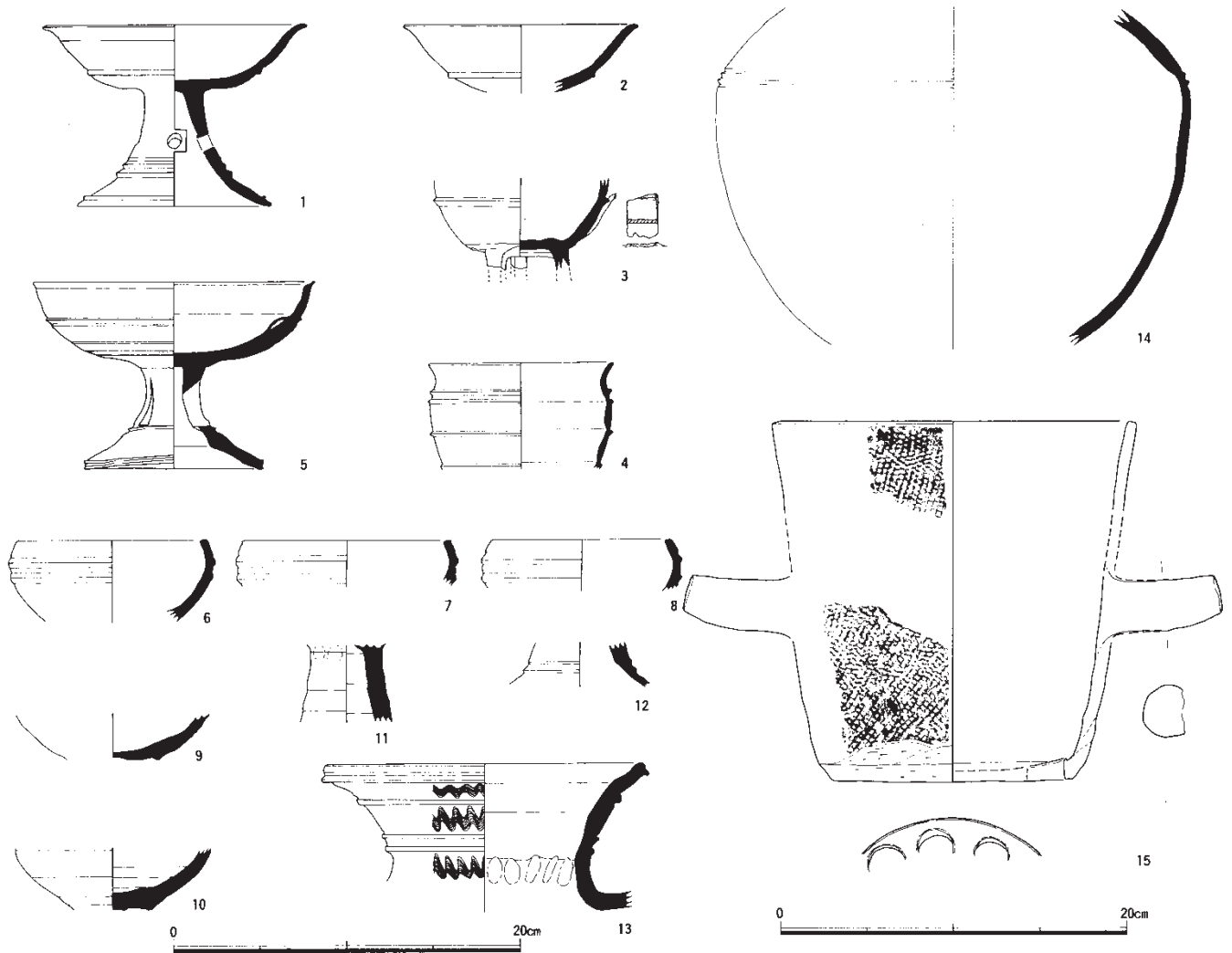


図2 有年原・田中遺跡 旧河道出土の初期須恵器ほか (S=1:4) (藤田 1994)

在が推定されているのに加え、格子目タタキの見られる甑 (図2の15) が出土していることから、渡来系の人々の生活も窺わせるものとなっている (藤田 1994)。このほかにも飛鳥～奈良時代の大規模掘立柱建物群、石列をもつ基壇遺構なども確認されている (平田・西口 1991) など、時期を問わず有年における拠点的な遺跡であったことがわかる。

有年原・田中遺跡北方の山地は、市内でも特に古墳の集中する地域である。そのほとんどは横穴式石室をもつ古墳時代後期の群集墳であるが、蟻無山古墳群東には中期に遡る奥山古墳群が所在している。『赤穂市史』第四巻によれば、標高 108 m の山頂に 3 基、南斜面を 20 m ばかり下った所に 1 基の、合計 4 基の古墳があったが、砂防工事によって 1 号墳と 4 号墳が破壊されたという。1 号墳は工事中に発見され、遺物は整地の際に完全に掘り出されて散乱していた。径 4 m の円墳と推定され、円筒埴輪、朝顔形埴輪、完形の須恵器壺 2 点、蓋坏の坏身坏蓋それぞれ 1 点、鉄鎌 1 点のほか、鉄斧や鉾留短甲も採集されたという。なお、松岡秀夫氏の論文中で、このほか鉄鏃、刀子、たがね等の出土も伝えており (松岡 1962)、石材が見られなかったため木棺直葬と推定している。2、3 号墳はそれぞれ径 12 m 前後の円墳で、未調査である。4 号墳も 1 号墳と同様の経緯で発見されたが、円筒埴輪 2 点のほか、完形の須恵器壺 2 点が採集され

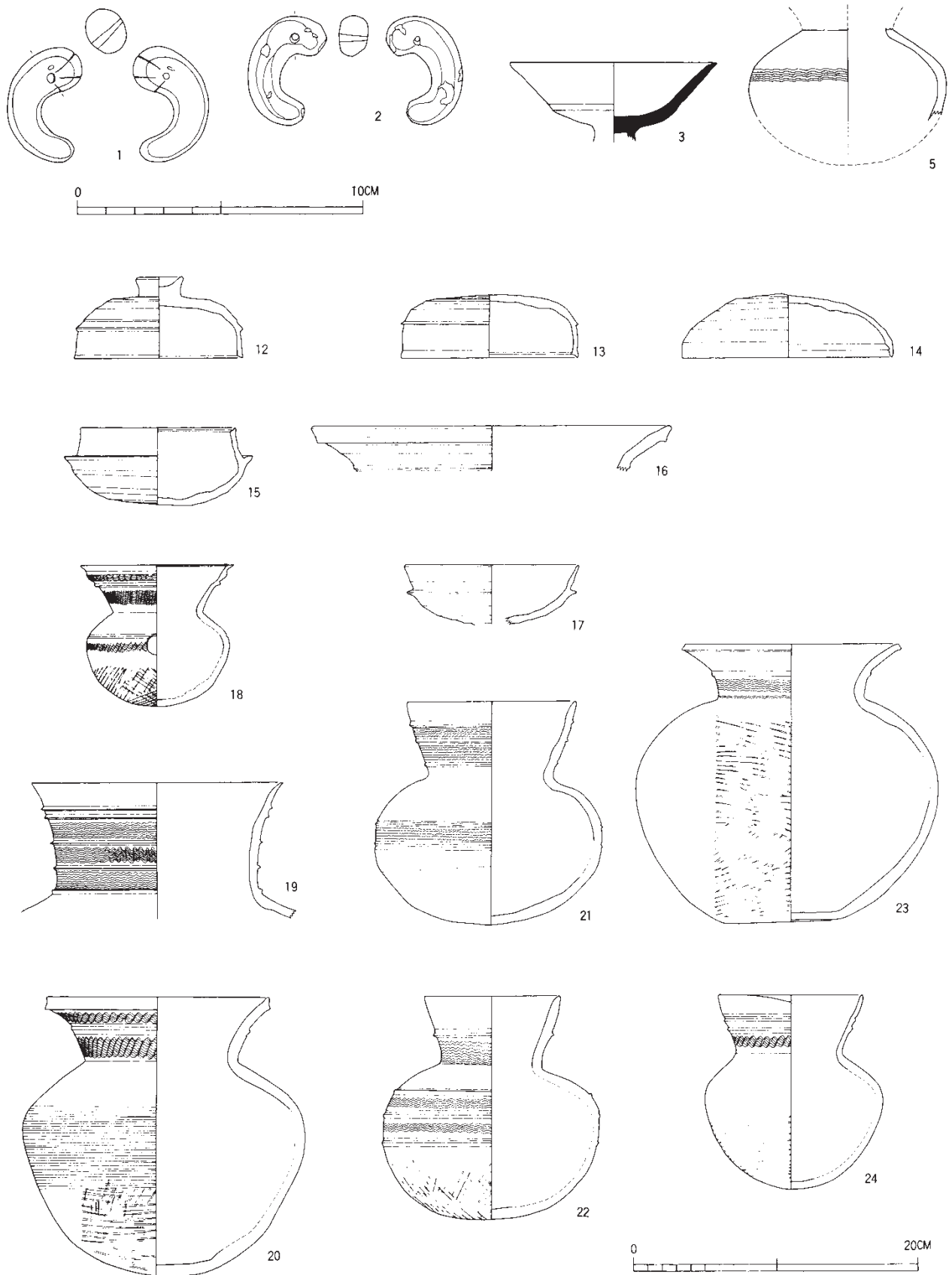


図3 奥山古墳群 採集遺物 (1) (S = 1 : 4) (西播流域史研究会編 1991)

ている。すべて5世紀中葉～後葉と推定されている。

ただし『有年考古館藏品図録』（西播流域史研究会編 1991）によれば、『市史』の記載と遺物の注記に若干の混乱が認められ、「奥山古墳群採集遺物」として一括提示されている（図3・4）。なお現在、有年考古館には原小学校裏山から採集されたと推定される鉄製品として、袋状鉄斧、刀子、ヤリガンナ、鉄鏃、鉾留短甲片、楔、帯状鉄製品、コテ状鉄製品が収蔵されている。

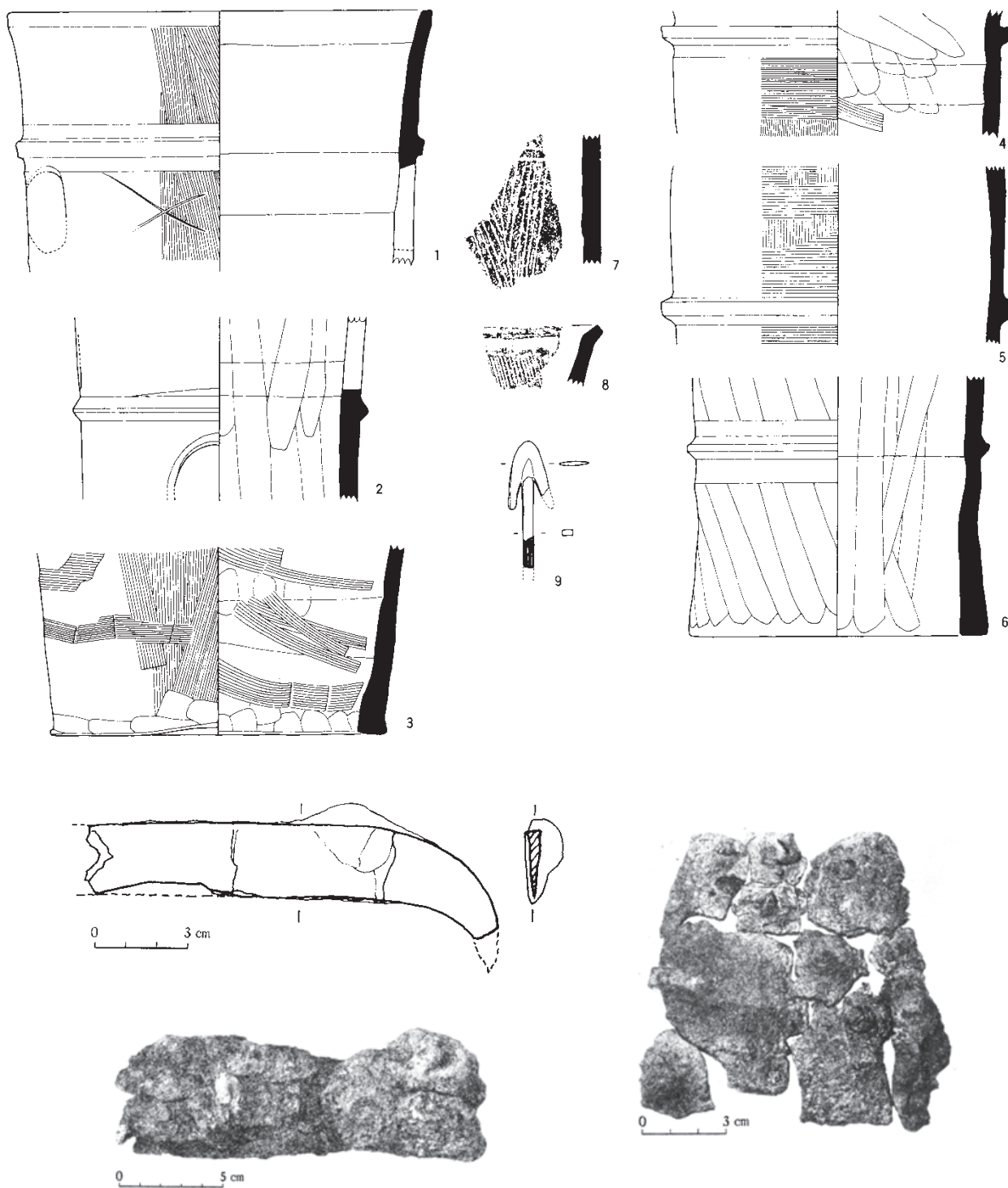


図4 奥山古墳群 採集遺物 (2)
 (鉄鏃実測図はS=1:2 それ以外は写真を除きS=1:4 写真はスケールアウト)
 (西播流域史研究会編 1991、赤穂市 1981・1984)

(2) 蟻無山古墳群への言及

蟻無山1号墳は、千種川流域で最大の中期古墳とされ、西播磨地域の社会構造を論じるうえで欠かせない重要遺跡として、多くの論文で言及されている。

平野庸脩が宝暦12(1762)年に編した『播磨鑑』には「其辺に蟻なし山と云有、山に蟻なし、其山の土を取て異地に入ても蟻不生、実に奇也」とある。古墳についての言及はないものの、河原石の葺石で覆われた古墳の姿から派生した説話かもしれない。

松岡秀夫氏は、十余年間で収集した遺物や現地調査結果から、千種川流域の古代遺跡を概観する(松岡1962)なかで、蟻無山1号墳について触れ、「地勢上から見て前方後円墳を造ろうと思えばつくりうるところである。これを造出しに止めてあえて前方後円墳にしなかったことは地勢以外の他の理由、たとえば経済的なものによるものと思うべきではなからうか」とした。

赤穂市教育委員会、赤穂市文化財調査委員会刊行の『赤穂の埋蔵文化財』には、蟻無山1号墳と2号墳の写真とともに、1号墳には墳丘径40m、墳丘頂部径16mという記載が、2号墳には墳丘径13.3m、墳丘頂部径6.3mという記載が見られる(赤穂市教育委員会・赤穂市文化財調査委員会編1969)。

川西宏幸氏は、全国の円筒埴輪を検討した際、瀬戸内地方の埴輪にも言及している(川西宏幸1978・1979)。播磨におけるⅢ期の円筒埴輪編年の指標として、蟻無山1号墳採集の円筒埴輪を挙げ、「兵庫県蟻無山古墳から採集されている須恵器は、国産品であるとすれば、TK七三型式に入るようである」と述べている(図5)。また、近辺で同時期の古墳として提示された岡山県造山古墳、神宮寺山古墳の年代を、5世紀前半と考えている。ちなみに播磨地域では、Ⅱ期が神戸市五色塚古墳、Ⅳ期が姫路市宮山古墳と赤穂市奥山4号墳、Ⅴ期が神戸市亀塚古墳、

備中	備前	播磨	河内	大和
			茶臼塚	
	金蔵山	五色塚	萱振1 津堂城山 長原5 えのき塚 花岡山	富雄丸山 日葉酢媛陵 マエ塚 東大寺山 崇神山 櫛神山 景行陵 メスリ山 巢山
造山	神宮寺山4	蟻無山	堂山 心合寺山 仲津媛陵 鍋室塚 古鳥塚 宮山 墓山	室大基 島ノ山 ナガレ山 瓦塚1 市庭 平塚1 コナベ
千寺西朱赤 人の千 塚山平足駄岩	妙小森四築 義山山山 辻5山	鹿歩山 牛文茶白山	允恭陵 長持山 唐櫃山 応神山 アリ山 野中山 青野山 白鳥山 黒姫山	ウワナベ 平塚2 河合大塚山 坊塚 屋敷山 披上籬子塚
殿山東尾根 半依3	岩二塚 田1山	西片 宮山 山尾塚	芝山 大賀世2・3 仲哀山 番上山 仁賢倉 矢倉 仁賢倉 峰々塚 安閑皇后陵 清寧陵 敏達陵	新沢175 宣化陵 飯豊陵 狐井城山 河合城山 黒田大塚 星塚 岩室池 西山塚 西乗鞍 石見 市尾墓山

図5 川西宏幸氏によって行われた埴輪の広域編年(川西1979を改変)

明石市中尾古墳、姫路市片山古墳、たつの市西宮山古墳が挙げられている。

松岡秀夫氏は、旧赤穂郡における14基の古墳から出土した埴輪を論及するなかで、蟻無山1号墳についても詳説している。それによると、蟻無山1号墳は、径57m、高さ8mの造出しをもつ円墳とされ、埴輪片に混じってTK73型式よりさらに一段階以上古いと見られる須恵器数片が採取されているとする。埴輪は実測図を掲載し、突帯の形を基準とした往時の時期分類から、Ⅲ期からⅣ期のものが混在して見られると評価し、後世における埴輪の供献の可能性を指摘している(松岡1979)。



図6 『赤穂市史』記載の蟻無山古墳群測量図(赤穂市1984)

1981年に刊行された『赤穂市史』第一巻では、蟻無山1号墳出土遺物の写真が一部掲載されるとともに、「標高七〇・四mの蟻無山の山頂にある底径五二m、頂径一八m、高さ七mの円墳である。南面に幅三メートル、長さ一五メートルの造出しが設けられていて帆立貝式の系譜ともいえる形をしている」とし、測量図とともに基礎データを示された(松岡1981)。埴輪にも言及しており、円筒埴輪、朝顔形埴輪、家・馬・盾・蓋形といった形象埴輪の出土を明らかにしている。馬形埴輪については、鏡板や轡はなく古式の形相を示しているとし、さらに黒斑のある埴輪片の存在を、窖窯の渡来以前に古墳が造られた根拠にしている。

『赤穂市史』第四巻では、かなり詳細な記述がなされている(松岡1984)。葺石についても言及し、「葺石は小児頭大の丸い河原石である。墳丘の頂上部を除いて周囲一面に並べられていたようであるが、著しく崩れていて、墳丘の西側にその面影が残っているにすぎない。」とした。円筒埴輪については100点を超す破片が採取されているとし、図137の4(本書図17の32)については焼成が硬く須恵質ともいえる焼き上がりとして評価し、「埴輪形式V」(5世紀末～6世紀中葉)に位置づけている。また、蓋形埴輪片と推定した図139の4(本書図17の36)の文様を「すいじ貝」と評価し、大阪府仲津姫陵古墳出土円筒埴輪の文様との類似性をすでに指摘している点は重要である。本書図21の65の土師質礫の類例も、大阪府野中古墳に求めている。なお、墳丘の東南隅墳頂より土錘が20点出土したと報告されているが、詳細は不明であり、後に刊行された『有年考古館蔵品図録』(西播流域史研究会編1991)では副葬品と認定可能なかどうか、保留的な態度が採られている。さらに松岡氏は、蟻無山古墳群採集の円筒埴輪について、突帯の断面形状から大部分をⅣ形式と評価して5世紀中葉～末としたが、これを埴輪の追葬と理解し、古墳の時期としては採集須恵器の年代である5世紀前半と評価した。

蟻無山2号墳は底径13.3m、頂径6.3m、高さ約20cm～2m(斜面に立地)の円墳で、墳丘の封土はほぼ流失したとする。小学生らによって盗掘され、遺構は完全に破壊されたが、

その後、出土品の一部が回収されたと記載されている。ここからは完形の須恵器壺2点、罍1点（図21の68・69・70）、鉄刀（長さ53.3cm、幅3cm）が出土したとするが、鉄刀は実測図が『赤穂市史』第四巻に掲載されたものの（図21の71）、『有年考古館蔵品図録』では所在不明とされ、現状で確認できる有年考古館収蔵品との比較も困難である。年代としては蟻無山1号墳より新しい5世紀後半に位置づけられている。蟻無山3号墳は、底径17.6m、頂径6.4m、高さ2mの円墳で、河原石による葺石が見られるとし、蟻無山1号墳の陪塚の可能性が指摘されている。この段階で、蟻無山古墳群の概要がようやく把握されたとと言える。

岸本道昭氏は西播地域の首長墓とその動向を明らかにする中で、千種川流域では蟻無山1号墳以降、首長墓と呼ぶべき古墳の実態が不詳となるとしたが、その際に蟻無山1号墳を古墳時代中期中葉～後葉と位置づけている（岸本1985）。さらに、蟻無山1号墳の築造は、畿内中枢と直接的関係を持った結果、従来にない大型円墳が造り得たと推測した。また、蟻無山3号墳の復元位置を、『赤穂市史』第四巻と比べ若干西側に修正している。

櫃本誠一氏は千種川下流域の古墳についてまとめるなかで、蟻無山1号墳についても触れている（櫃本1988）。蟻無山1号墳は、相生市塚森古墳、上郡町中山1号墳などと様相が類似するとし、播磨の他流域とは異なり、古墳時代中期になっても千種川下流域を統括する首長が出現せず、播磨平野の首長による徹底した支配が及んでいなかったと結論付けた。

有年考古館所蔵資料を掲載した『有年考古館蔵品図録』において、岸本道昭氏は、採集遺物の詳細な報告ののち、これらが造出し部での葬送祭祀に伴って供献されていたものと推定している。また加古川市カンス塚、姫路市宮山古墳、たつの市（旧御津町）綾部山1号墳、相生市宿禰塚古墳といった同時期の円墳に触れ、前方後円墳を見ない千種川流域では、初めての地域的統一をなした首長墓であった可能性を指摘した（西播流域史研究会編1991）。

松本正信氏は、播磨の前方後円墳に触れるなかで、6・7期になると前方後円墳が築造されないのみならず、卓越した規模の古墳も姿を消してしまおうとした。そして径30～40mの円墳（造出しが付くこともある）がほぼ旧郡単位の密度で築造されていることを指摘するなかで、旧赤穂郡では蟻無山古墳（註：1号墳。径39.5mとする）に言及している（松本1992）。旧揖保郡では宿禰塚古墳が、旧飾磨郡では宮山古墳が、旧印南郡では平荘カンス塚古墳がそれぞれ挙げられ、これらの古墳には古式の須恵器だけでなく豪華な副葬品があるとし、蟻無山1号墳の主体部についても同様と推定している。そして、これらの勢力が連合して中・西播磨を統治したと述べた。ちなみに、蟻無山1号墳は6・7期に位置づけられているが、『前方後円墳集成』の6期とは、円筒埴輪編年のIV式にあたり、須恵器のTK73型式とされる（広瀬1992）。7期は円筒埴輪編年IV式で、TK216～208型式とされている。

岸本一宏氏は、播磨において初期須恵器の出土した古墳の1つとして蟻無山1号墳を挙げている（岸本一宏1994）。播磨の古墳から初期須恵器が出土した事例が8例しかなく、「初期須恵器を宝器的に扱ったと同時に、渡来人ときわめて密接な関係にあった人物の可能性が高いと考えられる」とした。

植野浩三氏は千種川中・下流域の初期須恵器を論じる（植野1994）なかで、蟻無山古墳群出土遺物について触れ、1号墳で採集された須恵器に「コンパス文」に通じる文様があるとし、大阪府大庭寺遺跡出土須恵器（TK73型式）との共通点を見出している。一方、2号墳で採集

された須恵器については、後出のものとしてTK216型式に充て、近隣の田中奥山（奥山古墳群）採集の須恵器をTK23型式に充てている。なお、蟻無山1号墳採集の須恵器が、陶邑窯でも見られない特徴的な型式のものであることや、蟻無山古墳群採集の土師質礫の存在が生産地に近い可能性を示すことなどから、有年地域では直接・間接的に朝鮮半島と交渉し、須恵器生産が行われていた可能性が高いと論じた。また、相生市宿禰塚古墳出土須恵器と比較し、蟻無山1号墳出土須恵器をより古相に位置づけている。埴輪についても若干触れており、一部には窯窯焼成のものを含んでいると述べた。

櫃本誠一氏は、播磨の古墳編年を編むなかで、蟻無山1号墳を5世紀中葉とし、赤穂市みかんのへた山古墳より新しく、赤穂郡上郡町中山1号墳より古い位置に措置している（櫃本誠一1995）。

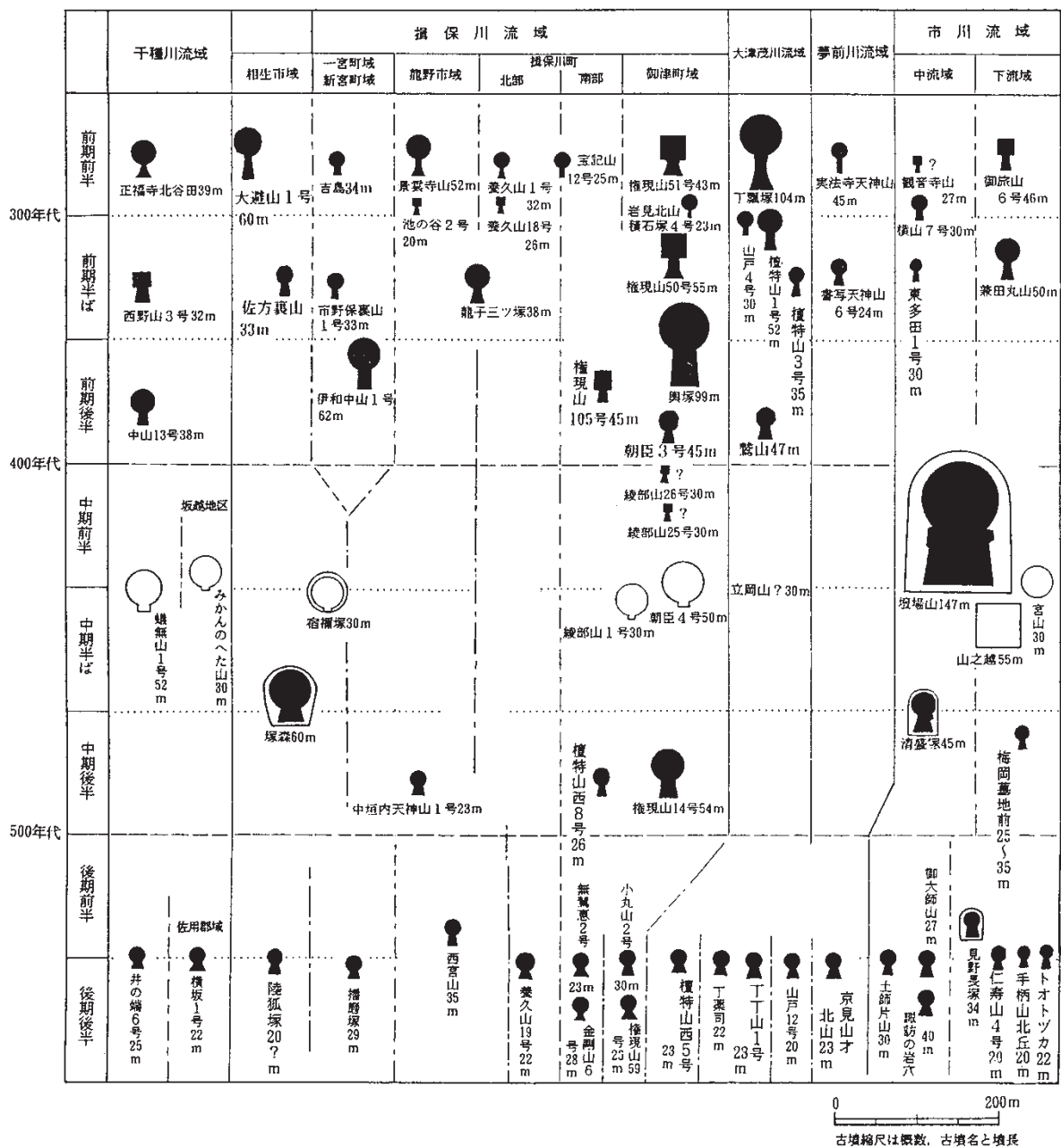


図7 岸本道昭氏による播磨の大型古墳編年案 (1) (岸本 2000)

岸本道昭氏は、播磨全域における大型古墳の消長表を作成し（図7・8）、蟻無山1号墳を中期前葉～半ばに位置づけた（岸本2000）。また、その消長表を題材に開催されたシンポジウム「前方後円墳からみた播磨」では、近隣地域における同時期の古墳として、赤穂市みかんのへた山古墳、相生市宿禰塚古墳、たつの市綾部山1号墳、たつの市朝臣4号墳、姫路市宮山古墳などを挙げ、古墳時代中期になると播磨全体で巨大円墳及び帆立貝形古墳が出現することを指摘している（岸本2001）。また、姫路市宮山古墳、姫路市池尻2号墳や加古川市カンス塚古墳では、初期須恵器が石室内に副葬されていることから、渡来人との密接なかかわりを考えている。

最近では、上郡町竹万宮ノ前遺跡から出土した初期須恵器の推定復元に、蟻無山古墳群採集須恵器が使用された（上田2009）ほか、中久保辰夫氏により蟻無山古墳群採集須恵器が再実測のうえ検討されている（図9。中久保2010）。中久保氏によれば、蟻無山1号墳採集の器

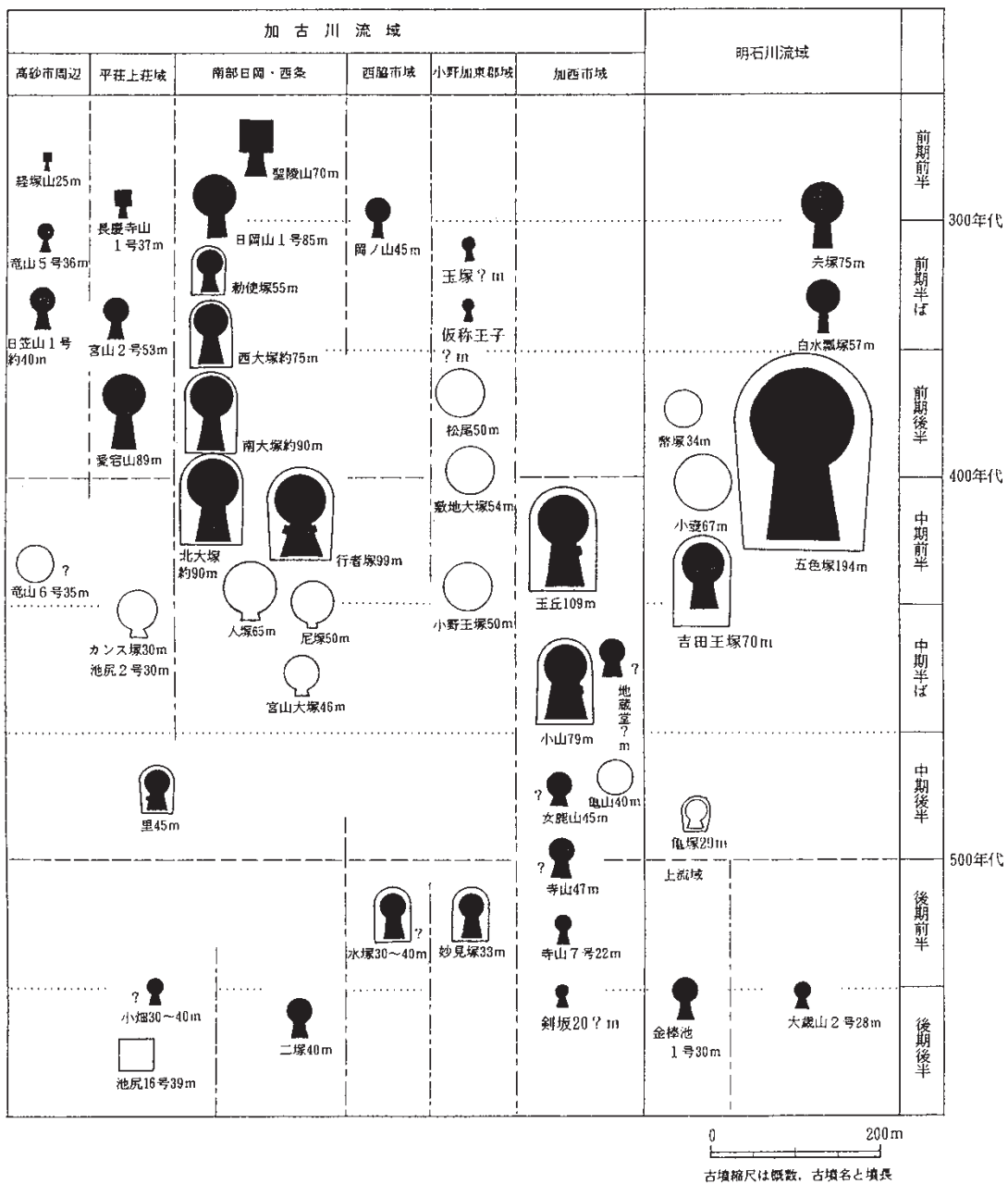


図8 岸本道昭氏による播磨の大型古墳編年表（2）（岸本2000）

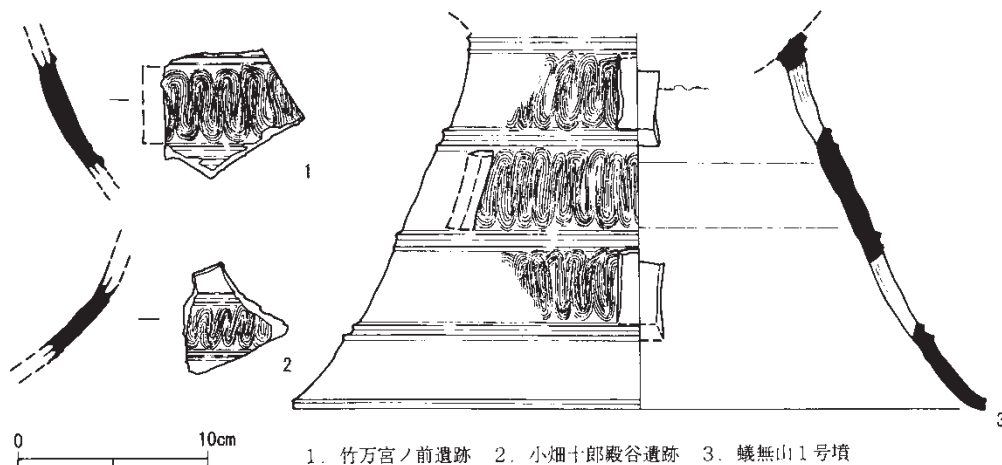


図9 特異な波状文の類例 (中久保 2010)

台に描かれた特異な波状文は、大阪府の須恵器一大生産地である陶邑窯の製品には認められず、一方で最近報告された上郡町竹万宮ノ前遺跡、たつの市小畑十郎殿谷遺跡、加西市小谷遺跡や大阪府寝屋川市讃良郡条里遺跡から出土した初期須恵器の波状文と類似しているという。特に上郡町竹万宮ノ前遺跡出土資料は、胎土も酷似していて同じ窯で焼かれた可能性が高いとした。既に述べたように、蟻無山古墳群の山麓に位置する有年原・田中遺跡出土の初期須恵器には焼成失敗品があり、近隣に初期須恵器窯があった可能性が示唆されている（藤田 1994）ことも、これを傍証しよう。

3 調査成果

(1) 測量調査

間伐と測量調査の方法

測量調査を実施するにあたって、まず広く間伐を行い、古墳の所在把握を行った。『赤穂市史』では3基の古墳が報告されており、今回の測量調査もそれを追認することとなった。ただし蟻無山1号墳及び2号墳については明確な墳丘や周溝を確認できたが、3号墳は伐採後にかろうじて周溝や墳丘を視認できる状況であった。これは、後世に設置された登山道や植樹の造成工事により、一部が破壊されてしまったことが原因と考えられる。なお、登山道が円弧を描く中心部分も、尾根稜線上にあたりわずかな隆起を見せるが、登山道設置前を描いたと思われる『赤穂市史』の図面からは、古墳の存在を判断できない。今後の調査を待つて保留としておきたい。

間伐が概ね終了し、古墳の位置確定が出来た段階で、まず3級基準点2点をGPS測量によって蟻無山古墳群内に打設し、それをういて4級基準点を10点配置した。水準は蟻無山古墳群南方約1.15kmのところにある水準点から直接水準測量によって設定している。基準杭等は、民有地であることから永久標識とせず、鋌とした。その後、測量業者との綿密な協議を行い、縮尺1:100の図面上で、違和感のない等高線を発生させることができる程度の測点数の確保、

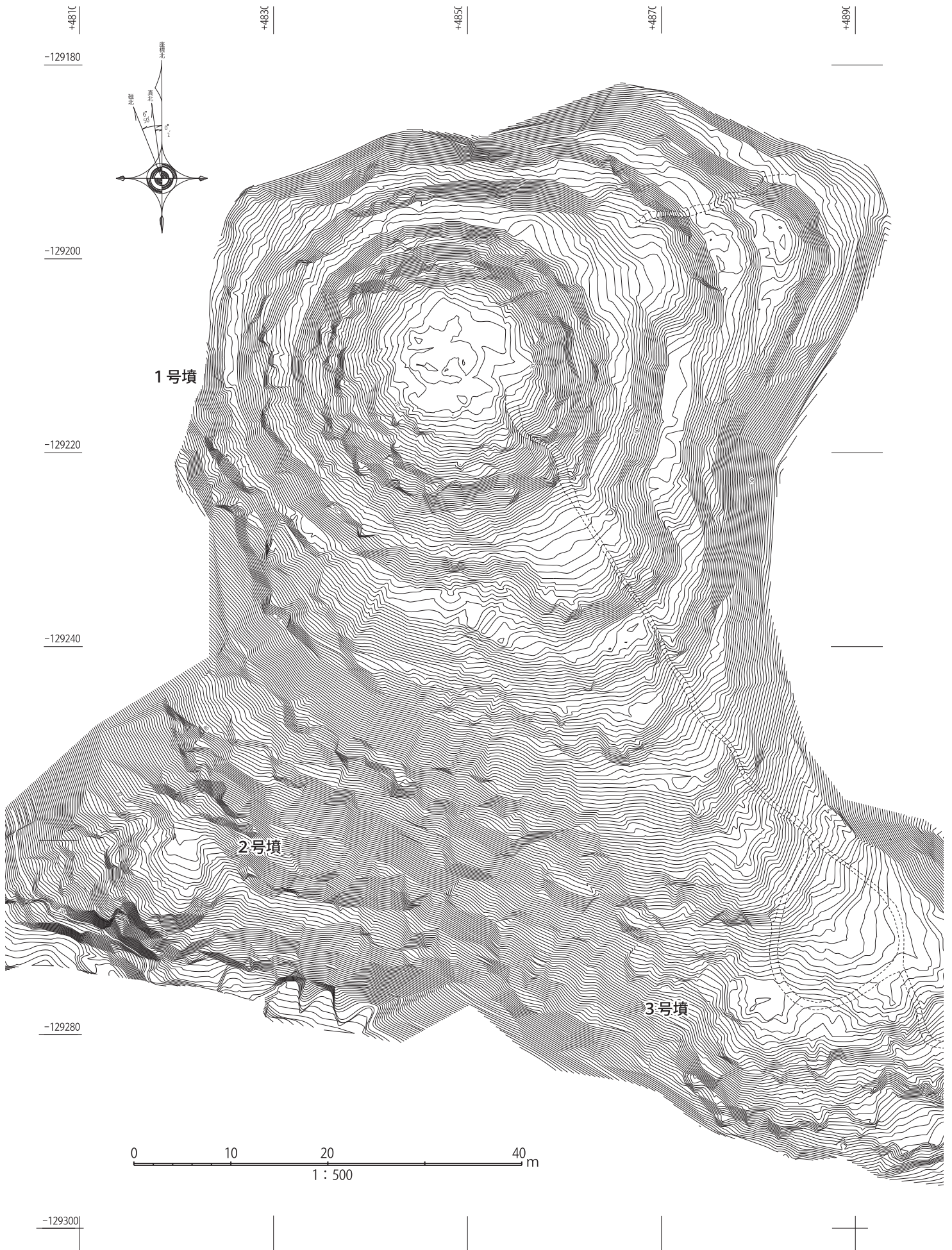


図10 蟻無山古墳群 測量図 (S = 1 : 500)

地形変換点の指定とその観測方法を指示した。また逆に、古墳の形状に大きな影響を与えないと考えられた斜面は、時間短縮のため比較的ラフに測量作業を実施することとした。測量作業は、トータルステーションにより地形の変化を出来る限り反映するように測点を取り、その測点を点群データとして TIN 及び等高線を発生させ、スムージング処理にて地形図を作成した。また、現地にて古墳の墳丘ラインを協議したうえで測量し、古墳形状復元の参考とした。測量面積は 7,890m²、測点数は 5,427 点となった。

蟻無山古墳群の立地

すでに触れたように、本古墳群には最低でも 3 基の古墳が認められる。ただしこれらは近接してあるわけではなく、後述するように蟻無山 1 号墳が山頂部の標高 58～71m にあるのに対し、2 号墳は 24～31m、3 号墳は 34～37m と比較的低い位置の急傾斜地に立地している（図 10）。これまで、ともすると陪塚的な評価がされることもあったが、判断に迷うところであろう。蟻無山 2、3 号墳は、周囲の斜面に比べてわずかではあるが起伏のある場所に築かれており、南斜面に立地するためには、急傾斜ではあるが必然的な立地であったと評価できよう。

なお、蟻無山 1 号墳からの眺望は良好で、北は上郡町の平野、西は東有年の平野、東は有年原、有年牟礼の平野が一望できる。

蟻無山 1 号墳（図 11）

『赤穂市史』にて全長 52m、高さ 7m の造出し付き円墳とされた古墳である。測量調査の結果、蟻無山 1 号墳には周辺も含めていくつかの平坦面及び段状の地形が見られ、複雑な形状を呈していることがわかった。特に東側については、東の奥山との間の谷地形までいくつかの段状地形があり、いつのころかわからないが、人工的な改変を大きく受けていることが判明した。当然ながら、古墳そのものについても後世の改変を考える必要が出てくるわけであるが、ここではひとまず置いておき、蟻無山 1 号墳の形状及び範囲確定から検討したい。

蟻無山 1 号墳の墳頂部は、南側が若干崩れているもののおよそ整美な円形を呈し、最高所の標高 71.0m、直径約 16m を測る。墳頂部はほぼフラットであるが、中心部にやや凹凸が見られ、盗掘されている可能性を残す。また現在は樹木があり、いくぶんかの攪乱を受けている。この墳頂部から高さ約 7m の斜面を下ると、周囲に約 2m の幅にわたり等高線が粗くなっている部分があり、平坦面が円丘部をぐるりと巡っていることがわかる。ここまでの円丘部分のみで、直径約 34m、高さ 7m を測り、平坦面の標高は、およそ 61～62m である。南西側がやや崩れているものの概ねフラットと言える。

この平坦面には、南東方向および北東方向に矩形の張り出しがあり（以下、「南張出し」「東張出し」と呼ぶ。）、南張出しは長さ 11m、幅 10m の範囲、東張出しは長さ 11m、幅 12m の範囲に平坦面が広がっている。南張出しは、西隅角部が若干崩れているものの良好に遺存し、前端部及び側面が直線状を呈する。一方、東張出しは、南側のそれよりも平坦面の傾斜が若干きつく、また北側面はやや崩れているように感じられる。

次に、この平坦面から 3m ほど斜面を下りると、もう一段等高線の粗い部分があり、標高 58～59m のところで平坦面がぐるりと巡っていることがわかる。この平坦面は幅 1～2m を測るが全体としては一定しておらず、例えば北西側では 5m ほど広がっている部分が認められるほか、南西側では幾らかの崩壊が見られる。さらにこの平坦面は、南張出しの周囲を巡って

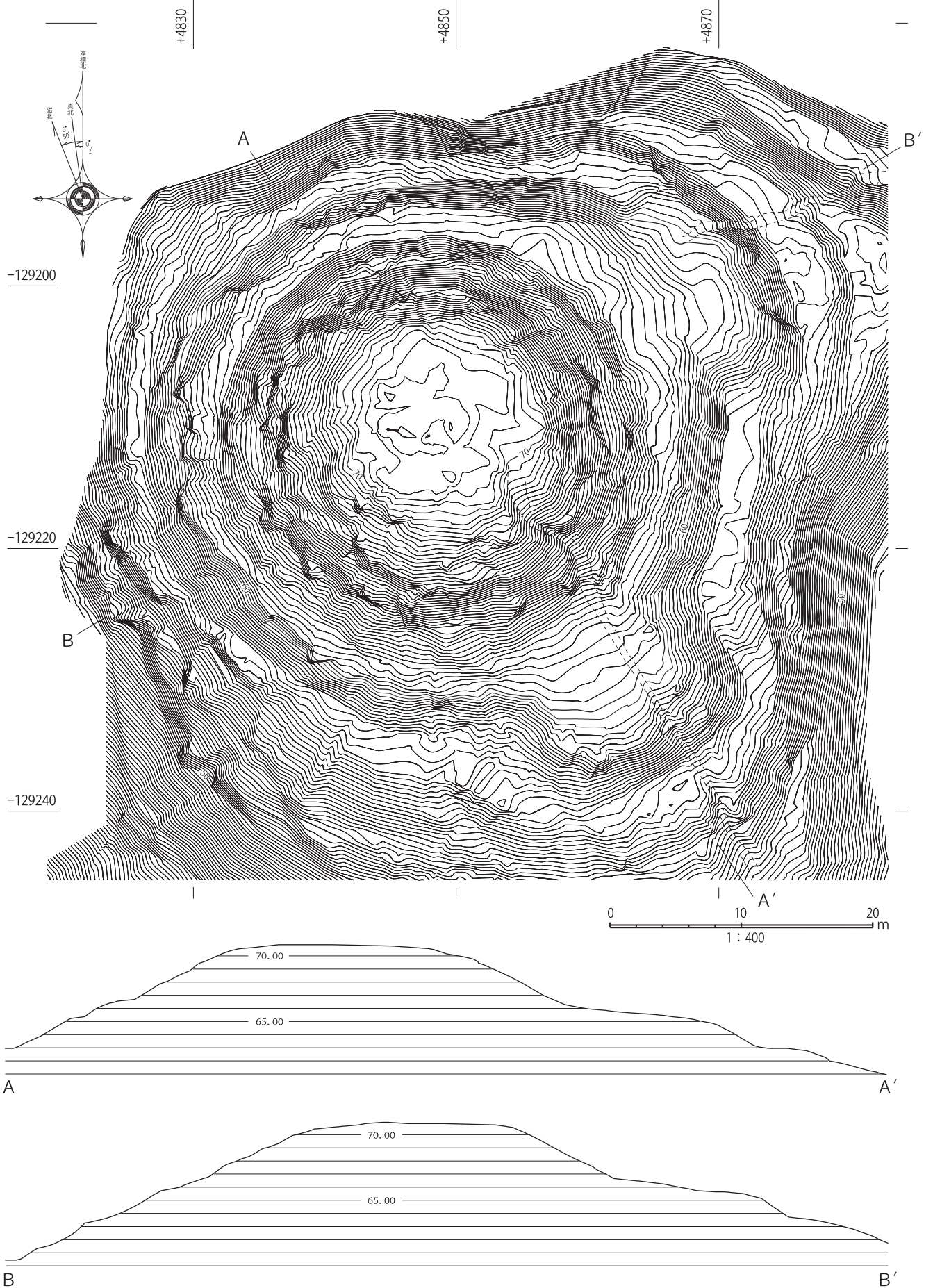


図11 蟻無山1号墳 測量図 (S = 1 : 400)

いるものの、東張出しには遮られる形で完全に一周しているわけではない。

この平坦面より外周は、概ね自然の傾斜面へと繋がっているが、南張出し部分は微妙な溝状地形を隔てて若干の盛り上がりを見せている。また東張出し部分についても、幅 50cm ほどの浅い溝を隔ててより下の平坦面へと続いており、地形を画しているように思われる。東張出しよりさらに東方向には、いくつかの平坦面が山城の曲輪状地形を思わせるように認められる。

蟻無山 1 号墳の古墳形状を確定する際に問題となるのは、南、東張出しの評価であろう。まず、南張出しについては、その整美な形状から、いわゆる帆立貝形古墳の突出部と評価して間違いないと思われる。しかし蟻無山 1 号墳東張出しは、この張出し以東にもいくつかの段状地形が認められ（図 10）、別の古墳となるか、もしくは後世の改変を受けていることは確実である。『赤穂市史』第一巻では、鶴ヶ堂城の間違いである可能性を指摘しながらも、「小鷹山城」が蟻無山 1 号墳上にプロットされている（石田 1981）。また、かつての往来は、地形的に見て蟻無山古墳群西の千種川沿いではなく、蟻無山古墳群のある丘陵東の鞍部を用いて行われていたはずで、この段状地形は、蟻無山 1 号墳とは別の古墳となるか、中世山城もしくは近世近代の開墾に伴う地形であると考えられる。しかし、東張出しについては、南張出し上面の平坦面、つまり蟻無山 1 号墳のテラスと同一レベルで東張出しに続いていることを重視し、古墳の一部と評価したい（図 12）。これらの張出し周囲にめぐる平坦面は、古墳の形状を画するために自然地形を削り出した加工面と考え、円筒埴輪が巡っている可能性は捨てきれないが、古墳の範囲としては除外しておきたい。ちなみに先述したように、両張出しの端部にはわずかながら溝が見られ、古墳形状を画するものと評価される。

さて、南張出しと東張出しには、自然地形を削り出した加工面との関係について、大きな差異が認められる。つまり南張出しについては、この削り出しの加工面がぐるりと周囲を巡っている一方、東張出しには加工面がぶつかり無くなっているのである。このことから、南張出しは本来の古墳の形状の一部であり、東張出しはそれに付属する施設であると考えられる。

ここで、改めて蟻無山 1 号墳の形状を確定するならば、蟻無山 1 号墳は、二段築成で、南側に突出部をもち、東側に造出しをもつ「造出し付き帆立貝形古墳」と言える（図 12）。帆立貝形古墳は、前方後円墳との形態的類似性から「帆立貝形前方後円墳」と呼ばれることもあるが、本例では前方部にあたる南張出し部分が著しく小さく、また隆起することなくテラスに留まっていることから、帆立貝形古墳と呼び、前方後円墳における前方部に当たる南張出しを「突出部」、後円部にあたる部分を「円丘部」、東張出しを「造出し部」と呼ぶこととする。

その結果、蟻無山 1 号墳は、全長 52m、円丘部頂径 16m、円丘部径 44m（テラスまでの円丘部径 34m）、円丘部高 12m（テラスまでの円丘部高 7 m）、突出部長 8m、突出部幅 18m、突出部高 3m、造出し部長 10m、造出し幅 12m、造出し高さ 3m を測る。

ちなみに蟻無山 1 号墳には、墳頂部下の斜面以下で円礫が多く確認されており、『赤穂市史』でも葺石と認識されて西側斜面に多く見られるとされていた。伐採後は、北側斜面に特に多く認められ、大きさは西側斜面で拳大以下のものが見られたものの、それ以外の場所では概ね拳大～小児頭大のものが一般的であった。

埋葬施設については不明としか言いようがないが、北側斜面の削り出し加工面付近で凝灰岩片が認められており、石棺であった可能性もある。

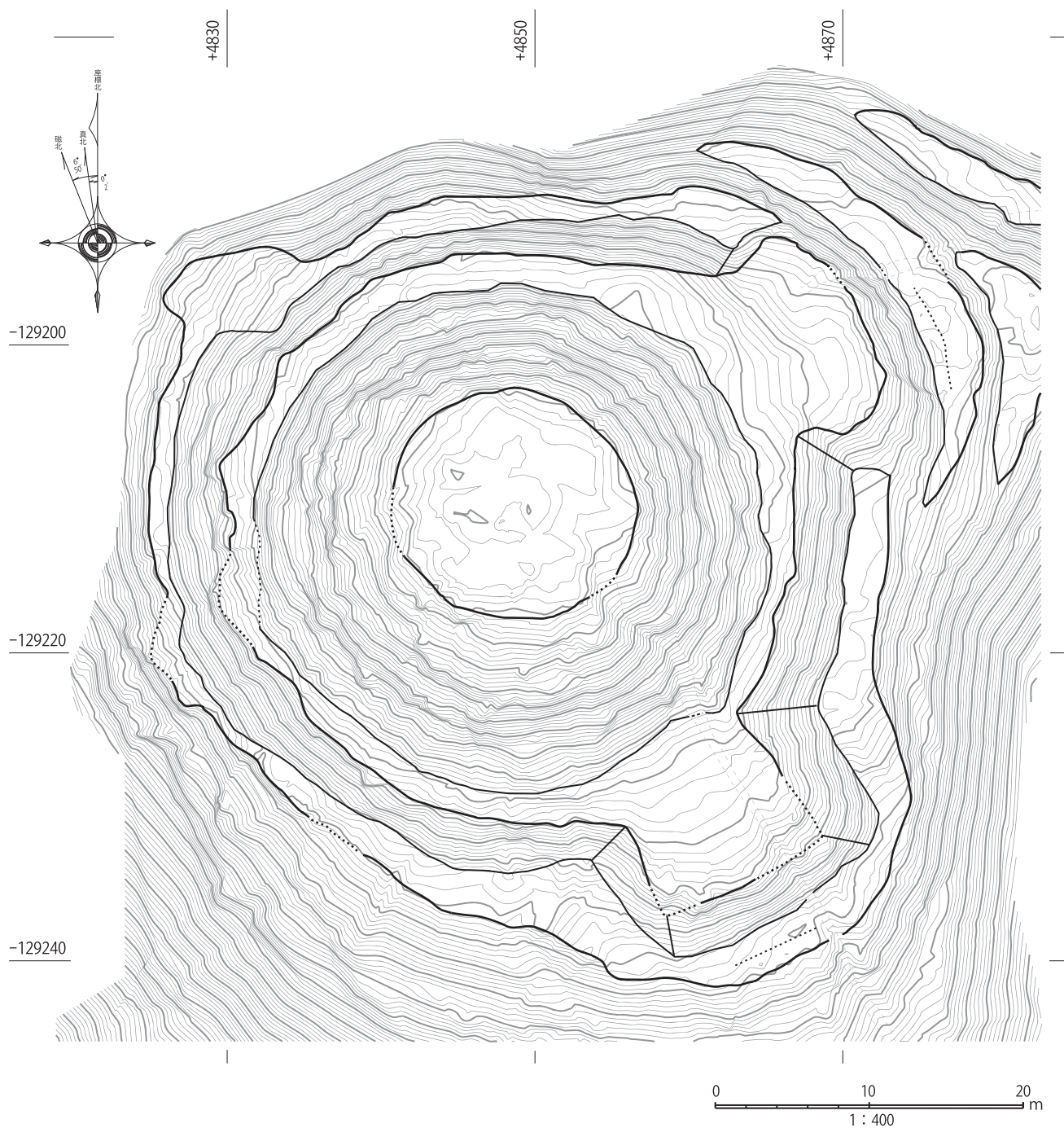


図12 蟻無山1号墳 墳丘推定図 (S=1:400)

蟻無山2号墳 (図13)

蟻無山2号墳は、蟻無山1号墳より南30mの距離にあり、標高43mの位置にある。墳丘、周溝ともに古墳として認識できるが、南側が崖状になって削り取られているとともに、墳丘南西部に大きな攪乱が認められている。小学生により発掘されたとの記載どおり墳丘の崩れはあるが、どうやら中央部が完全に破壊されているわけではなさそうである。墳頂部径約5m、墳裾部径約10m、高さ6mを測る。周溝は、山側斜面のみ埋没していて判別できないが、東西両側では明瞭に確認され、古墳規模を確定することができる。ここからは図21の68～71の出土が知られている。なお、葺石らしき石材は認められない。



図13 蟻無山2号墳 墳丘推定図 (S = 1 : 400)

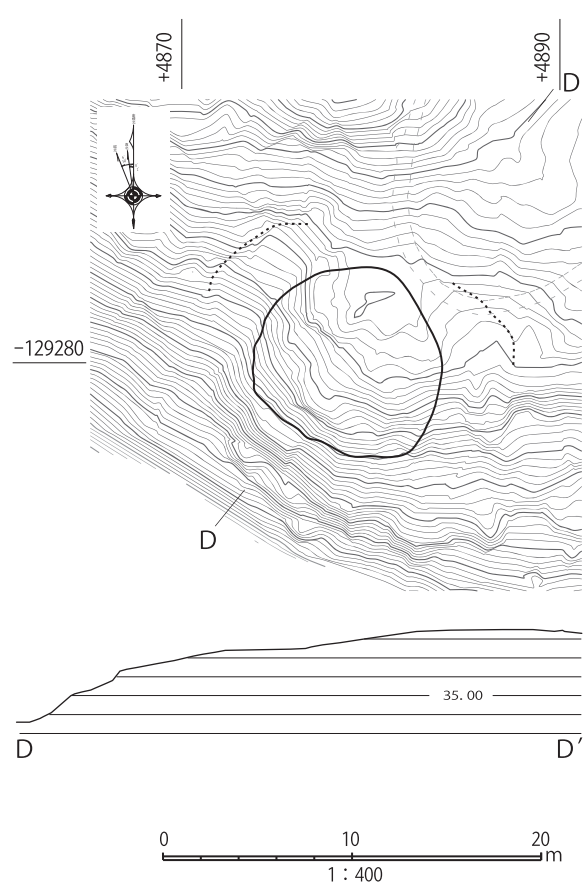


図14 蟻無山3号墳 墳丘推定図 (S = 1 : 400)

蟻無山3号墳 (図14)

蟻無山1号墳より南に約40m、蟻無山2号墳より東に約50mの距離にあり、標高38mの位置にある。伐採を実施してようやく古墳の存在を判断したもので、特に北から東側の墳丘及び周溝が、後世に改変されているようである。ただし東西の周溝は一部ではあるが明瞭に判断でき、古墳の規模を推定できる。推定の墳丘規模は、墳頂部径約5m、墳裾部径約7m、高さ2mを測る。『赤穂市史』で指摘されていた葺石状の石材は認められない。

(2) 採集資料

松岡秀夫氏により収集された蟻無山古墳群採集遺物は、有年考古館(松岡秀樹館長)に収蔵され、その実測図及び写真は、西播流域史研究会により編まれた『有年考古館蔵品図録』に掲載されている(西播流域史研究会編1991)。しかし本書の作成にあたり、有年考古館より収蔵資料を借用して観察した結果、未掲載の遺物があったこと、形象埴輪に新たな器種が見つかったこと、図面修正が必要なものがあったことから、一部について再実測を行うこととした。ただし、初期須恵器1点(61)については、中久保辰夫氏による再実測がすでに実施されていた(中久保2010)ことから、中久保氏より原図を借用し、再トレースを実施した。

有年考古館収蔵資料には、墨書きで直接注記がされており、ほとんどは「蟻無山」「アリナシ山」という記載がなされているが、「アリナシⅡ号」「蟻無山麓」「蟻無山西側陪塚出土」「アリナシ山南中腹」などの注記も見られる。『有年考古館蔵品図録』では、「アリナシⅡ号」の2点(68・

70)は蟻無山2号墳のものとし、「蟻無山西側陪塚」1点(69)も、同じ帰属の可能性を示唆しており、本書でもその評価に問題はないと考えている。なお、資料採集日の入っているものには、昭和22年、昭和23年、昭和27年、昭和36年、昭和40年とあることから、一度に採集されたものではなく、収集資料の蓄積によって現在の収蔵資料が形成されていることがわかる。

また、現在有年考古館には、蟻無山古墳群出土とされる鉄製品も収蔵されている。『有年考古館蔵品図録』には掲載されていないが、鉄刀片が最低3個体分、ヤリガンナ先端部1点、鉄鏃3点以上(方頭式1点、柳葉式1点含む)、U字状鋤先片1点が認められる。これらのうち鉄刀片の2個体分には、白色のポスターカラーで「アリナシⅡ」と記載されており、『赤穂市史』に掲載された、小学生により発掘された蟻無山2号墳出土遺物の可能性が考えられるが、保存処理済みで対照が困難であった。それ以外の鉄製品も、出土が確実とは言えないため、その掲載の重要性を鑑みて、本書ではあえて取り扱わないこととした。

また、測量調査中に採集された資料及び赤穂市教育委員会所蔵の「伝・蟻無山古墳群採集遺物」を新たに掲載する。伝・蟻無山古墳群採集遺物は蓋のない木箱に納められていたもので、混入は充分考えられる状況であった。しかし円筒埴輪1点に蟻無山古墳群採集の墨書が認められ、またほかの円筒埴輪も胎土、技法的に近似したものであったため、ほとんどが蟻無山古墳群の資料であると判断し、3点を掲載した。その一方で、須恵質の円筒埴輪基底部片が2個体分見られたが、蟻無山古墳群では、これまでに須恵質の資料が1点も認められていないため、保留の立場をとって掲載しなかった。

なお、『有年考古館蔵品図録』に掲載されているものの、すぐに資料が出せない状況にあり、編集期間の関係からも観察する機会を得ることができなかったものや、現在ある実測図で十分な情報を持っていると判断した資料については、『有年考古館蔵品図録』(西播流域史研究会編1991)の実測図を採用している。また、蟻無山1号墳南東斜面で採集されたとされる土錘20点など、古墳に関係ないと判断した資料については掲載していない。

以下、採集資料について記載していく。原則として、円筒埴輪は縮尺1:4、それ以外の遺物は縮尺1:3で掲載しているが、当てはまらない場合はそれぞれスケールを用意している。

報告番号に○印のついたものは、『有年考古館蔵品図録』(西播流域史研究会編1991)の転載である。また「伝」と書かれている資料は、伝・蟻無山古墳群採集遺物である。「採」と書かれているものは、平成22年度の測量調査の際に採集された資料である。

1～5は、円筒埴輪の口縁部である。1以外は口縁端部に面をもつ。1、2、5には黒斑がある。口縁端部に面をもつ3は褐色を呈するが、同一個体のものに黒斑がみられる。4は造出し部テラスから墳頂部にいたる斜面で採集したもので、口縁端部を肥厚させて内面をナデる。5の外面には、3本の刻線で逆三角形の一部が描かれている。

6～13は円筒埴輪の円筒部である。7は造出し部の南くびれ部周辺で採集されたもので、円形スカシが見られる。8、9には黒斑がある。10は他の円筒埴輪と比べて器壁が薄く、タガが小さくて先細りである。11は実見できていない。12はほぼ完周する個体で、黒斑、横ハケが明瞭に残る。ハケを止めた痕跡は見られない。14～28は埴輪の基部である。14は基部がハツられている。内面に粘土帯痕が明瞭に残る。15はわずかに黒斑が見られ、内面を粗くナデ

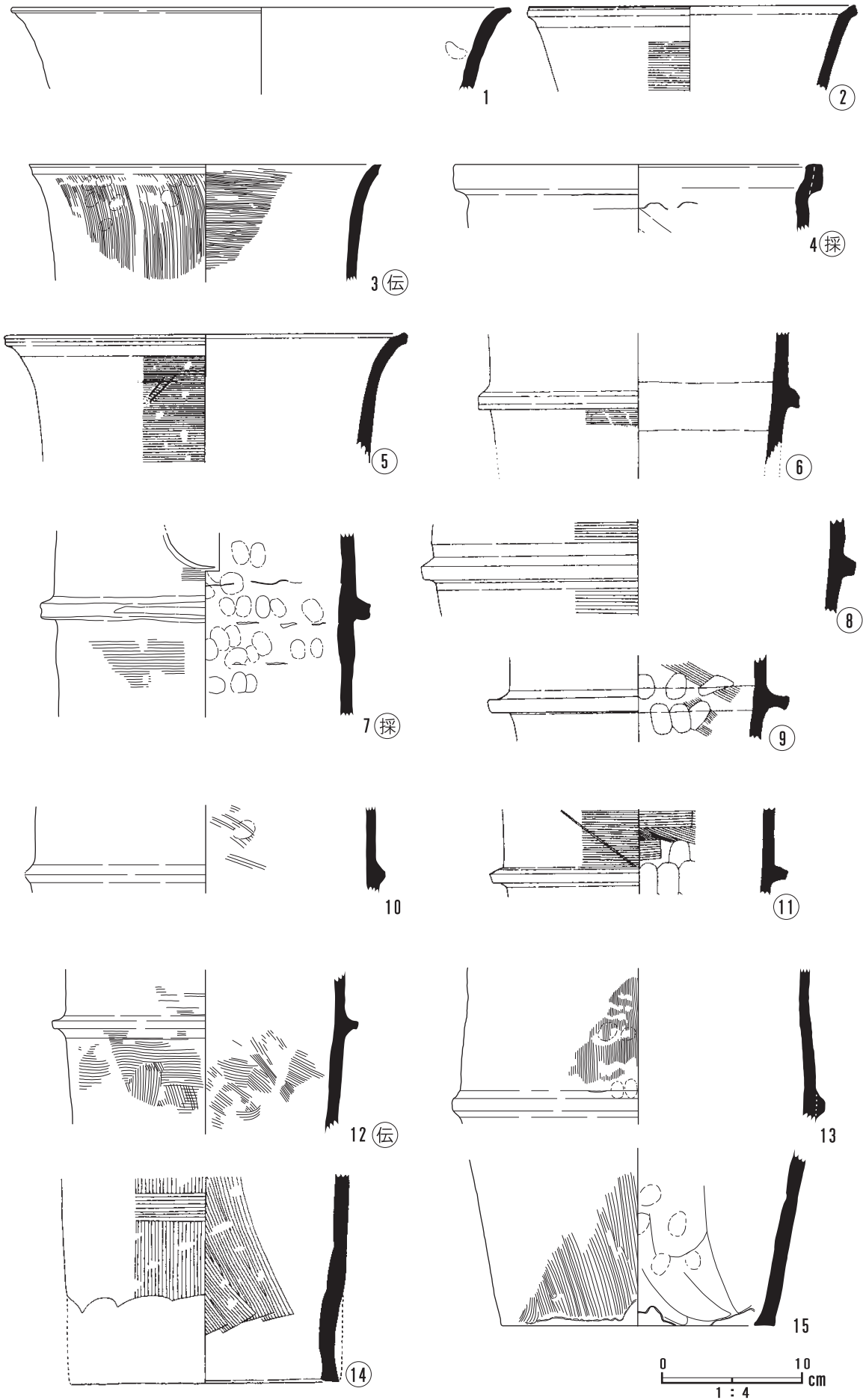


図15 蟻無山古墳群 採集遺物 (1) (S = 1 : 4)

上げる。16は他の基部に較べて直径が小さく、器材埴輪の基部の可能性はある。黒斑が見られ、底部にはタタキ状の板目が、内面には粘土帯痕が若干観察できる。17は最も直径の大きな個体で、復元基部径30cmを測る。1段目に外面調整は行われていない。内面には粘土帯痕とともにナデ上げた様子が確認できる。18・19は同一個体を実測した可能性がある。20は2/3残っている個体で、黒斑が見られる。他の埴輪と比べ著しく細かいハケ原体が用いられているほか、唯一この個体のみ、B種横ハケの止め跡と思われる痕跡が1箇所かすかに見られる。25、26はゆがんだ円筒埴輪の基部と考えられる。25は基部径が小さくタガも低いため、後世の所産かもしれない。27は黒斑の見られる基部で、17と近似した大きさのものだが、ハケは細くない。28は完周する基部で、基底部全周がハツられている。断面が黒色を呈し、焼成が甘い。

29～33は朝顔形埴輪である。29、30は口縁部であるが、30は実見できていない。29の口縁端部は焼成が甘く黒色化している。31は肩部である。32は円形スカシをもつ個体だが、朝顔形埴輪かどうか再検討が必要である。『赤穂市史』などで須恵質と評価された個体であるが、著しく堅緻というわけではなく、これだけで窠窯焼成を推定することは困難である。

34、35は円筒埴輪に刻まれた線刻である。ともに船状の線刻に見えるが、35には34に見られたような櫂にあたる線刻が見られない。34の下端にはヨコナデが見られることから、タガが直近にあると推定される。

36、37は船形埴輪の舷側板部分と考えられる個体である。36は左右で板部分の幅が異なり、前方もしくは後方にゆるやかに立ち上がっていく部分と推定され、下部には底板を接合した痕跡も認められる。外面にはスジガイをモチーフにした文様が施され、わずかに赤色顔料が視認できる。37も同様の個体と思われるが、内面は剥離しており、また図における右端部分が破断面ではなく遺存している可能性もあって、部位の判断は保留としておきたい。

38は両面に文様がみられることから、蓋形埴輪の飾り部であると推定される。

39、40は鳥形埴輪である。39は背中から羽にかけての部位にあたり、胴部と羽部が重ね合わせられている。羽部には2条の沈線で詳細が表現されている。40は鳥形埴輪の頭から首にかけての部位と推定される。円孔が1つ穿たれており、耳に相当すると考えている。黒斑が見られる。

41～48は盾形埴輪である。41は黒斑が見られるとともに、鋸歯文の描き直しがされている。42、43、45、46は同一個体か。黒斑が見られる。44は文様構成と形態から、盾形埴輪ではない可能性も残されている。47は良好に遺存する個体で、鋸歯文を施す。48は唯一赤褐色を呈する焼成不完全な個体で、ハケが消されずに残されているほか、円筒部内面にあたる箇所にはユビオサエが多量に施されている。

49～53は家形埴輪である。49は屋根部、50は妻部、51は柱部、52は壁部、53は床周辺の出帯にあると推定される。49は破損部が線刻に沿っており、3条の縦線が施されていたことがわかる。51は入口部に隣接した隅部分であろう。52の下部には粘土帯が貼り付けられたものと推定される。

54は、円弧を描く文様がみられることから、家形埴輪ではなく靴形埴輪の袋部と捉えておきたい。

55～57は家形埴輪の台部と推定される。55は内面にナデ痕跡がよく残る。56は隅部分に

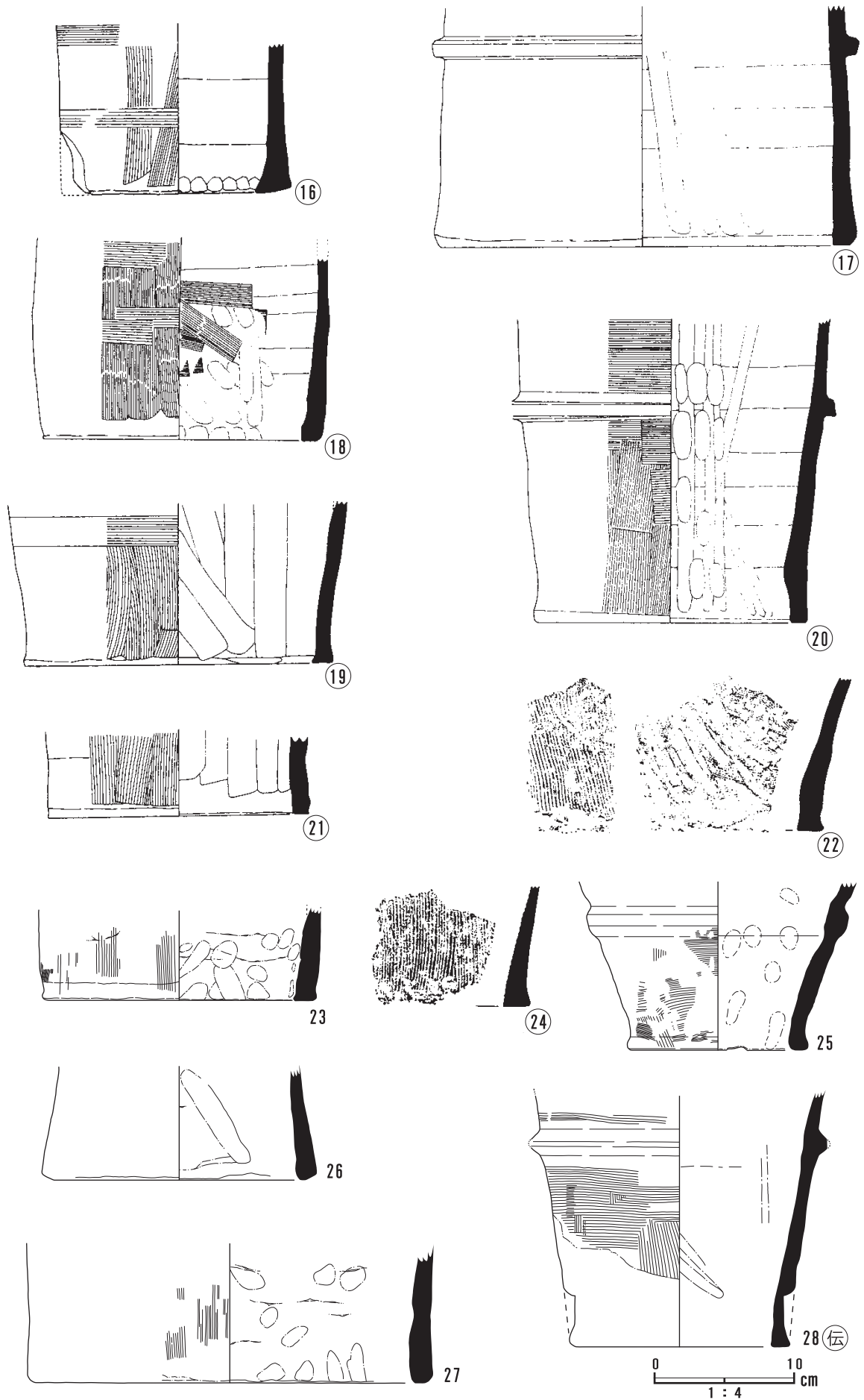


図16 蟻無山古墳群 採集遺物 (2) (S = 1 : 4)

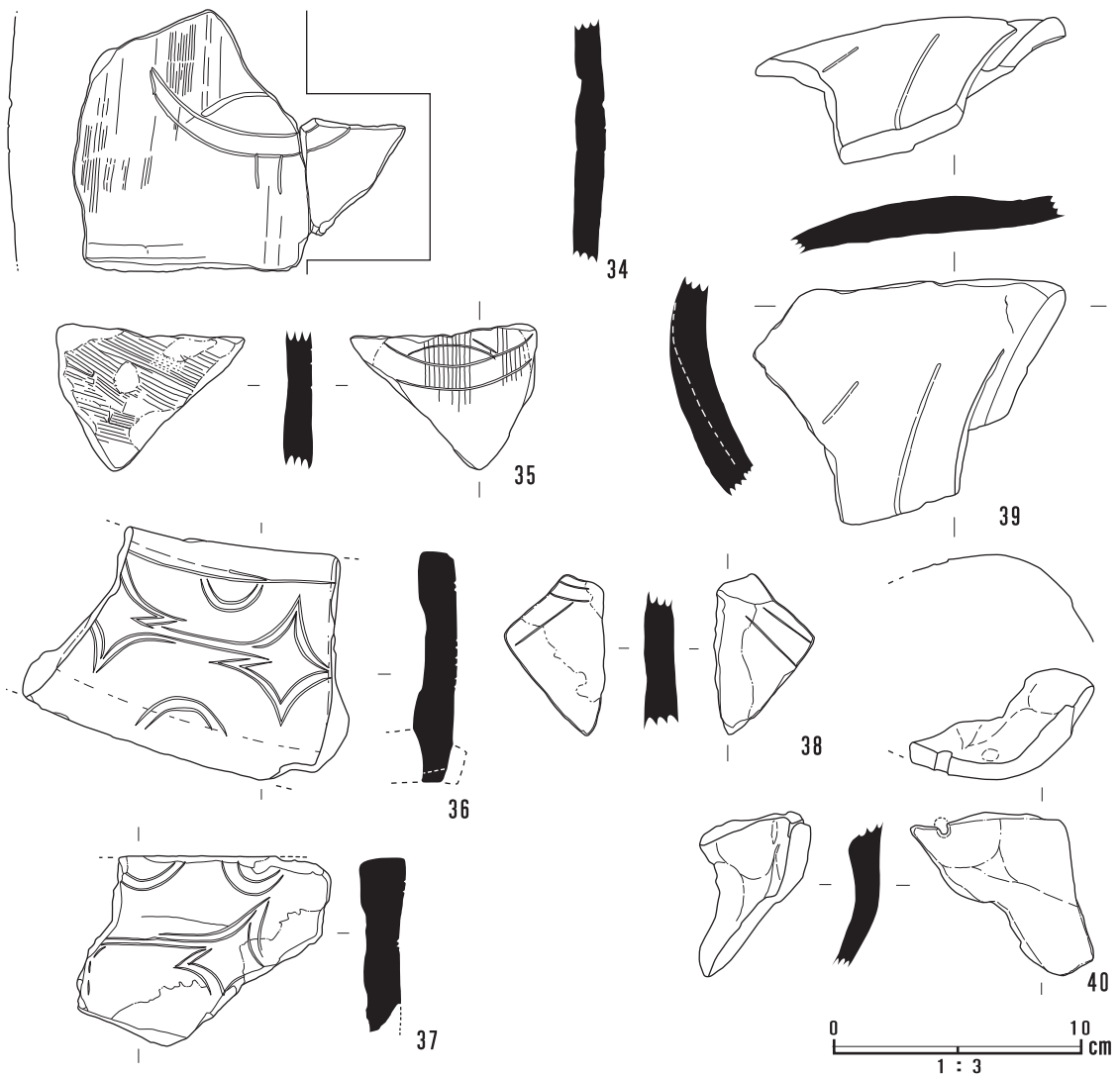
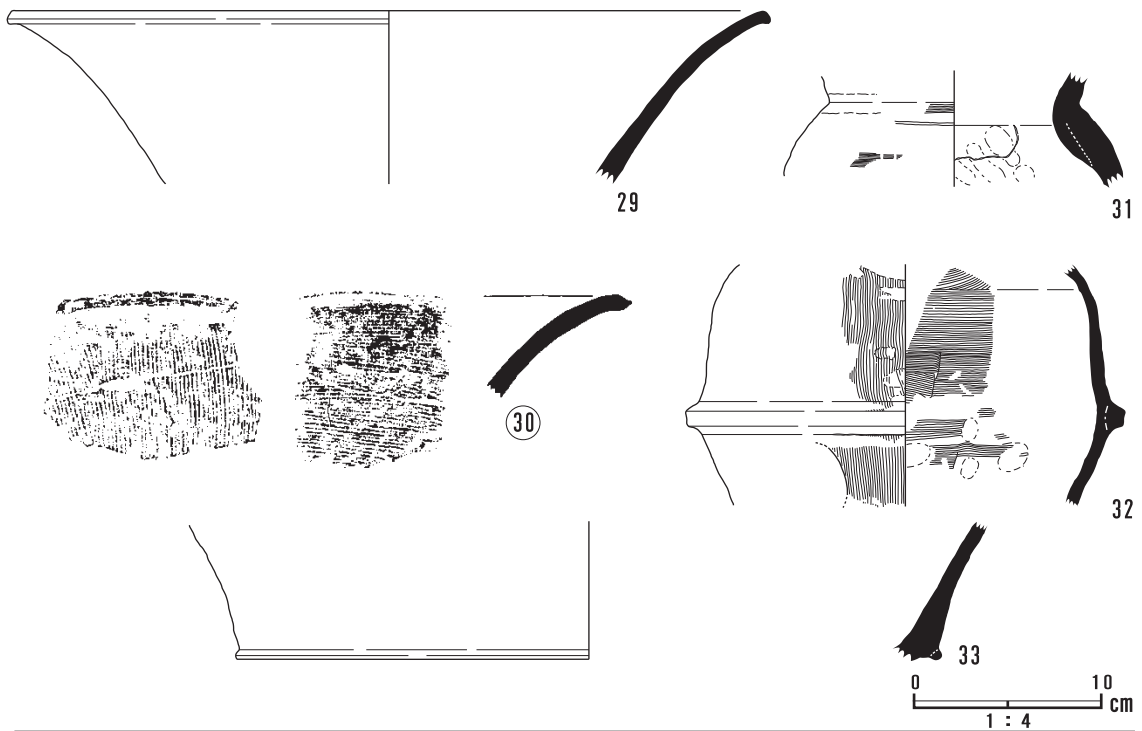


図17 蟻無山古墳群 採集遺物 (3) (29～33はS=1:4、34～40はS=1:3)



図18 蟻無山古墳群 採集遺物(4) (S=1:3)

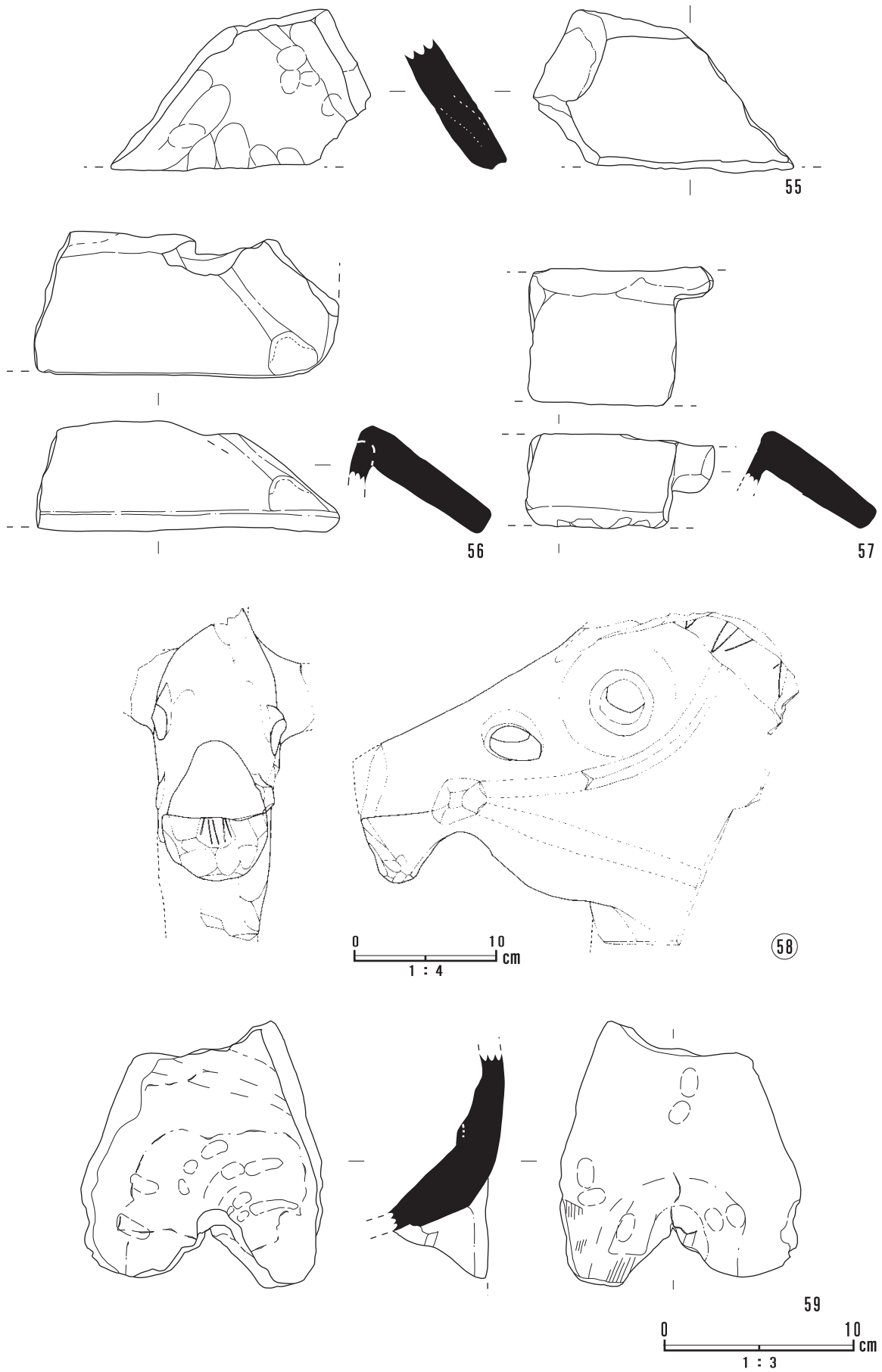


図19 蟻無山古墳群 採集遺物 (5) (58のみS=1:4 それ以外はS=1:3)

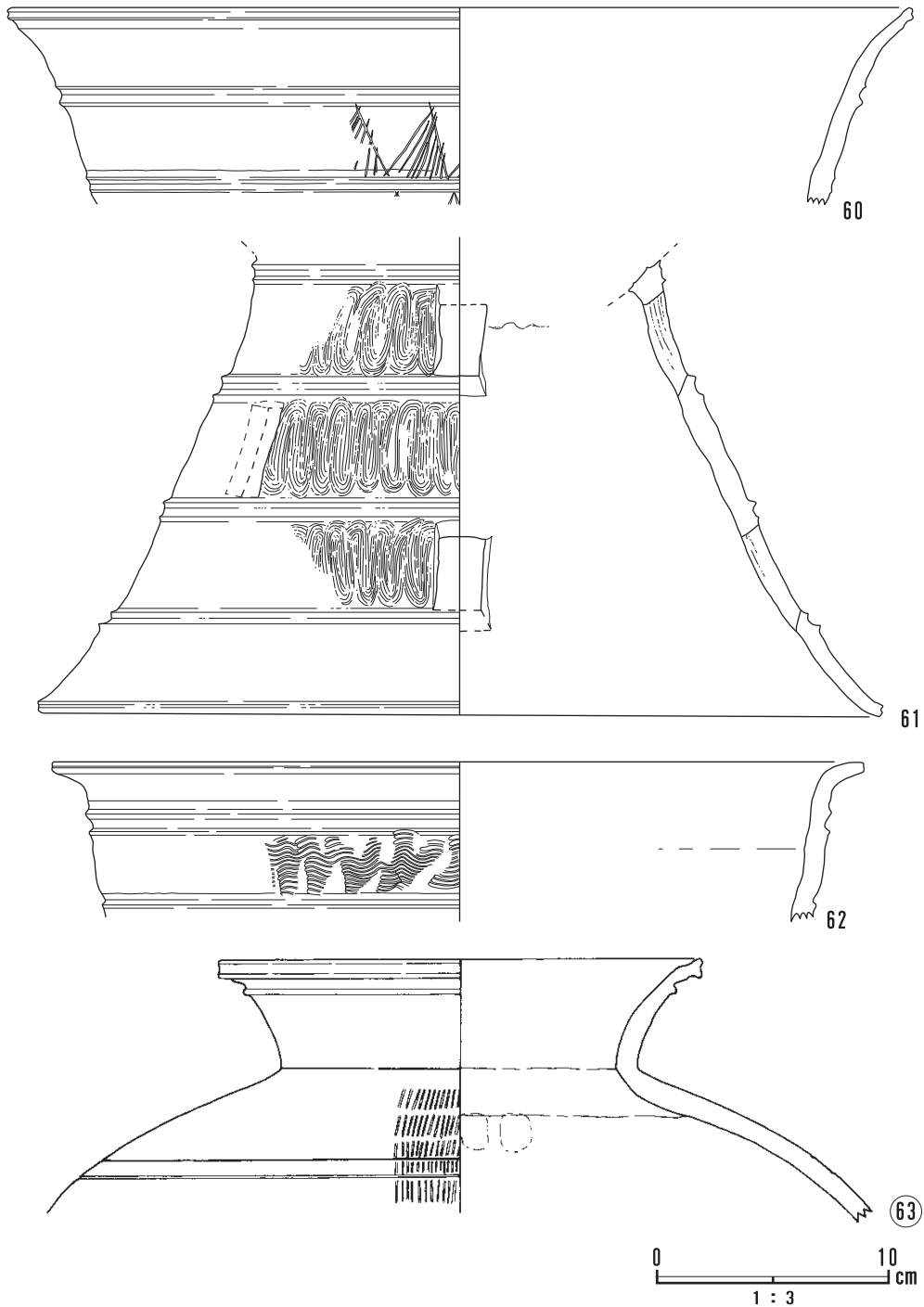


図20 蟻無山2号墳 採集遺物(6) (S=1:3)

あたり、57がそれに続く部位になる。壁部分との接合が斜めになっている点は、特異な住居形式を考えておくべきかもしれない。

58は馬形埴輪の頭部である。左右2枚の粘土板を貼り合わせて頭部を作っており、タテガミもその粘土板の延長をそのまま用いて表現されている。エラの内側にあたる首から口にかけての部分は、別の粘土板が接合されており、エラは一部が後に貼り付けられている。装飾は簡素であり、耳の後ろ付近にはハケ痕跡も多く観察できる。また歯の表現をしているものはかなり珍しいと言えよう。59は動物形埴輪の胸から脚部にかけての部位にあたる。内面の観察から

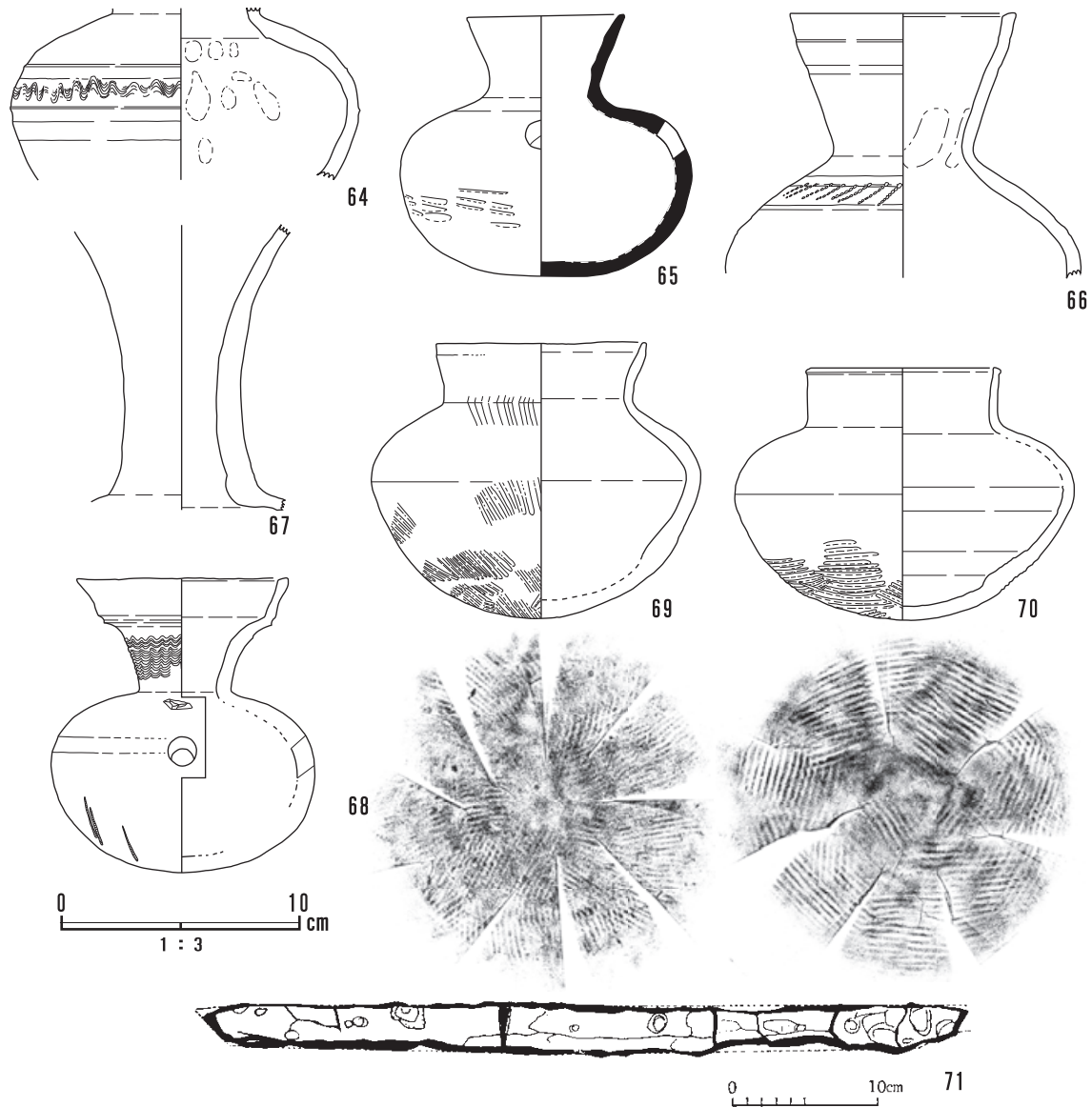


図 21 蟻無山古墳群 採集遺物 (7) (64～70までS=1:3 71のみS=1:5)

は、左足側の粘土板に右足側の粘土板を貼り合わせ、その上に裏側から粘土板をかぶせて成形していることがよくわかる。かぶせた粘土板の上には、ユビオサエ痕が多く残る。

60～70は土器である。60～62は須恵器の器台で、60と61は同一個体と考えられる。61は破片2点を復元展開したものであり、流水文状の波状文が施される。62は器台口縁部である。焼成は堅緻で黒色～赤銅色を呈する。「蟻無山麓」の注記がある。施される波状文が独特で、向かって右方向から波状文を描き始め、静止もしくは離れさせながら描いていく（写真図版69頁）。63は実見できていない。

64は須恵器壺または罍の胴部である。「於蟻無山」の注記がある。胴部には波状文を施す。65は完形の土師質罍である。ややひしゃげた形をしており、口縁は直線かやや裾広がり延びる。底部は摩滅が激しく調整不明だが、胴部は水平方向にタタキ痕跡が見られる。66、67は須恵器長頸壺である。66には「アリナシ南中腹」、67には「蟻無山麓」の注記がある。66は口縁端部から少し下ったところに沈線を2条めぐらせ、肩部には列点文を施す。66、67は蟻

無山古墳群の帰属時期とは整合しない可能性が高い。

68～71は、蟻無山2号墳出土とされている遺物である。68はほぼ完形の須恵器罍である。焼成が堅緻で黒色を呈し、自然釉が肩部以上で全体に見られる。胴部は面取りが数条みられる。「アリナシⅡ号」の注記がある。69は完形の須恵器壺である。口縁部が若干ゆがんでいる。口縁部内面直下に浅い沈線をめぐらす。底部外面は全面に放射状のタタキ痕跡があり、内面は円形にくぼんでいることから当て具痕と考えられる。「蟻無山西側陪塚出土」の注記がある。70はほぼ完形の須恵器壺である。口縁部は直立して面をもつ。焼成は堅緻で黒色を呈し、自然釉が全体的に見られる。底部外面には全面に同心円状のタタキ痕跡があり、内面は円形にくぼんでいることから当て具痕と考えられる。「アリナシⅡ号」の注記がある。71は『赤穂市史』に掲載された鉄刀で、現在有年考古館に収蔵されている鉄製品（保存処理済み）の一部と推定される。すでに触れたように、有年考古館には蟻無山古墳群採集として、鉄刀片が最低3個体分、ヤリガンナ先端部1点、鉄鏃3点以上（方頭式1点、柳葉式1点含む）、U字状鋤先片1点が収蔵されているが、鉄製品そのものに「アリナシⅡ号」と注記のある資料は鉄刀2片のみで、詳細は不明である。

4 まとめ

以上、蟻無山古墳群の測量調査成果および採集資料の整理調査成果を報告した。蟻無山古墳群は、『赤穂市史』の記載にあったように、現段階では3基の中期古墳によって構成されていることが判明した。蟻無山1号墳は丘陵頂部の自然地形を利用して築造された造出し付きの帆立貝形古墳であり、全長52mを測る。蟻無山古墳群に関係する遺物はすべて採集品であるため、時期の判断は保留を伴うものであり、またいずれの古墳に伴うものか不明な資料もあるが、ここでいくつかの指標を挙げてみたい。

採集埴輪の多くは焼きが甘くて黒斑も多くあり、須恵質のものが見られない。円筒埴輪には基部径30cmを超える大型のものがあり、透かしは円形のみで、1点のみB種ヨコハケが見られる個体がある。口縁端部を肥厚させる円筒埴輪がある。馬形埴輪の頭部の成形技法や扁平な形状が独特である。人物埴輪が見られない。船形埴輪には、スイジガイをモチーフにした文様がある。須恵器にはTK73型式と評価される初期須恵器があり、流水状の波状文は陶邑に見られない。また、このような資料が2、3号墳のような直径10cm前後の古墳から出土することは稀と考えられる。

以上の指標から、今回報告した資料の多くは蟻無山1号墳のものと判断され、年代は5世紀前半が与えられる。蟻無山2号墳出土遺物は、従来から指摘のあったとおり、それよりやや下る年代を与えておきたい。

第2章 塚山古墳群の測量調査



1 調査の概要

(1) 調査に至る経緯

塚山古墳群第I群集墳は、有年牟礼隠レ谷周辺に所在する群集墳である。このうち6号墳は兵庫県指定文化財となっているが、後述するように、その周囲にも多くの古墳の存在が知られていた。平成13年度には赤穂市産業振興部農林水産課（当時）の森林空間総合整備事業によって一部の間伐が実施され、10基以上の古墳が群集している様を見学することができるようになった。しかし、私有地であったこともあって本格的な調査が実施されることはなく、平成16年度には斜面地の一部が土取りされたために急遽確認調査を実施する（弥生時代中期後半～古代における遺物が出土）など、保存のための基礎資料が作成できていたとは言いがたかった。そこで、当古墳群における各古墳の位置、範囲及び古墳の数を把握し、今後の各種開発に対応するための基礎資料とするため、測量調査を実施することとなった。事業は国宝重要文化財等保存整備費補助金の採択を受け、実施した。

(2) 調査体制

調査体制は以下のとおりである。

赤穂市教育委員会事務局

測量調査

平成21(2009)年度

【教育長】室井久和 【教育次長】高山康秀

【文化財担当参事兼生涯学習課長】宮崎素一

【文化財係長】中田宗伯 【事務担当】加藤章江 【民俗・普及担当】藤田忠彦

【調査・整理担当】荒木幸治 【整理調査員】篠宮欣子

【整理作業員】大川加奈子、坂井美和、西野維子

【発掘調査作業員】社団法人赤穂市シルバー人材センター

上山 勉 岡本久幸 小川國夫 島浦正行 寺本徳義 中戸 隆 中平敏雄 名倉紀世志

平野茂樹 古江好道 増井国男 門野 實 安井義樹 山田哲二 渡代三郎

整理調査

平成22(2010)年度

【教育長】室井久和 【教育次長】高山康秀

【文化財担当参事兼生涯学習課長】宮崎素一

【文化財係長】中田宗伯 【事務担当】加藤章江 【民俗・普及担当】藤田忠彦

【調査・整理担当】荒木幸治 【整理調査員】篠宮欣子

【整理作業員】入江麻紀、大川加奈子、坂井美和、西野維子

(3) 調査の概要

調査は平成22年2月19日に開始し、3月31日に完了した(実働22日)。作業は、ある程度間伐が実施されていた箇所から、古墳群の境界と認定できる範囲まで樹木間伐を進めた後、平板測量調査を実施した。また、従来第一群集墳とされてきた範囲の周辺にも、広く古墳の分布が認められたため、一部の間伐を伴う踏査も併せて実施し、その数と規模の把握に努めた。

測量調査は、古墳周辺に木杭を33ヶ所打設し(うち6本は補助杭)、上端部に釘を打ち付けたのち、南方にある2級基準点(山田橋北詰、緯度34°49'47".8710、経度134°24'10".0217、標高23.344m/日本測地系V系)から標高を移設した。その後、全ての杭にレベルを落とし、2~3班のグループに分かれて縮尺1:100の平板測量調査を実施した。等高線間隔は25cmとし、溝や攪乱などの地形は、等高線図とは別に平面図を作成した。測量後、測量図面をすべてスキャニングし、合成してデジタルトレースした後、等高線の粗密から古墳の範囲や周溝の形状等を検討した。

その結果、これまで8基とされてきた第一群集墳の近辺には、計18基の古墳が密集していることが判明した。中には直径5m以下、高さ20cm程度の小規模墳もあり、間伐しなければ発見できなかった古墳もあった。さらに踏査を進めた結果、『赤穂市史』掲載の第二群集墳と考えられる古墳群の存在を把握したため、間伐を実施するとともに、簡易型GPSにより位置の計測を行った。平板測量調査面積は約6,000m²、踏査面積は約64,000m²を測る。

2 地理的・歴史的環境

(1) 地理的・歴史的環境

塚山古墳群は、赤穂市有年牟礼字隠レ谷にあり、その字名が示すように、有年牟礼の平野より500mほど谷奥に入った地にある(図22)。この狭隘な谷の西側にあたる山地は、いくつかの痩せ尾根と、その間にある緩傾斜地の連続によって形成されている。塚山古墳群は、こうした地形の上に、いくつかの群をもって所在している。

この山をさらに登ると奥山田群集墳があるとされ、一方、谷の奥側には6世紀から9世紀の須恵器窯跡である奥山田窯跡がある。谷入口の扇状地には有年牟礼・山田遺跡が所在する。

有年牟礼・山田遺跡では、1986年から1988年度まで、有年牟礼地区のほ場整備事業に伴う発掘調査が実施されている。1986年度の調査では、弥生時代中期の竪穴建物跡2棟、古墳時代の掘立柱建物跡2棟をはじめ、畝状遺構や小区画水田跡が検出された。1985年度の調査では、弥生時代中期の竪穴建物跡1棟、古墳時代の掘立柱建物跡1棟、中近世の掘立柱建物群を検出している。1988年度の調査では、70トレンチと称した調査区で、中世城館跡が確認されている。柱穴数300基、総柱掘立柱建物跡7棟、竈跡4基などを確認したという。

同年度に発掘調査が実施されたNo.2トレンチと称した調査区では、中世の掘立柱建物跡7棟、井戸1基、竈跡3基を確認したほか、弥生時代終末～古墳時代初頭に位置づけられる、陸橋部をもつ方形周溝墓が確認された(荒木2009・2010)。また、このほ場整備事業に伴う発掘調査により、旧赤穂郡と関わりの深い渡来人の氏名である「秦」という字がヘラ描きされた須恵器片が出土したことは特筆に価しよう。

2004年度には、塚山古墳群近隣で土取り作業が実施されているのを発見し、急遽確認調査を実施している。調査は丘陵先端部で実施され、遺構は確認できなかったものの、弥生時代中期後葉の広口壺口縁部、無頸壺口縁部、高坏脚部、甕胴部片のほか、古墳時代後期の須恵器坏身口縁部片、平安時代の須恵器蓋口縁部片が出土している。調査地の上方、丘陵上に、弥生時代から平安時代の集落跡等が想定される。近年になり、すぐ南の谷あいでも弥生土器が採集されていることを勘案すると、意外と、塚山古墳群の下もしくは周囲に、弥生時代の集落跡は眠っているのかもしれない。

ところで、有年原・有年牟礼両地域は、後期群集墳の密集地帯として知られており、蟻無山古墳群の近辺から、東方向に玉堀古墳群(3基)、奥山古墳群(5基)、北原古墳群(5基)、木虎谷古墳群(20基)、惣計谷古墳群(11基)、ハトカ古墳群(7基)、奥山田古墳群(6基)、塚山古墳群(51基)が所在し、現在のところ総計で108基を数える。ただし、踏査による悉皆調査が完了したのは、木虎谷古墳群と塚山古墳群の一部(第一・第二群集墳)のみであり、詳細な調査を実施すれば、激増は必至である。

千種川流域の横穴式石室は、周辺地域と較べてやや特異な形態をもつものがあり、市内では石棚をもつ木虎谷2号墳や、玄室内に間仕切りをもつ塚山I-6号墳、及び羨門や玄門部をもつ野田2号墳が代表的なものとして兵庫県指定史跡となっている(図23)。このほか、すでに松岡秀夫氏らの指摘にあるように、玄室奥壁の基底石を縦に2列並べる築造方法が、木虎谷古

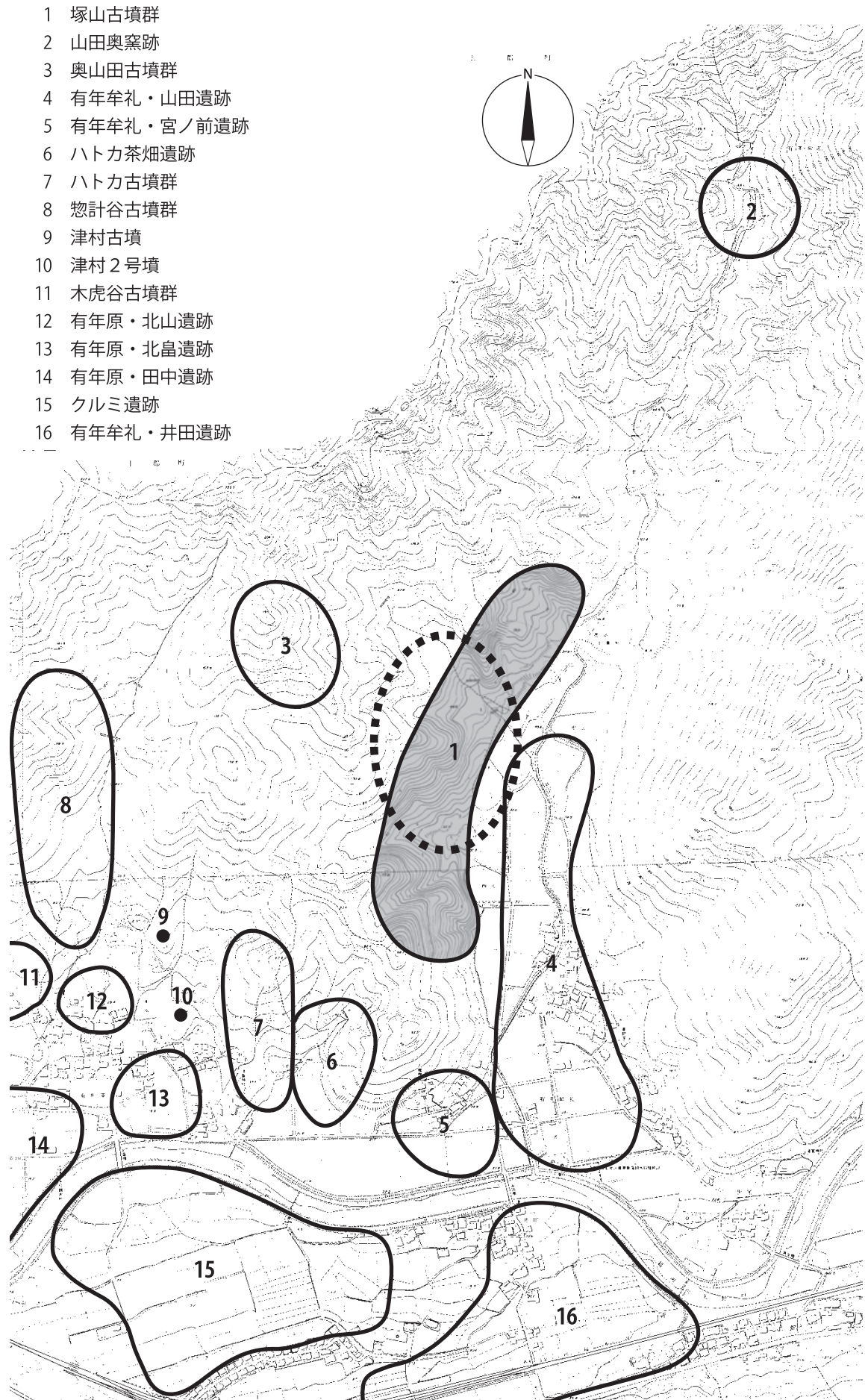
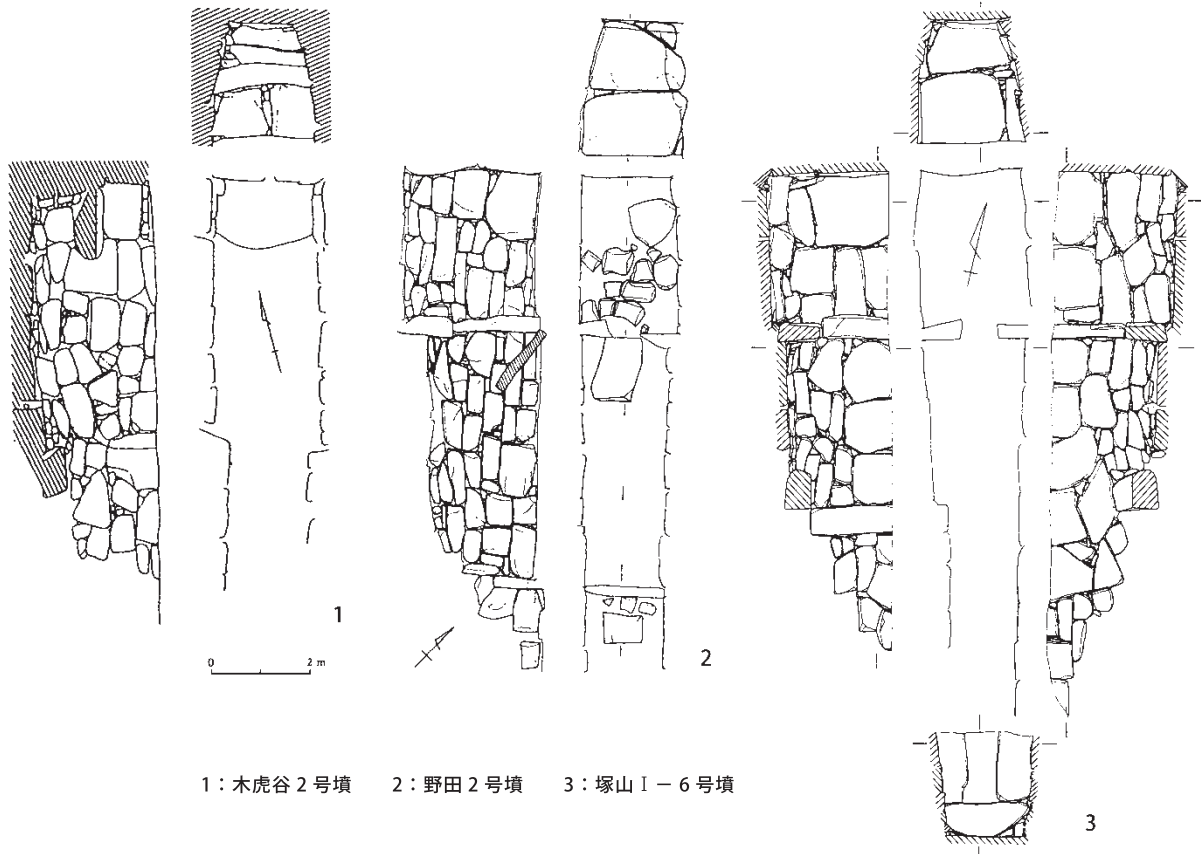


図22 塚山古墳群周辺の遺跡地図（1：25,000）（破線内が本書で報告する範囲）



1：木虎谷 2号墳 2：野田 2号墳 3：塚山 I-6号墳

図 23 有年地域の特異な横穴式石室の例 (S = 1 : 100)
(1：松岡 1981 2・3:松岡 1984)

墳群に顕著に認められる（西野山古墳発掘調査研究会 1973）など、古墳群ごとに特徴が見られる点も興味深い。

なお、木虎谷 11 号墳は、民間開発に伴って全面発掘調査が実施され、初葬、追葬面が層を違えて見つかり、それぞれで須恵器や鉄刀等が出土し、調査報告書が刊行されている（荒木 2006）。

(2) 塚山古墳群への言及

塚山古墳群は、1969 年に刊行された『赤穂の埋蔵文化財』（赤穂市教育委員会・赤穂市文化財調査委員会編 1969）にはすでに掲載され、19 基の存在が記録されている。しかし巻末に掲載されている位置図には、谷部入口の牟礼八幡宮の付近から奥池まで広くドットが落とされており、『赤穂市史』の記載と比較しても、その位置が正確ではないのは明らかである。

『赤穂市史』第一巻（松岡 1981）では、塚山古墳群が 3 支群に分けられ、塚山第一群集墳（6 基）、塚山第二群集墳（5 基）、塚山第三群集墳（7 基）における各古墳の詳細なデータが初めて公表された。「（周世）宮裏山のもものは各古墳の大きさがほぼ揃っているのに対し、塚山のもものは（古墳）それぞれに大小がある。」とされ、「群集墳の成立事情、たとえば農耕集団と非農耕集団との差によるものではなかろうか。」と結ばれている。

『赤穂市史』第四巻（松岡 1984）では、第一群集墳に、西側山裾にあった 2 墳が加えられて

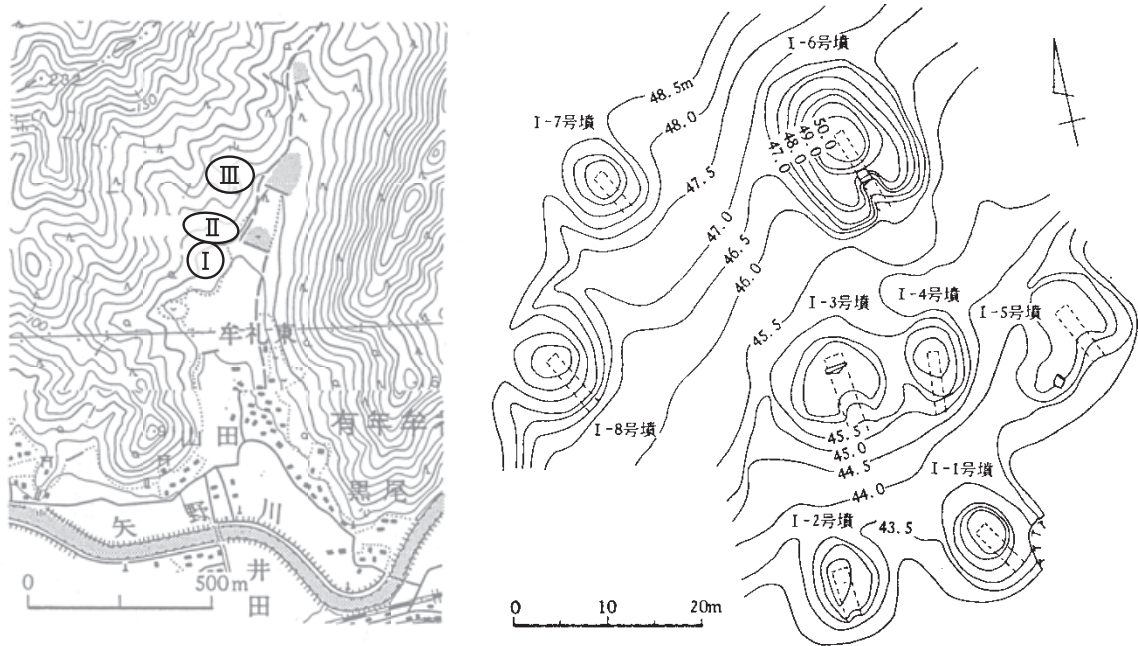


図24 『赤穂市史』第四巻に掲載された塚山古墳群の位置図と第一群集墳の測量図（赤穂市1984を一部改変）

8基とされ、改めて紹介されている（図24）。第一群集墳は「山田集落の展開する広い扇状地の奥の西側にある。（中略）8基はたがいに近接して築造されており、いずれも横穴式石室墳で、6世紀末ころの土器を出土した6号墳を最大最古のものとし、これを中心に群集墳が次々につくられたと考えられる。」とする。第二群集墳は「塚山東斜面から北へ、北から西へと山裾を回って谷の斜面を西進した一帯にある。この谷には多くの古墳があったが、樹木が伐採され炭焼き竈を構築したとき数基が破壊された。その後この谷に堰堤工事が施行されたため、その破壊はさらに進んだものと思われる。（中略）5基は堰堤工事以前の調査に基づいたものである。」とある。第三群集墳は「塚山の谷を北へ登る斜面および山頂尾根上に散在する古墳群である。すでに崩壊して痕跡となっているものを除くと7基の古墳が残存する。」とし、主要な古墳の数値データが提示されている。また、近接する奥山田群集墳を含めて、各群のなかに1基ずつ玄門あるいは間仕切りという特殊な構造をもつものが存在していることが注目されるとし、それが群集墳形成の契機となった盟主墳であるとの評価がなされた。

『有年考古館蔵品図録』（西播流域史研究会編1991）には、15点の採集遺物が報告されており、後世に属する出土品を除くと、蓋坏7点、長頸壺3点の計10点となる（図25、巻頭カラー図版）。これらには「塚山古墳第一群集墳出土」、「塚山第一群集2号墳」、「塚山古墳第二群集墳出土」「塚山5号」といった注記が見られるが、『赤穂市史』第四巻では、図25の7～10が塚山第2群4号墳、14～17と20が塚山第1群6号墳として掲載されている。

1986年には、山崎信二が石室構造の比較分析を行い、野田2号墳から塚山I-6号墳への変遷を説いた（山崎1986）。

1999年には、富山直人氏が矢野川流域の横穴式石室を論じるなかで、塚山古墳群第一群集墳中の1号墳、4号墳、6号墳について触れている（富山直人1999）。1号墳については、奥壁基底を2石によって構成するという、木虎谷1号墳の奥壁と同様な特色を持つとする。また「6

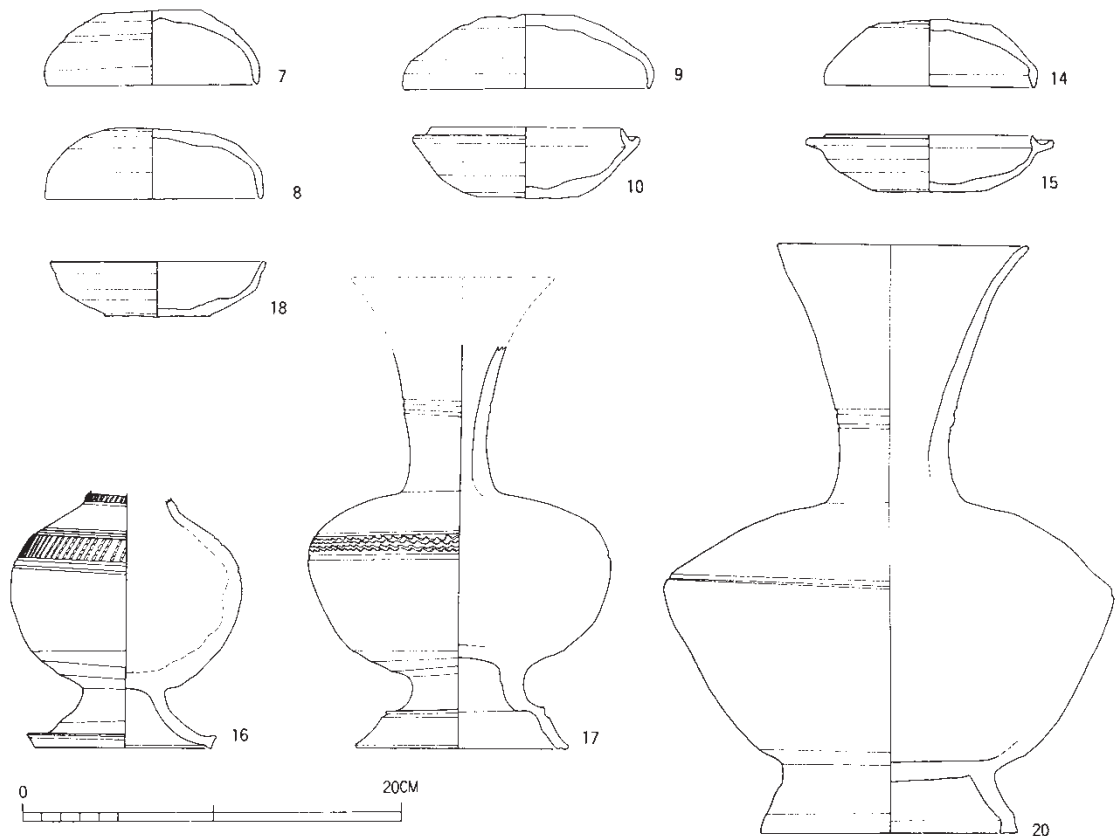


図25 塚山古墳群 採集遺物 (S = 1 : 4) (西播流域史研究会編 1991)

号墳の背面の平坦面から、斜面に変化する部分には、小石室が存在しているようである。」と推定している。

中濱久喜氏は、播磨における横穴式石室の構造と変遷をまとめるなかで、塚山 I - 6 号墳を含む、袖石が内側に突出し、まぐさ石をもつ「A 型 b 類 1 群」の確実な例が、赤穂郡域にのみ分布していることを明らかにし「祇園塚型石室」と呼んだ。そしてこれらの類例を四国北部や安芸地方に求め、成立にまつわる関係を推定している。ちなみに塚山 I - 6 号墳は方墳とされ、7 世紀の第 1 ~ 第 2 四半期に位置づけられている (中濱 2002)。

2007 年に開催された横穴式石室研究会主催のシンポジウム『近畿の横穴式石室』では、富山直人氏が塚山 1、4、6、7 号墳について触れており、6 号墳は「前室右側壁の石材の積み方が、那波野古墳の石材配置に類似した点があり、時期としては近い時期が考えられる」とした (富山 2007)。また 1、4 号墳を 7 世紀初頭、7 号墳をそれ以前と推定している。ちなみに横穴式石室の実測図については、『赤穂市史』にて I - 6 号墳が公表されているが、先述の『近畿の横穴式石室』資料 DVD において、木虎谷古墳群、惣計谷古墳群とともに、塚山 1 号墳、7 号墳、13 号墳が公表されている (図 26)。これらのうち一部の古墳番号や標高は任意のものであるが、貴重な調査事例と言えよう (横穴式石室研究会編 2007)。

このように塚山古墳群は、1964 年の段階でその存在と古墳数が公表されたものの、正確な位置は不明であり、また兵庫県指定史跡である I - 6 号墳が代表的な古墳として評価されたが

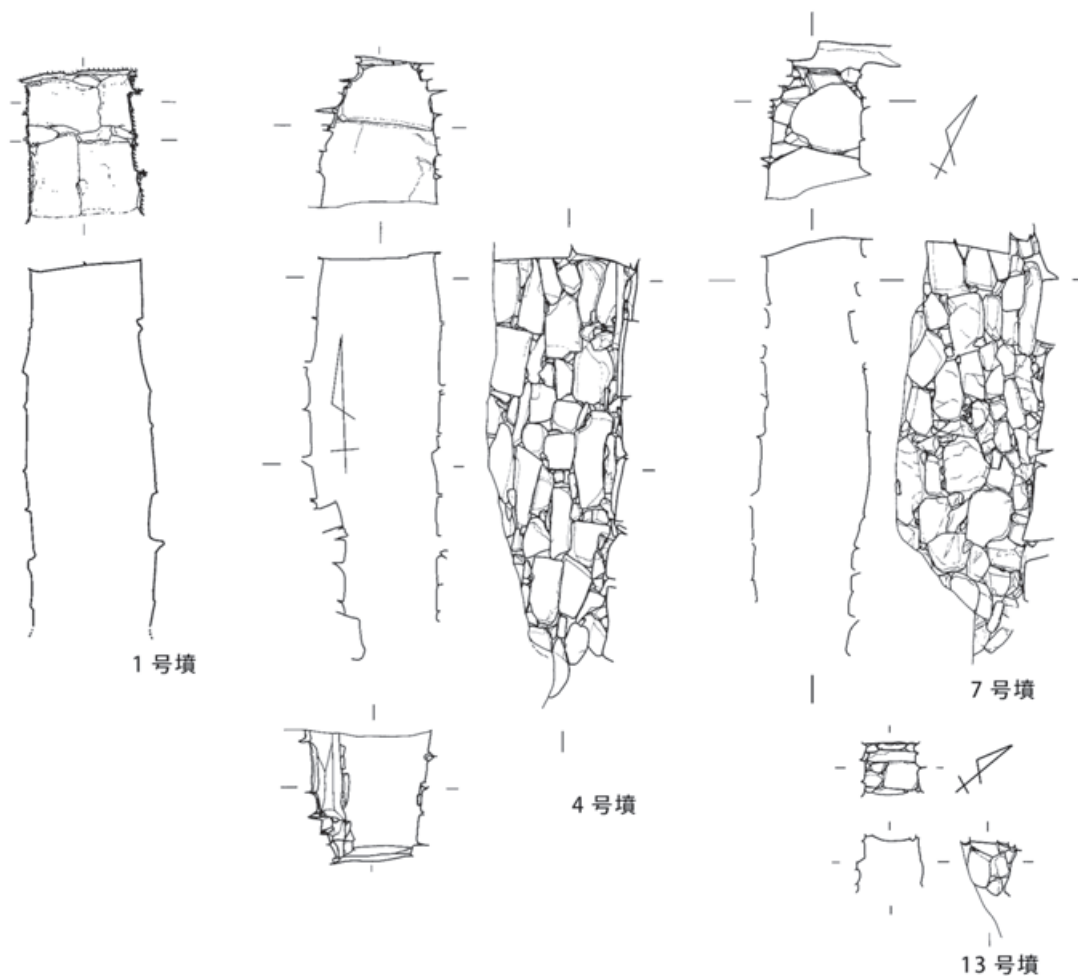


図26 塚山古墳群 石室実測図 (S = 1 : 100) (横穴式石室研究会編 2007)

体系的な調査は行われず、古墳群としての詳細は不明というほかなかった。ちなみに赤穂市の群集墳では、墳丘測量図の作成などで全容が把握された事例はない。

なお、塚山古墳群で採集されている遺物を現在の視点で評価するならば、より新しい20を除きTK209～TK217の様相を示しており、他の遺物もこれらを逸脱するものではないと考えられるため、採集遺物の帰属年代は概ね6世紀後半～7世紀前半の年代を与えておきたい。

3 調査成果

(1) 支群・小支群の設定

すでに述べたように、『赤穂市史』第一・四巻(松岡1981・1984)によれば、塚山古墳群は第一～第三群集墳の3支群により構成されており、合計で20基の横穴式石室墳が確認されていた。しかし、第二・第三群集墳は古墳の数値データのみで分布図がなく、所在は不明であった。

今回の調査に伴い、第一群集墳の測量調査とともに周囲を間伐しながら踏査した結果、第一群集墳とされた古墳を含めて合計44基の古墳が確認された(図27)。そして『赤穂市史』に記載されている、玄室に間仕切りをもつ古墳や砂防ダムの存在が確認されたため、今回確

認した古墳群のなかに、第二群集墳とされた古墳群が含まれていることがわかった。そこで、塚山古墳群の支群設定を改めて行って整理する必要が出てきたが、まず本書では、第一、第二群集墳という呼称ではなく「支群」を採用し、I - 6号墳の名称が一般的なことから、「第I支群」などのようにギリシャ数字で表記することとした。

古墳は時に集中し、時に散在しており、支群をいくらかでも細分することができるような状況であったが、今後の調査によって古墳が増加することは十分考えられたため、支群の新設定は将来に託し、現在設定されている3支群のなかで、古墳の立地からI a、I b支群などの小支

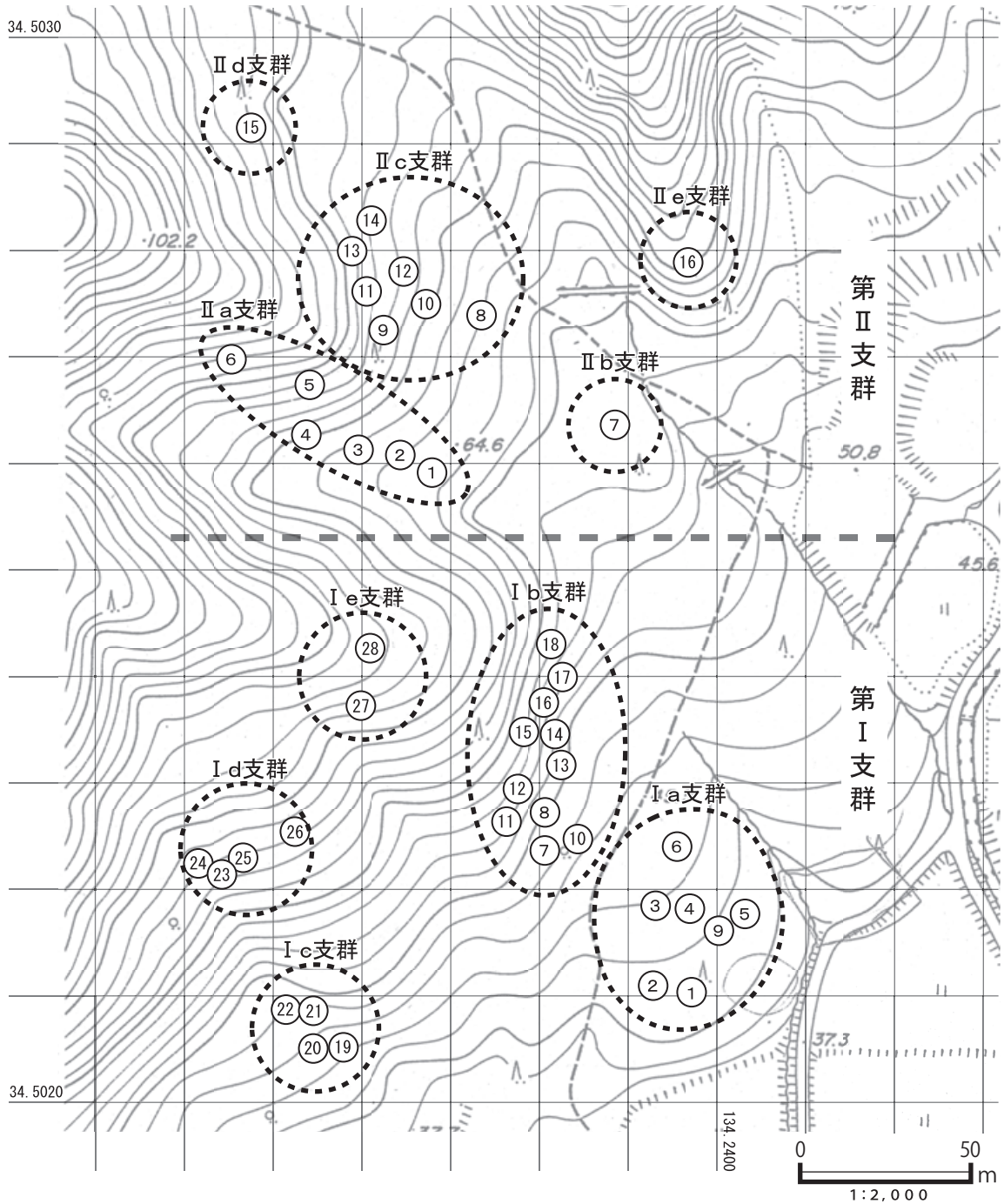


図27 塚山古墳群 古墳分布図 (S = 1 : 2,000)

I a、I b支群以外は、簡易型GPSによる計測データを参考に、地図に落としたもの。世界測地系。

群に細分した。古墳番号については、第Ⅰ支群と第Ⅱ支群については『赤穂市史』に倣い別番号としたうえで、Ⅰ-1号墳などのように呼び分けることとした。そのため、Ⅰa支群とⅠb支群については既報告番号を優先しており、古墳番号にやや混乱があることを断っておきたい。第Ⅰ支群については、a～eの5支群に分けた。『赤穂市史』では、Ⅰa及びⅠb支群は一つの群集墳として認識されているが、小支群として分けたとき、Ⅰa支群とⅠb支群とは、各古墳の規模や立地のうえで異なると考えられた。ほかのⅠc～Ⅰe支群についても、後述するように古墳の様相が異なっている。以下、小支群ごとに報告する。

(2) Ⅰa支群の測量調査成果 (図29・30)

Ⅰa支群は、『赤穂市史』において第一群集墳と呼ばれた古墳群のうち、西側の2基を除いた7基からなる小支群である。標高40～44mにかけて、北西から南東に向けての緩斜面上に主な立地を見せる、塚山Ⅰ-6号墳を含む比較的規模の大きな古墳で構成される。この支群では平板測量調査を実施し、詳細な分布を把握できた。なお本支群とⅠb支群とを分断するように、近世～近代の所産と考えられる猪垣跡が敷設されている。

墳丘 Ⅰa支群の古墳は遺存状況が良く、墳丘の高さが5m近く残っているものがあり、石室も天井石まで残す古墳が多くを占めている。墳丘規模は、南北5.5m、東西6.5mのⅠ-9号墳を除き、石室主軸方向で10mを越えるものばかりであり、Ⅰ-6号墳のように石室主軸方向の墳丘規模が17.5mとなるような大規模墳もある。

古墳はいくつかの単位でかなり近接して築かれており、Ⅰ-3、4号墳とⅠ-5、9号墳は、現状から判断する限り墳丘を共有している。周溝も良好に保存されており、等高線測量によってそれぞれの古墳の範囲が明瞭である。Ⅰ-1、2号墳については、等高線の様子からⅠ-2号墳の後にⅠ-1号墳が築かれたと推定される。先述のⅠ-3、4号墳とⅠ-5、9号墳は、周溝も連結して掘削されているようである。墳形については、かつてⅠ-6号墳が方墳とされていたが、墳丘前面に石列があって直線状を呈するものの、背面は円弧をなしていることから円墳と復元できる。また、Ⅰ-5、9号墳はいわゆる前方後円形を呈するが、規模が著しく小さく保留としておきたい。よってⅠa支群は全て円墳であると判断できる。

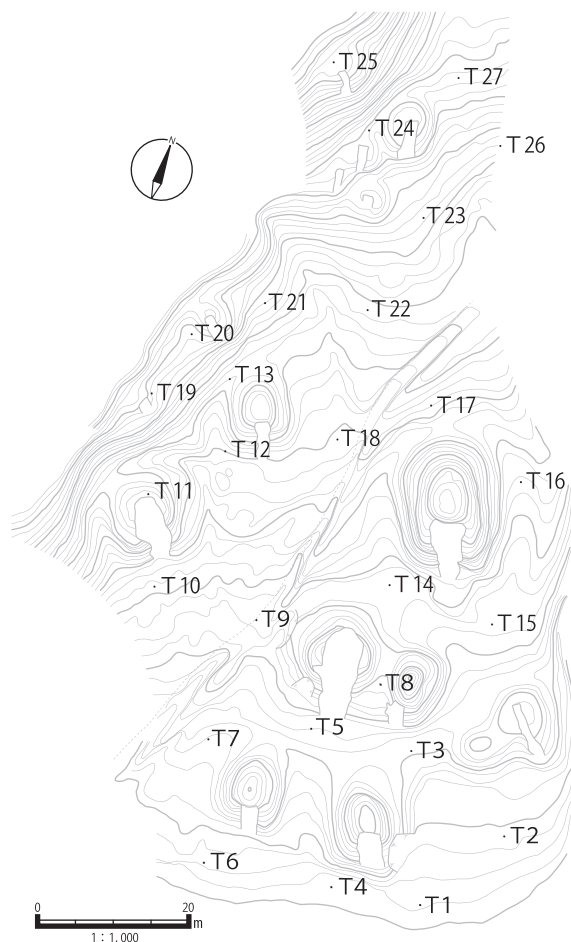


図28 塚山古墳群 Ⅰa・Ⅰb支群
基準点配置図 (S = 1 : 1,000)



図29 塚山古墳群 I a・I b 支群 平板測量図 (S = 1 : 500)

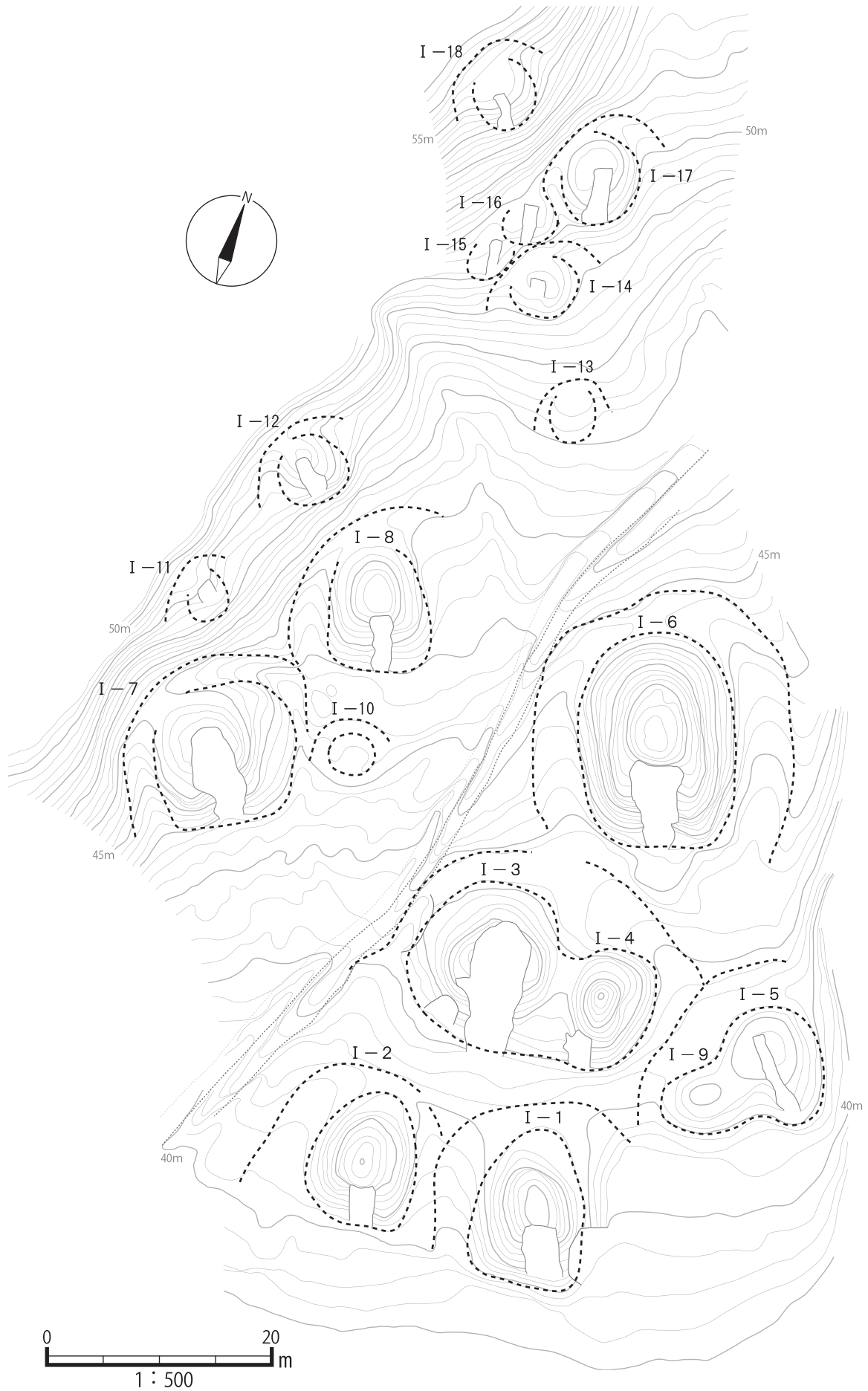


図30 塚山古墳群 I a・I b 支群 墳丘復元想定図 (S = 1 : 500)

石室 I a支群のうち石室が良好に残っているのは4基（I-1、2、4、6号墳）あり、このうち右片袖式石室としてI-4号、I-6号墳の2基が認められる。それぞれの袖石は立柱石となっている。もう一つ、右片袖の可能性を残すI-1号墳をあわせた3基は、現存の奥壁幅が140cmを越える、比較的大型の石室である。石室長、石室幅ともに最大なのはI-6号墳である。石室長10.3m、石室幅1.9mを測り、突出して大規模なものであるとともに、玄室内に間仕切りを持つ。I-6号墳の墳丘前面には石列があり、ここまでを石室と見た場合、推定全長は11.4mとなる。

ちなみに、I a支群における石室の主軸方向は、斜面の方向に逆らっておらず、I-5、9号墳の推定石室主軸が大きくずれているのは、地形に起因すると考えられる。

奥壁の用石法 石室基底からではないものの、奥壁の様子を視認できたのはI-1、4、6号墳である。用石法は概ね2分類でき、奥壁の幅を1石だけでほぼ占めるような石材を積んでいくI-4、6号墳と、1段につき2石の石材を積んでいくI-1号墳とが認められる。

(3) I b支群の測量調査成果（図29・30）

I a支群の北西に、猪垣跡を挟んで立地する小支群である。立地は標高44～56mの範囲について、I a支群のような緩傾斜面だけでなく、そのすぐ背後にある急傾斜面をも利用した古墳占地となっており、計11基で構成されている。

墳丘 I b支群における最大規模の古墳はI-7、8号墳であり、直径11m前後の規模をもつが、それ以外の古墳はごく小規模なものであり、直径が5m前後となる古墳が7基認められる。特にI-10、13号墳は低墳丘であり、石棺墓の可能性が考えられる。I-17号墳の北にも、低墳丘墳の可能性が考えられる微地形が存在するが、保留としておく。比較的大規模なI-7、8号墳は、I a支群の古墳と近い規模をもち、また石室の主軸方向も近似している。なお立地を見てみれば、I-7、8、10、11、12号墳とそれ以外の古墳とは小さな谷を隔てて分けることができ、石室の主軸方向もまとまりがあることから、本来はさらに小支群に分けられるのかもしれない。I-14～16号墳は周溝を共有しているが、このうちI-15、16号墳については墳丘が接しており、切りあい関係を持つようにも見える。

石室 I b支群において石室が観察できたのは、I-7、8、11、12号墳であるが、I-7は損壊、I-11号墳はほぼ埋没している状態であった。石室の奥壁幅は、残存長5.5mのI-8号墳が最大で1.23mを測り、それほど大きなものではない。I-7号墳もほぼ同規模であり、I-11、12号墳は推定全長が4m強と、小規模墳であることがわかる。いずれも袖の有無は埋没のため不明だが、無袖である可能性が高いだろう。

奥壁の用石法 石室基底からではないものの、奥壁の様子を視認できたのはI-7、8、12号墳である。用石法は概ね2分類でき、奥壁幅をほぼいっぱいにとるような石材を積んでいくI-7号墳と、大きな石材を主体としながらも、小振りの石材を間に詰めるように積んでいくI-8、12号墳とが認められる。

(4) I c～I e支群の踏査成果（図30）

I c～I e支群は、いずれも測量調査を実施することができず、踏査と計測のみを行った。

支群	古墳名	墳丘			石室			備考	袖	現存高	奥壁最大幅	奥壁最小幅	残存長	玄室長	推定全長	羨道幅
		石室主軸	石室中軸	墳丘高さ	石室中軸	墳丘高さ	石室中軸									
I a	I-1号墳	14	12.3	3.5	石室開口し、排土は羨道部側に堆積。墳丘北東部に擾乱あり。2号墳と周溝共有するが、南・東側は不明瞭。	石室開口し、排土は羨道部側に堆積。墳丘北東部に擾乱あり。2号墳と周溝共有するが、南・東側は不明瞭。	埋没羨道内に右片袖の可能性のある石材あり。	右?	1.95	1.40	1.35	5.20	-	8.60	1.55	
I a	I-2号墳	11	10.2	2.75	石室開口し、西・北側にも明瞭。等高線から判断すると、1号墳の周溝が2号墳の周溝を破壊している。	石室開口し、西・北側にも明瞭。等高線から判断すると、1号墳の周溝が2号墳の周溝を破壊している。	埋没。石室が西方向にひしゃげている。天井石落下。	無	-	-	-	4.70	-	6.00	1.10	
I a	I-3号墳	12.8	11.6	2.5	石室はすでに破壊され、石材が抜き取られている。奥壁付近に1石目の石材が散乱。墳丘西側の一部は擾乱を受ける。4号墳とは墳丘を共有しているように見える。	石室はすでに破壊され、石材が抜き取られている。奥壁付近に1石目の石材が散乱。墳丘西側の一部は擾乱を受ける。4号墳とは墳丘を共有しているように見える。	奥壁1石のみ残る。	不明	-	1.30?	-	-	-	6.90	-	
I a	I-4号墳	10	7.9	3.25	石室開口するが、狭いために内部視認できず。周溝は北側のみに見られる。3号墳と墳丘を共有している。	石室開口するが、狭いために内部視認できず。周溝は北側のみに見られる。3号墳と墳丘を共有している。	羨道埋没。玄門立柱石。	右	1.90	1.40	1.10	6.85	3.20	6.90	1.20	
I a	I-5号墳	10.9	8.3	1.5	天井石が抜き取られているほか、奥壁石材が露頭。周溝は9号墳を併せてめぐるように北側に認められる。	天井石が抜き取られているほか、奥壁石材が露頭。周溝は9号墳を併せてめぐるように北側に認められる。	石室内埋没し、1石見えるのみ。	-	-	-	-	-	-	-	-	
I b	I-6号墳	17.5	15.8	4.75	石室開口し、前庭部に堆積。前面が石積みでもち直線を呈しているが、背面は凹弧を描く。周溝は西・北・東側に良好に確認できる。	石室開口し、前庭部に堆積。前面が石積みでもち直線を呈しているが、背面は凹弧を描く。周溝は西・北・東側に良好に確認できる。	玄室間仕切り。玄門立柱石。	右	2.44	1.90	1.36	10.30	(3.00) 6.70	11.40	1.36	
I b	I-7号墳	11.2	11.6	3.0	石室石材がかなり抜き取られている。墳丘及び周溝は残りがあり、西・北・東側で視認できる。	石室石材がかなり抜き取られている。墳丘及び周溝は残りがあり、西・北・東側で視認できる。	石材抜き取り多いが、右側1石のみ残る。	-	1.50	1.20	0.95	2.50	-	6.60	-	
I b	I-8号墳	11	1	2.5	石室開口。前面はやや直線を呈している。周溝は西側から北側にかけて顕著。	石室開口。前面はやや直線を呈している。周溝は西側から北側にかけて顕著。	羨道埋没。	-	1.76	1.23	1.10	5.50	-	5.50	-	
I a	I-9号墳	5.5	6.5	1.25	墳頂部が若干くぼむ。5号墳と周溝共有。	墳頂部が若干くぼむ。5号墳と周溝共有。	埋没。	-	-	-	-	-	-	-	-	
I b	I-10号墳	5.3	5.2	0.5	浅い周溝が円形に確認できる。	浅い周溝が円形に確認できる。	崩壊。低墳丘。	-	-	-	-	-	-	-	-	
I b	I-11号墳	5.4	5	1.25	山側をカットして墳丘が盛られており、周溝は山側のみ認められる。	山側をカットして墳丘が盛られており、周溝は山側のみ認められる。	埋没。	-	0.50	-	0.70	0.60	-	4.50	-	
I b	I-12号墳	5.8	7	1.75	山側をカットして墳丘が盛られており、周溝は山側のみ認められる。	山側をカットして墳丘が盛られており、周溝は山側のみ認められる。	埋没。	-	0.90	1.00	-	3.40	-	4.10	-	
I b	I-13号墳	4.8	4.1	0.75	浅い周溝が円形に確認できる。	浅い周溝が円形に確認できる。	崩壊。低墳丘。	-	-	-	-	-	-	-	-	
I b	I-14号墳	5.3	5.4	0.75	周溝を確認できる。	周溝を確認できる。	埋没。	-	0.40	-	0.55	0.60	-	3.00	-	
I b	I-15号墳	4.4	4	0.5	周溝を確認できるが、残りはよくない。	周溝を確認できるが、残りはよくない。	埋没。	-	-	-	-	-	-	-	-	
I b	I-16号墳	5.3	4.8	0.75	周溝を確認できるが、残りはよくない。	周溝を確認できるが、残りはよくない。	埋没。	-	0.20	-	-	2.30	-	2.30	0.60	
I b	I-17号墳	7.5	7	1.25	周溝を確認できる。	周溝を確認できる。	埋没。	-	0.30	-	0.80	1.60	-	4.70	-	
I b	I-18号墳	6.5	6.4	1.5	山側をカットして墳丘が盛られており、周溝は山側のみ認められる。	山側をカットして墳丘が盛られており、周溝は山側のみ認められる。	埋没。	-	0.30	-	0.75	1.84	-	1.90	-	

表1 塚山古墳群 古墳データ (1) 石室長の () 内は、奥壁から間仕切りまでの長さ。

支群	古墳名	墳丘				備考	石	室									
		石室主軸	石室中軸	墳高さ	備考			袖	現存高	奥壁最大幅	奥壁最小幅	残存長	玄室長	推定全長	羨幅		
I c	I-19号墳	8.0	7.0	1.4	周溝を確認できる。	埋没。	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
I c	I-20号墳	9.5	7.6	1.9	周溝を確認できる。	埋没。	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0.92
I c	I-21号墳	3.0	4.9	0.4	古墳状隆起?	埋没?	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
I c	I-22号墳	7.7	7.4	1.8		埋没。	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
I d	I-23号墳	5.0	5.0	1.2		埋没。古墳の可能性が高い。	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
I d	I-24号墳	5.5	5.2	1.2	周溝を確認できる。	埋没。	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
I d	I-25号墳	6.5	5.0	1.2		奥壁無し。	-	-	-	-	-	0.80	-	-	-	3.70	-
I d	I-26号墳	7.5	8.3	2.1		埋没。	-	0.20	-	-	-	0.65	-	-	-	-	-
I e	I-27号墳	12.2	12.2	3.9		埋没しているか残りは良い。	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
I e	I-28号墳	10.4	9.2	2.4	丘陵頂部に立地。	石室破壊されている。	無	1.15	1.10	0.70	6.10	0.70	-	-	-	6.10	1.00
II a	II-1号墳	8.0	8.0	3.0		墳丘前面に石室石材が散乱。石室埋没。	無	0.50	-	0.85	5.40	-	-	-	-	5.80	1.30
II a	II-2号墳	9.0	9.2	2.6		埋没。	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
II a	II-3号墳	6.0	5.4	1.4		埋没。	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
II a	II-4号墳	7.2	6.5	2.2		埋没。	無	0.70	0.90	0.85	7.00	0.85	-	-	-	7.00	0.80
II a	II-5号墳	4.9	5.0	2.3	墳丘前面に基壇状石列がある。	石室埋没。	-	0.10	-	0.60	2.80	-	-	-	-	-	0.60
II a	II-6号墳	4.8	7.0	2.6	墳丘前面に石積みがある。	右片袖の可能性わずかにあり(その場合、玄室長2.2m)。	無	1.18	1.00	0.85	4.00	0.85	-	-	-	4.00	1.10
II b	II-7号墳	5.0	6.7	1.0	低墳丘。	奥壁無し。	-	0.55	0.80	-	1.20	-	-	-	-	4.00	-
II b	II-8号墳	7.3	8.0	1.2	上部攪乱か。	崩壊。右側壁無し。前庭にコップ散乱。	-	0.50	1.72	-	4.20	-	-	-	-	-	-
II b	II-9号墳	15.7	15.4	4.3	市史第二群集墳の3号墳。	間仕切りあり。玄室側からみると、右側間仕切りは埋め込み出ない。	右	1.90	1.66	1.28	9.00	1.28	-	(3.00) 6.80	9.00	9.00	1.00
II b	II-10号墳	10.3	10.4	3.0		玄門立柱石。	右	1.63	1.75	1.22	5.60	1.22	-	2.60	5.60	5.60	1.00
II b	II-11号墳	9.6	9.2	2.1		埋没。	無	0.80	-	1.40	5.57	-	-	-	5.60	5.60	1.20
II b	II-12号墳	13.4	9.7	4.5	墳丘に外護石積みがある。	間仕切りあり。羨道内に板石散乱し、間仕切り石の下にももぐり。大振り石材で構築。	無	1.99	1.55	1.18	7.70	1.18	-	(2.30)	7.70	7.70	1.15
II b	II-13号墳	6.8	7.2	1.5		埋没。	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
II c	II-14号墳	11.0	11.0	3.9		右側壁のみに間仕切りがある。(上に石は架からず)。	無	1.29	1.25	1.00	5.66	1.00	-	(2.55)	5.60	5.60	1.15
II d	II-15号墳	8.6	10.5	4.1	方墳もしくは多角形墳。墳丘前面及び一側面に石積みがある。前庭に基壇状遺構がある。	埋没。	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
II e	II-16号墳	10	8.5	1.2	墳丘明確ではない。	崩壊。	-	1.24	1.33	-	6.35	-	-	-	6.35	-	-

表2 塚山古墳群 古墳データ (2) 石室長の () 内は、奥壁から間仕切りまでの長さ。

I b 支群の西側にある丘陵尾根上、及び丘陵斜面上に立地する I c ~ I e 支群は、散在しながらも、それぞれの支群内では形態的なまとまりを見せる。I c 支群は、I b 支群から西に1つ谷を隔てた緩斜面に位置し、墳丘規模 10m 以下の小規模な低墳丘古墳で占められる。いずれも主体部は不明であるが、I - 19、20、22 号は横穴式石室であると推定される。最も大きなものは I - 20 号墳であり、南北 9.5m、東西 7.6m、高さ 1.9m を測る。I - 19、20 号墳は周溝を共有するように隣接している。

I d 支群は I c 支群から谷を登っていった西斜面にあり、比較的急傾斜な地形上に立地する。I - 23 ~ 25 号墳は、I c 支群と同様、高さ 1.2m 程度の低墳丘の古墳で構成されており、特に直径が 5 ~ 6m と小規模な古墳であるものの、横穴式石室を埋葬施設としていると考えられる。この傾斜面にはほかにも石材の散乱している箇所がいくつかあり、埋没古墳も考えられそうである。大きく異なるのが I - 26 号墳であり、I - 23 ~ 25 号墳とは尾根を隔てて反対側に、1 基独立して東斜面に立地している。尾根斜面を大きく削りだして周溝を築いており、明確な墳丘が見られる。南北 7.5、東西 8.3m、高さ 2.1m の墳丘をもち、主体部は横穴式石室である。

I e 支群は、I b 支群から北西方向に斜面を登りきった尾根上にあり、2 基で構成されている。I - 27 号墳は墳丘直径 12.2m、高さ 3.9m で周溝を明確にもつもので、主体部は横穴式石室と考えられる。I - 28 号墳は墳丘とともに横穴式石室が大きく破壊されているが、I c ~ I e 支群で唯一石室を観察できる古墳である。東西 9.2m、南北 10.4m、高さ 2.4m の横穴式石室墳で、玄室奥壁幅は 1.1m とそれほど大きなものではないが、塚山古墳群で数少ない、尾根上に立地する古墳である。

(5) 第II支群の踏査成果

第II支群は、いずれも測量調査を実施することができず、踏査と計測のみを行った。支群の認識は、北西から南東にかけてある尾根を挟み、東西に大きく分けて立地する II a 支群と II c 支群をまず設定し、さらに山奥に 1 基のみ見られる II - 15 号墳を II d 支群に、南東緩斜面に見られる II - 7 号墳を II b 支群に、東の谷を隔てて 1 基立地する I - 16 号墳を II e 支群として独立させ、計 5 つの小支群に分けた。II b、II d、II e 支群については現在 1 基のみであるが、立地的に離れていることと、将来的な調査で増加する可能性が高いと考え、あえて独立させた。

II a 支群は、谷筋の西斜面にある 6 基の横穴式石室墳で構成されており、墳丘は径 5m 前後のものから 9m を測るものまで認められる。規模の大きなものは谷側に多く、II - 1、2 号墳が比較的大きい一方、少し山に登った立地を見せる II - 5、6 号墳は、石室主軸方向で 5m に満たないものとなる。II - 6 号墳の墳丘前面には石積みが見られ、II - 5 号墳にも前面に基壇状地形があり、大振りの石材が認められることから、外護列石を持っている可能性がある。ちなみに II - 6 号墳は、かろうじて右片袖の可能性を指摘できるが、心もとない。II a 支群において少しでも石室を観察できるのは II - 1、4、5、6 号墳であり、いずれも奥壁幅は 1m 以下である。

II b 支群は、緩斜面地に立地する II - 7 号墳のみである。東西 6.7m、南北 5m、高さ 1m の小古墳であり、天井石が 1 石のみ架構した状態で残されている。横穴式石室の奥壁幅が 0.8m の低墳丘墳である。

Ⅱc支群は、Ⅱa支群東の低い尾根を越えたところにあり、緩傾斜地から斜面の傾斜変換点に立地する。7基の横穴式石室墳からなり、Ⅱ-8号墳を除き墳丘の残りも良好である。墳丘規模は、最大で南北15.8m、高さ4.3mの墳丘をもつⅡ-9号墳を筆頭に、すべて径6mを超える大きなものである。Ⅱ-8号墳は、一見すると天井石が確認できるように見えるが、奥壁が倒れたものと評価している。そうすると、墳丘はかなり壊されていることになる。Ⅱ-12号墳には外護石積みが見られる。Ⅱc支群の石室は大規模なものが目立ち、最大のものはⅡ-10号墳で、奥壁幅1.75mを測る。ついでⅡ-8号墳の1.72m、Ⅱ-9号墳の1.66m、Ⅱ-12号墳の1.55mと続く。Ⅱ-9、10号墳は右片袖式石室であり、Ⅱ-10号墳の袖石は立石のものである。Ⅱ-10、12、14号墳には玄室内に間仕切りが認められるが、うちⅡ-14号墳のものは右側壁にのみ設置され、かつ壁面に埋め込まれたものではない。天井に架構した石材もないことから、かなり不安定な印象を受ける。また、間仕切りを持つⅡ-12号墳の羨道部には板石が散乱しており、敷石、框石、扉石のいずれかの可能性が考えられる。この古墳は他の古墳に比べ、大振りの石材で石室が構築されている。

Ⅱd支群は、Ⅱc支群をさらに谷沿いに登ったところに立地するⅡ-15号墳が該当する。墳丘の残りは良好で、東西10.5m、南北8.6m、高さ4.1mを測る方墳もしくは多角形墳と評価できるが、石室入口部が崩落しており、内部の様子は明らかでない。墳丘前面及び東側面には大振りの石材による石列が見られるほか、古墳前面から5mの地点には、2.4m×1.9mにわたって石列が角を形成するように確認されていることから、方形壇があった可能性が高い。塚山古墳群のなかでも最終末のものであろう。

Ⅱe支群は、Ⅱ-16号墳にあたる。この古墳はⅡc支群から東の谷を越えた尾根線上に位置しており、古墳の背面をカットしたような、墳丘加工の痕跡はほとんど見られない。現状では墳丘規模を南北10m、東西8.5m、高さ1.2mとしておくが、今後の調査により変更される可能性がある。横穴式石室は大きく破壊されているが、奥壁幅1.33m、石室長6.35mを測る。石室長はほとんど石材が抜き取られているなかで、南端に立柱状の石があったことを根拠としているが、羨門立柱石かどうかはわからない。

4 まとめ

本書では、塚山古墳群をさらに小支群にわけ、立地と規模を明らかにした。その結果、Ⅰa支群、Ⅱc支群にそれぞれ大規模墳丘をもつ古墳が集中して存在すること、Ⅰb支群もさらに細分可能であるとすれば、他の小支群は、古墳数がそれほど多くないことが判明した。また、例えばⅠd支群の急傾斜地に立地するⅠ-23～25号墳、緩傾斜地に立地するⅠc支群のⅠ-19～21号墳などのように、墳丘規模、形態が類似したものが集中していることも特徴として挙げられるが、これは多分に立地によるものと考えられる。

かつて木虎谷古墳群の分析で、奥壁幅1.4mを超える横穴式石室と超えないものとの間には、時期的、内容的な差異があること、そして大型の石室から小型の石室へと変遷するなかで、立地の上下関係が見受けられること、さらにこうした古墳群の関係は数多く認められ、一見する

と大規模に密集しているかのように思える古墳群も、実は小さなグループが重なり合うことによって成り立っていると論じたことがあるが（荒木編 2006）、同じ見方を塚山古墳群でも適用することはある程度可能である。しかし、I b 支群やII c 支群では、山側の古墳の方が小さく、全く同一の論理で説明することは難しそうである。これは塚山古墳群が、ほかの群集墳とはやや異なる原理で造墓されたことの証左となるのかもしれない。さらなる検討は、実際に発掘調査が行われることを待って行う所存である。

第II支群で見つかったII-15号墳は、側面の石列と墳丘形状から方墳ないしは多角形墳と評価できる。墳丘前面には石列による方形壇があり、立地がやや奥まっていることから、塚山古墳群でも最終末に築かれた終末期古墳である可能性が高い。

今回の調査は、範囲確認のための測量調査であったが、周辺への踏査を実施することで、多くの成果を得ることができた。なかでも第II支群の存在と内容は特筆される。今回の調査により、『赤穂市史』に記載の第三群集墳（7基）を足すと総数で51基となった。



塚山古墳群の測量調査風景

第3章 周世宮裏山古墳群の測量調査



周世宮裏山4号墳

1 調査の概要

(1) 調査に至る経緯

赤穂市産業振興部農林水産課(当時)が、平成13年度に実施した森林空間総合整備事業によって、周知の遺跡である周世宮裏山古墳群周辺の樹木が間伐された。この間伐により、今まで実態が明らかでなかった当古墳群の墳丘および石室形状の具体的な把握が可能となった。踏査を行ったところ、古墳群は後世の攪乱等により石室が露出しているものが多く、完存しているものは少ないが、墳丘および周溝の残存状況が良好であることが判明した。

これまでに、当古墳群を記載した資料として『赤穂市史』第一巻及び第四巻があったが、各古墳の詳細が明らかではなく縮尺も大きいため、資料として充分ではなかった。また、古墳の位置や総数が曖昧であり、問題を孕むものであった。さらに、森林空間総合整備事業の延長として遊歩道計画が持ち上がっていたこともあって、時間の経過とともに再び旧状に復してしまう前に、測量調査を行って範囲確認を実施することとなった。測量調査は、平成14年4月24日から3月31日にかけての間に、約5,400㎡について実施した(実働20日)。

(2) 調査体制

調査体制は以下のとおりである。

赤穂市教育委員会事務局

測量調査

平成14(2002)年度

【教育長】宮本邦夫 【教育次長】岡島三郎 【生涯学習課長】宮崎素一

【文化財係長】藤田忠彦 【事務担当】金山千津子 【整備担当】中田宗伯

【整理・普及担当】味呑英和 【発掘担当】荒木幸治

【発掘調査作業員】社団法人赤穂市シルバー人材センター

上尾正孝 染川良一 大道正之 寺本徳義 三宅 稔 門野 實 平野茂樹

山本勝巳 渡代三郎

整理調査

平成22年度(2010)年度

【教育長】室井久和 【教育次長】高山康秀

【文化財担当参事兼生涯学習課長】宮崎素一

【文化財係長】中田宗伯 【事務担当】加藤章江 【民俗・普及担当】藤田忠彦

【発掘・整理担当】荒木幸治 【整理調査員】篠宮欣子

【整理作業員】入江麻紀 大川加奈子 坂井美和 西野維子

(3) 調査の概要

測量を実施する前に、平板測量の基準とするための杭を44本任意に打設した。これらのうち実際に測量に使用した杭については、調査と並行して電子平板による測量を行っている。標高は調査区南東隅にある農林水産課打設の仮ベンチマークのレベル(T.P.=27.743m)から設定した。

測量は、1:100縮尺の平板測量を行い、50cmの等高線間隔を原則として実施したが、古墳の墳丘及びその周辺部のみ、25cmの等高線間隔に設定した。なお、間伐が行われたとはいえ、伐採木の集積が多量に残されていたため、測量困難な箇所が多く存在したことを記しておきたい。

ちなみに、調査実施翌年の平成15年度には、この測量成果を記載した案内看板を古墳群前に設置し、郷土学習に供している(右写真)。



2 地理的・歴史的環境

(1) 地理的・歴史的環境

周世地域は、千種川が赤穂市内を北から南へ貫流するとき、西山にぶつかって大きく蛇行する流域と、北方の高雄山とに挟まれた地域にあたり、南半部に 25,000m²程度の小規模な平野を擁している。現在の市道は、千種川西岸を山沿いに通るルートとなっているが、近代までの主要道は、周世から有年横尾を抜ける峠道であった。有年地域では、千種川を東西に挟むようにして有年原、東有年の集落が存在しているように、ここでは千種川を南北に挟むようにして高雄、周世の集落が存在している。いずれの場所でも弥生時代以降の遺跡が確認されており、自然環境及び交通と、人々の集住のあり方が窺えて興味深い。

周世地域の平野部は、古代末頃に形成された完新世段丘面と千種川が南流する際に形成された自然堤防及びその後背湿地からなっており、平野の北半部には周世入相遺跡が所在している。

周世入相遺跡は、戦後の瓦粘土採取の際に発見された遺跡で、1982・1983年度には分布調査を実施、1985・1986年度にはほ場整備に伴う全面発掘調査を実施している。また1986～1988年度には、兵庫県教育委員会により全面調査が実施された。調査の結果、この地には弥生時代中期から集落が営まれていたことが明らかになっており、周世宮裏山古墳群の築造母体となったであろう、古墳時代後期の集落遺跡も見つかっている（甲斐編 1990）。特に弥生時代後期前葉の土坑一括資料は、西播磨地域における弥生土器編年の基準資料となっている。

周世宮裏山古墳群は、平野部から 200 m 程谷奥に入ったところにあり、西に開けた緩傾斜面から傾斜面の転換点に所在する（図 31）。『赤穂市史』（松岡 1981・1984）によると、周辺には黒谷古墳（奥壁幅約 1m の横穴式石室墳）や周世水木原古墳（奥壁幅 1.5m を測る墳径約 13m の横穴式石室墳）が所在する。これらのことから、周世地域は、古来より千種川の壊滅的な洪水被害を頻繁に受けず、安定した居住環境及び経営基盤を保持していたことが推測される。

(2) 周世宮裏山古墳群への言及

赤穂市が昭和 44 年（1969）に発行している『赤穂の埋蔵文化財』には、「宮裏山古墳群」として図面上に 27 基のドットが落とされており、10 基分の写真が掲載され、そのすべてについて、墳丘や石室についての基本データが記載されている（赤穂市教育委員会ほか 1969）。ただし、巻末に記された遺跡地図のドットには古墳番号がなく、分布状況については明らかでない。昭和 56 年発行の『赤穂市史』第一巻では、古墳の数は 28 基とされ、雑木の中でその位置を確認できた 22 基分の計測値と、等高線との大まかな対応が図面として提示された（松岡 1981）。「墳丘の直径が四メートルを超えるものは二例で十六例は四メートル以下の小円墳である。あとの四例は測定不能であった。」とし、副葬品として、地元住民によって耳環、台付長頸壺、坏などが採集されたことから、7 世紀初め～中ごろに築造されたと推定している。そのうえで「このような、ほぼ同じ大きさの小型の横穴式石室が一定の地域に群集して造られていることは、古墳築造者の間に大きな階層差のなかったことを示している。古墳の分布から小単位集団を求めるなら大体四群に分けられる。」と評価している。

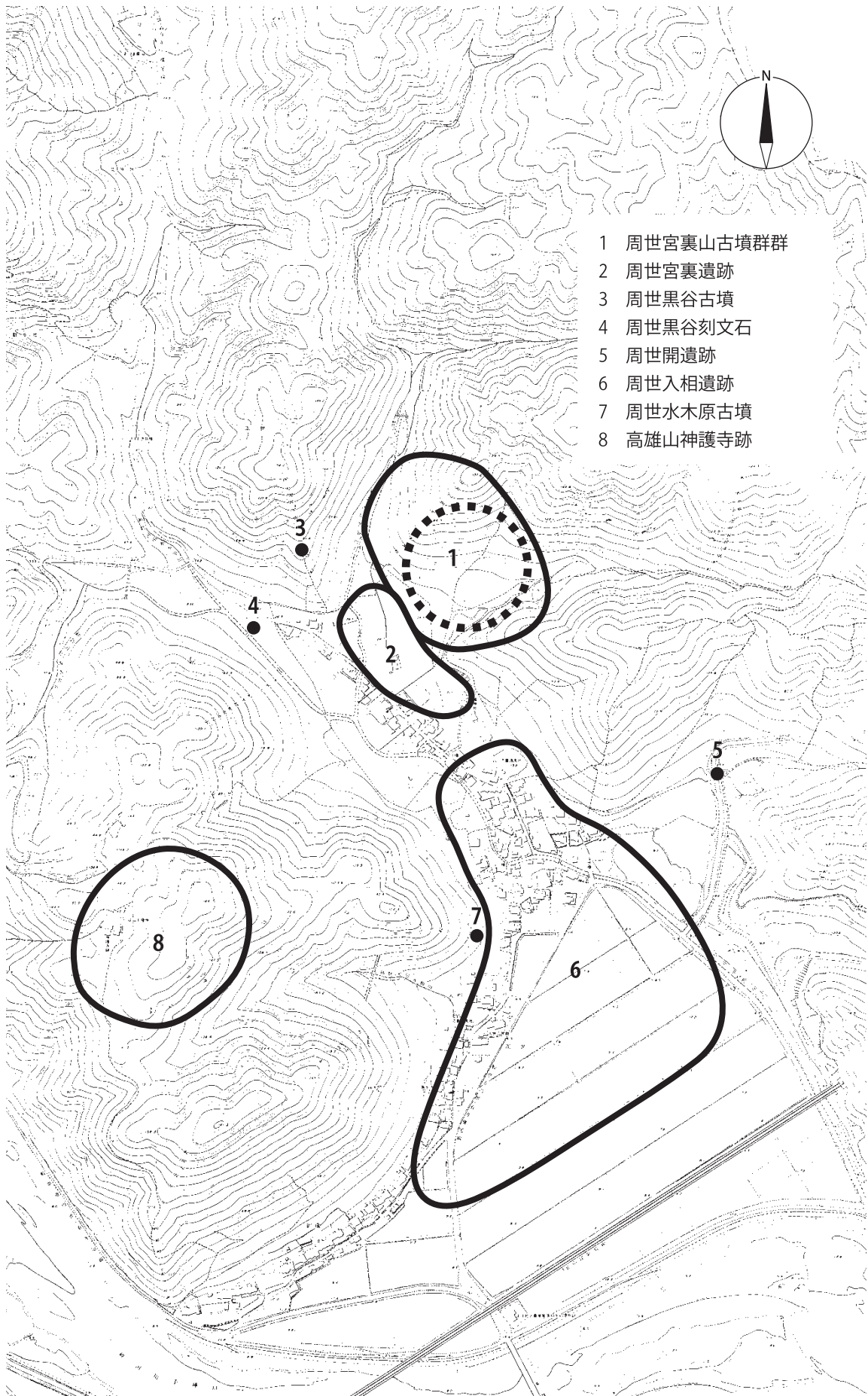


図31 周世宮裏山古墳群周辺の遺跡地図 (S = 1 : 25,000) (破線内は本書で報告する範囲)

昭和59年(1984)発行の『赤穂市史』第四巻では、28基のうち1基を立地的、時期的な差から黒谷古墳として独立させ、27基について計測値を掲載している(図32、松岡1984)。『赤穂市史』第一巻で述べられた墳丘規模は、一覧表によって訂正され、5m以上の古墳が22例あるとした。そして「この古墳群はすべて横穴式石室墳であり、そのうち片袖のあるものはわずかに2例で、その大きさも大差はない。このような古墳群は一般に群集墳と呼ばれていて、似た階層の人たちによって組織された集団が存在したことを示している。このような階層差のない集団は一般に農業経営集団には発生しにくく、製塩・窯業集団の居住地にしばしばみられる現象とされている。しかし、周世を中心とした付近にはこのような特殊生産業者の遺構は発見されていない。」と記載している。出土遺物として長頸壺、平瓶及び耳環が掲載され、7世紀のものとして評価している。

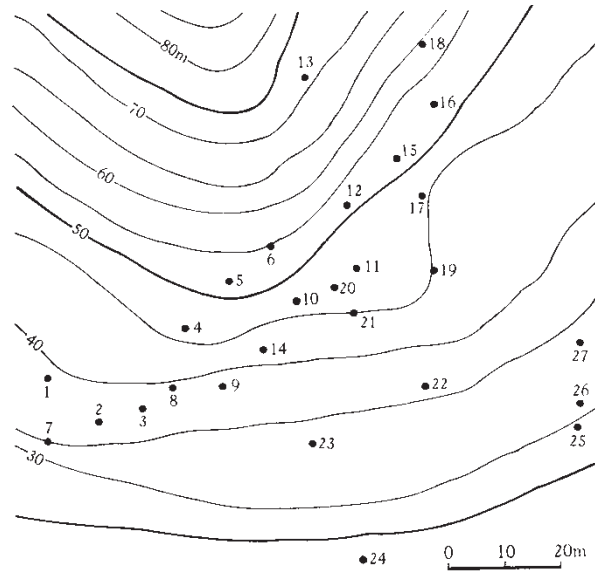


図32 『赤穂市史』第四巻に掲載された周世宮裏山古墳群の位置図(松岡1984)

『有年考古館蔵品図録』(西播流域史研究会編1991)では松岡秀夫氏に対する聞き取りや遺物の観察(図32)をもとに遺跡の位置等が検討されているが、「この付近の古墳は、(注:遺物の注記として)宮山古墳とか宮山群集墳とも書かれており、それぞれが不明確であるが、案外宮山とつく古墳は、すべてこの群集墳に一括できるのではないかと結んでいる。確かに、周世地域の八幡神社周辺では、立地的に当該場所以外に古墳が築造される可能性は低いと思われる、首肯できる。これらの文献では、出土遺物の検討からTK217期(7世紀前半)の築造が推定されている。なお、他文献には周世宮裏山古墳群に対する言及はほとんどなく、1996年発行の『兵庫県の考古学』(村川行弘編1996)で、古墳時代終末期における小規模古墳群の代表例として言及されている程度である。現在の視点で採集遺物を評価するならば、12、13はTK209型式、5はTK217型式、7はTK217型式もしくはそれ以降であろうか。

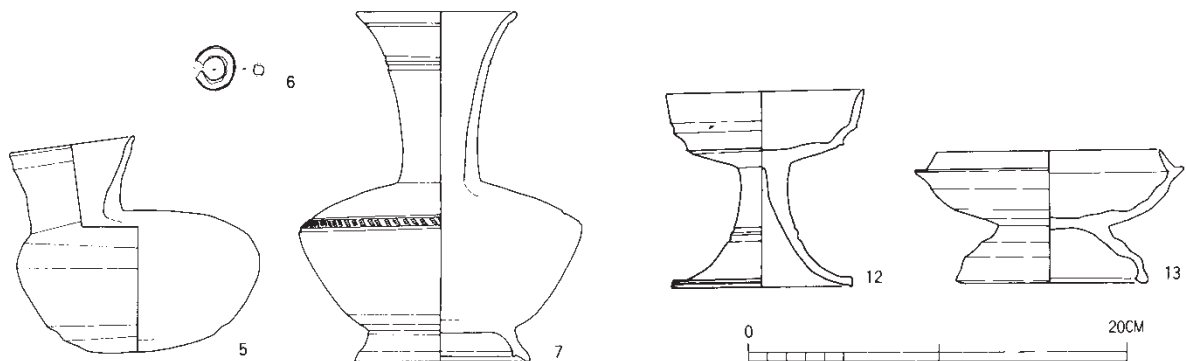


図33 周世宮裏山古墳群 採集遺物(S=1:4)(西播流域史研究会編1991)

3 調査成果

当古墳群の墳丘は、一部を除いて良好に残存しており、周溝も目視できる状況であった（図34）。測量成果に基づいて、『赤穂市史』第四巻における古墳分布図の古墳番号との対応を試みると、低地部の23、24、25、26、27号墳の位置が安定していないものの、概ね一致させることができた。ただ22、24号墳は、古墳の可能性をかりうじて残す地形隆起があり、それに充てることとした。これで未確定な2基を含めて総数27基を数え、これまでの調査成果と整合する（図35）。表3・4には、各古墳のデータを掲載している。

墳丘 各古墳の、周溝を含まない墳丘規模は、石室主軸で4～8.5m、石室中軸で3.6～7.5mの範囲に収まり、最大規模6m以内のものが15例と半数以上を占めるなど、主に小古墳で構成されていることがわかる。円墳である4、5、6、12、13号墳を除くすべての古墳は、正面（谷側）が直線となり、背面（山側）が曲線を描く、いわば「盾形」を呈する。また墳丘前面に石積みが見られる例が、2号墳を代表例として確実に存在しており（写真図版84頁）、外護列石もしくは葺石と思しき石材が、多くの古墳で確認されている。これらの石積み等をもつ古墳のうちには、墳丘前面に基壇状の地形を見せるものがあり、傾斜地に古墳を築く際の「地業」とも言える地形が視認できるものもある。表3、4のデータのうち墳丘規模について「+」を加えてある数値は、その基壇状地形の長さを示している。ただしこうした特徴は、円墳には見られない。また「盾形」墳には、例えば3、8号墳、10、20、11号墳のように、石室主軸が類似し、かつ周溝を共有して立地するまとまりが、いくつか存在していることも注目される。一方、円墳はそれぞれが隣接していても、石室主軸は微妙に異なっている。

石室 石室の規模は、現存長が最大6.5mの石室があり、推定全長は2.8～7.4mのものまで幅広く見られる。玄室幅は、基底部で計測できていないものの、0.45～1.1mまでの幅に収まり、参考値ながらも小規模な石室ばかりで構成されていると言ってよいだろう。

袖の有無は現状からの推定にとどまるが、12号墳に左片袖の可能性が見られるのみで、他の古墳については視認できる範囲で無袖の可能性を考えている。

奥壁の用石法 現在、奥壁の存在が確認できるのは、27基中20基であり、そのうち25号墳は、天井石が乗っていて奥壁の様子が確認できない。25号墳を除く19基の奥壁構成は、大振りの石材1つで奥壁幅を占めているもの、大振りの石材1つと小振りの石材で奥壁幅を占めているもの、石材2つを並べて奥壁幅を占めているものがある。ただし、全ての古墳は基底石が見えているわけではなく、木虎谷古墳群で見られたような（荒木2006）、奥壁用石法の特異性と言えるかどうかはわからない。とはいえ、天井石付近の積み方にも、大振りの石材1つで積まれたもののほか、長めの石材を横手積みしたものや2石を並べて積まれたものが存在しており、積み方に普遍性があるというよりも、とりあえず積んだ、と言えるような乱雑な積み方が目立っている。

石室主軸 図の石室主軸方向は厳密なものではないが、墳丘を斜面に対し垂直に築いているにもかかわらず、石室が墳丘主軸に対して角度を若干振っているものが多く認められており、何らかの意図が働いていたことは明らかである。

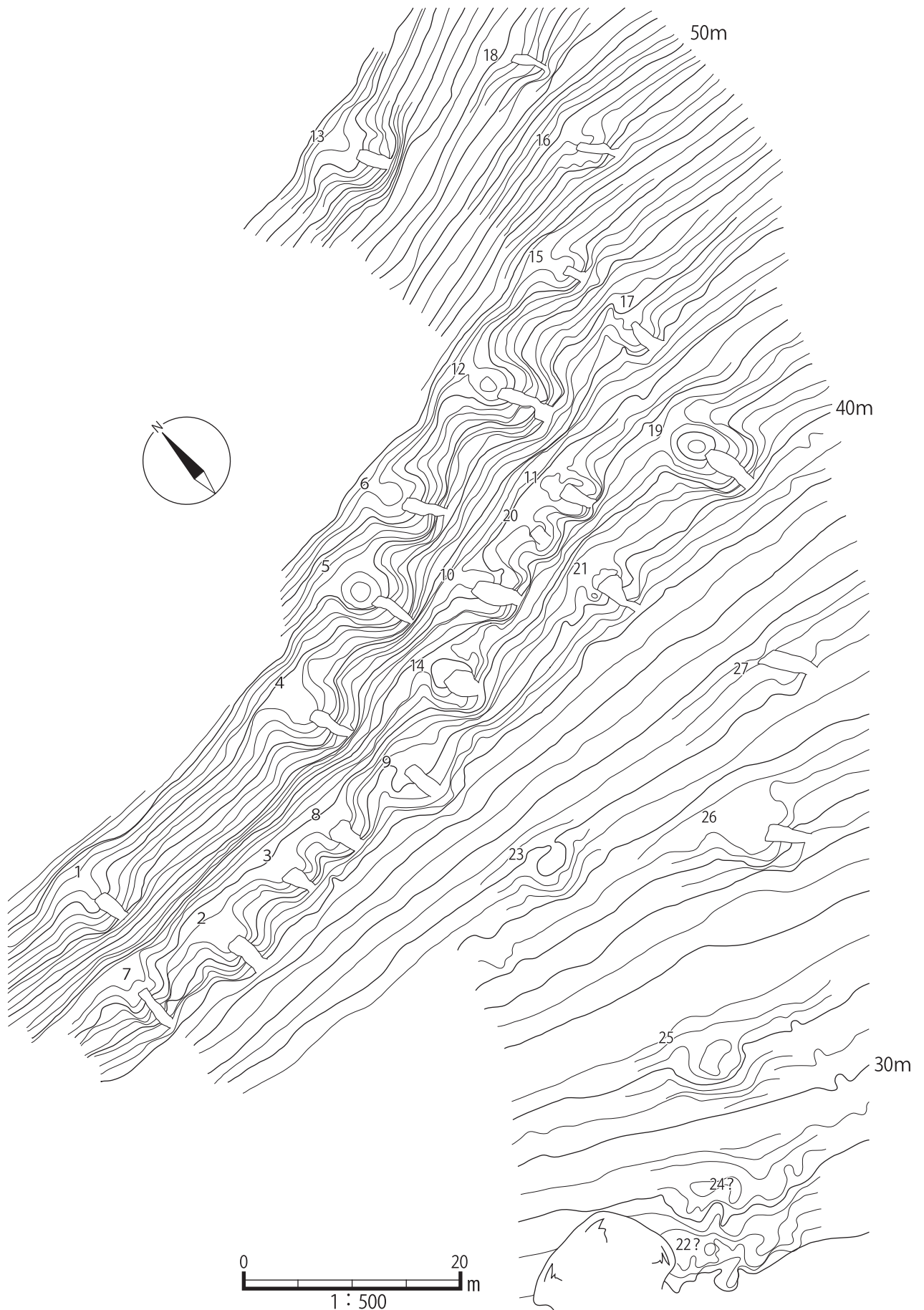


图34 周世宮裏山古墳群 平板測量図 (S = 1 : 500)

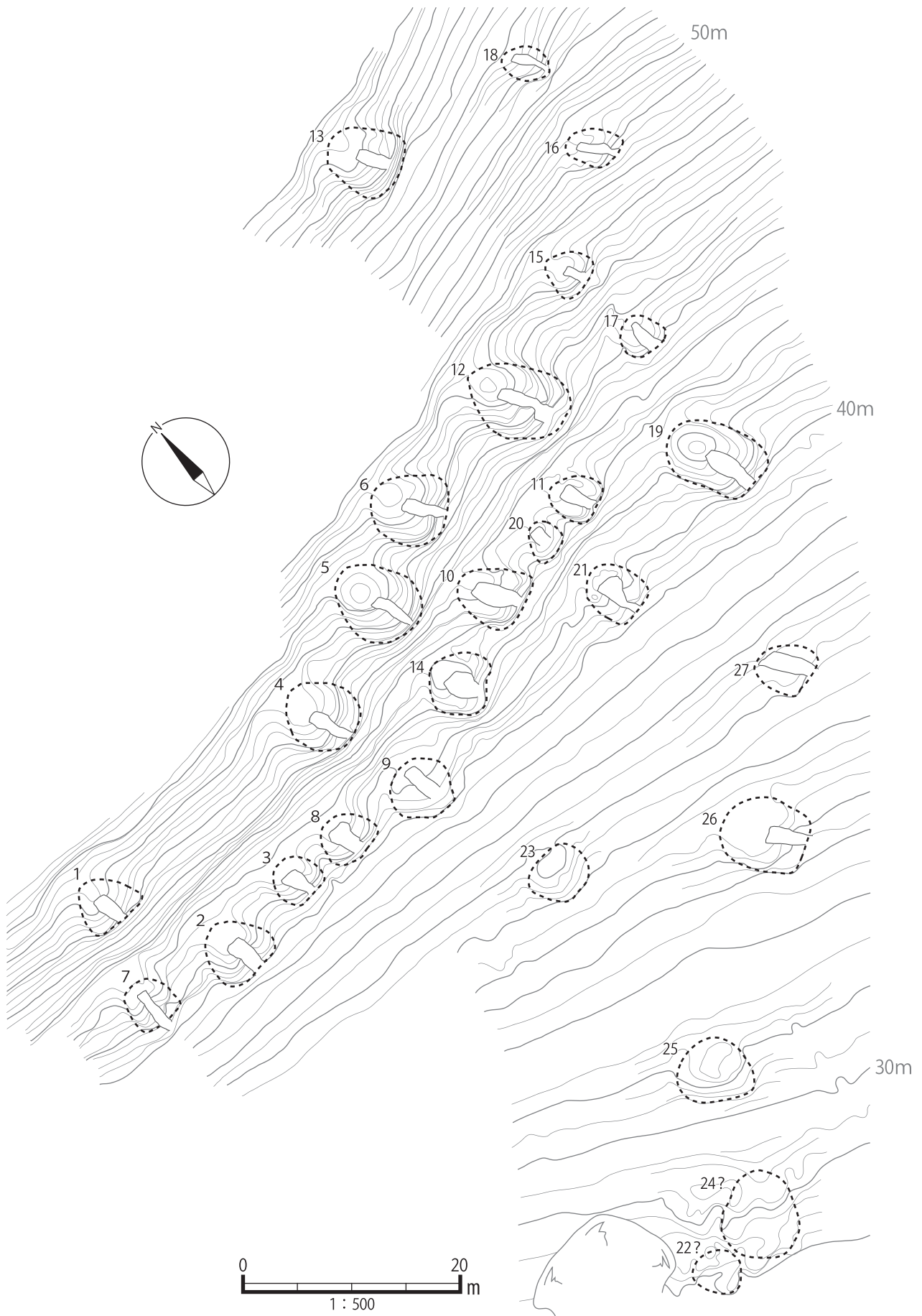


図35 周世宮裏山古墳群 墳丘復元想定図 (S = 1 : 500)

古墳番号	墳 丘			石 室							
	石室主軸 4.7+2.3	石室中軸 5.6	備 考	視認可能石材	備 考	現存高	奥壁最大幅	奥壁最小幅	残存長	推定全長	羨道幅
1号墳			北から西に石材散乱。南西葺石が明確。前庭は石が散乱。崩壊か。前庭に石積みがあるが、古墳に伴うか不明。	天井石・奥壁 右側壁・左側壁		0.9	1.0	0.7	2.0	—	—
2号墳	5.5+2.6	5.0	北から東にかけて拳大の人頭大の石材散乱。明確な二段墳丘であり、葺石が南西隅前庭に見られる。前庭には高石積みが見られる。	天井石・奥壁 右側壁・左側壁	天井石1石残存。あと20～30cm下で床面か。	1.3	1.0	0.65	2.6	4.6	—
3号墳	5.0	5.0	北側に拳～人頭大の石材多く散乱。直上に古墳はない。前庭から南東、東に明確な葺石あり。前庭はわずかに高く、列石に見えることもない。	奥壁 右側壁・左側壁	かなり埋没し、側壁の残存も良くないが、基底石は残っている可能性あり。	0.4	*0.75	—	—	—	—
4号墳	8.5	7.5	周囲に目立つ石材はない。南西に明確な葺石。前庭は二段構造になっているが、正面は掻き出しによりわからなくなっている。	天井石・奥壁 右側壁・左側壁	石室の残りは良い。羨道はやや崩落して埋没している。持ち送りは左壁のみ見られる。奥壁から160cmまで天井石が残る。	1.3	0.8	0.6	3.8	7.4	—
5号墳	7.3	6.5	周囲に石材はそれほど散乱していない。前庭に大きな石があるものの明確でない。前庭は傾斜地なのでかなり低い。	天井石・奥壁 右側壁・左側壁	石室残りはかなり良い。床面、羨道は埋まっています。持ち送りはほとんどない。天井石は奥壁から2.4mまで残っている。	1.2	0.85	0.8	3.7	6.5	—
6号墳	6.6	6.0	北～東側に人頭大の石材散乱。墳丘の残りよい。前庭部わずかに葺石らしきもの残る。	天井石・奥壁 右側壁・左側壁	左側壁の持ち送りが大変急。石室の残りはかなり良い。床面には扁平な石が多く見られる。	1.2	1.0	0.6	3.9	5.2	—
7号墳	5+1.6	5.0	北から西にかけて特に石材が散乱。前庭には石が多くあるが不明。崩壊か。前庭は不明瞭が存在する可能性あり。東側石積みが明確に見られる。	天井石・奥壁 右側壁・左側壁	羨道は埋没。基底しか残っていない。奥壁周辺は良好に残る。	1.1	0.9	0.6	2.1	3.8	—
8号墳	4.9	5.0	前面、西面に明確な葺石あり。前庭に一段高い箇所があり、列石状を呈する。西はすぐ2号墳。周囲に石の散乱は少ない。	天井石・奥壁 右側壁・左側壁	小さな袖石らしいものがあるが、評価保留。かなり削平されている。左側壁は直に立ち上がっている。	1.1	0.9	0.9	0.85	—	—
9号墳	5.0	5.0	石材が散乱するが、葺石があるようには見えない。墳丘側面がやや直線を呈している。	天井石・奥壁 右側壁・左側壁	天井石1石のみ残る。左側壁が奥壁側ではかなり内傾する。	1.0	0.9	0.7	2.1	2.9	—
10号墳	6.0	6.0	北側にわずかに石材が散乱するほかは少ない。南東隅に石積みあり。斜めに面をもつ？前面の1石はしっかりしている。墳幅か。	奥壁 右側壁・左側壁		1.1	0.8	0.6	1.6	5.1	—
11号墳	5.9	4.6	北から東にかけて石材散乱（北東に古墳あり）。所々に葺石風の石積み状のものあり。前庭には座っている石あり。	奥壁 右側壁・左側壁	石室の残りは比較的良い（奥壁側）。天井石1石が落ち込んでいる。すぐ上に天井石が来てよい。	1.1	0.8	0.6	3.0	4.8	—
12号墳	7.4+2.8	6.2	東側にはかなり明瞭な貼石があり、そのまま石室入口までつながる。下段には石が散乱するものの確定できず。羨道は埋没。コツパ状の石材がわずかに見られるのみ。前庭が異様に高くなる立地。羨道部は埋没。石室入口を示すものはない。葺石あり。南西隅角石があり、これから300cmで天井石に該当する高さとなる。	奥壁 右側壁・左側壁	左片袖の可能性あり。	1.2	1.05	0.8	3.2	6.7	—
13号墳	8.0	4.5	周囲に石材が散乱するが、葺石があるようには見えない。墳丘側面がやや直線を呈している。	天井石	無袖か。	1.0	1.0	0.7	3.2	—	—
14号墳	6.6	6.0	かなり削平を受けている。南東部はかわらうじて残っており、東側には貼石状の石がわずかに確認される。周囲（北から東方向）に人頭大以上の石材が若干散乱している。	視認できず		—	—	—	—	—	—

表3 周世町裏山古墳群 古墳データ (1)

古墳番号	墳		丘		石室 中軸	石室 主軸	室						
	石室 主軸	石室 中軸	備	考			補認可能石材	備	考	現存高	奥壁 最大幅	奥壁 最小幅	残存長
15号墳	4.6	4.8	墳丘東に石材が散乱するが、西側にはない。かろうじて墳丘頂部に5、6点あり。北東から南西の傾斜地にあり、東と西で墳丘高が全く異なる。石室前庭に掻き出しの土あり。入口東側前庭に墳丘裾にあたる推定される大振りの石あり。	墳丘周囲に多量の石材が散乱し、直径2cm前後までのものまで見られる。再加工か。15号墳と同様、東西で高低差がある。西前庭に石積み状の石列あり。かなり埋没。表に出ているのは天井石付近。	天井石・奥壁 右側壁・左側壁	無袖。	1.2	0.55	0.45	3.0	3.5	0.5	
16号墳	4.0	3.6	墳丘周囲に多量の石材が散乱し、直径2cm前後までのものまで見られる。再加工か。15号墳と同様、東西で高低差がある。西前庭に石積み状の石列あり。かなり埋没。表に出ているのは天井石付近。	墳丘前部に列石状の石材あり。石室直前には非常に大振りの石材が2点見られるが、崩落したものかもしれない。他の周囲にも若干石材が存在するが、列石状にはならない。墳丘西側にはほとんど石材がない。	右側壁・左側壁	無袖。	0.5	0.5	0.45	2.6	—	0.5	
17号墳	4.0	4.0	東側に、拳大〜人頭大の多数の石材が散乱。西側にもわずかにあり。急斜面なので崩落か。明確な列石はない。	墳丘前部に列石状の石材あり。石室直前には非常に大振りの石材が2点見られるが、崩落したものかもしれない。他の周囲にも若干石材が存在するが、列石状にはならない。墳丘西側にはほとんど石材がない。	奥壁 右側壁・左側壁	無袖。	0.8	0.6	0.45	2.1	3.0	0.5	
18号墳	4.0	4.2	東側に、拳大〜人頭大の多数の石材が散乱。西側にもわずかにあり。急斜面なので崩落か。明確な列石はない。	墳丘前部に列石状の石材あり。石室直前には非常に大振りの石材が2点見られるが、崩落したものかもしれない。他の周囲にも若干石材が存在するが、列石状にはならない。墳丘西側にはほとんど石材がない。	天井石・奥壁 右側壁・左側壁	無袖。	0.4	0.55	0.45	1.8	2.8	—	
19号墳	8.4	6.5	西側に一部石積み状の書石が見られるが、それ以外（特に東側）には石が少くない。前庭部には多量の石材（人頭大以上）が明確に列石状にある。墳丘自体の残りが非常によい。	墳丘前部に列石状の石材あり。石室直前には非常に大振りの石材が2点見られるが、崩落したものかもしれない。他の周囲にも若干石材が存在するが、列石状にはならない。墳丘西側にはほとんど石材がない。	天井石・奥壁 右側壁・左側壁	無袖か。	1.2	1.0	0.7	6.5	—	—	
20号墳	4.4	4.7	周囲に石材は少ない。前面はもともとが急な傾斜のため、周溝底から追える墳裾と、地面の下の墳裾の2通りに考えられる。どちらも石列と言えるものはない。	墳丘前部に列石状の石材あり。石室直前には非常に大振りの石材が2点見られるが、崩落したものかもしれない。他の周囲にも若干石材が存在するが、列石状にはならない。墳丘西側にはほとんど石材がない。	奥壁 右側壁・左側壁	現状は残りが悪いが、かなり埋没している。奥壁の様子から、天井石がすぐ上に乗ってもおかしくない。	0.5	0.5	0.4	0.4	—	—	
21号墳	6.0	5.8	若干周囲に拳大〜人頭大の石材が散乱するも、列状を呈さず。墳丘の残りは比較的よいが、石室はかなり壊されている。	墳丘前部に列石状の石材あり。石室直前には非常に大振りの石材が2点見られるが、崩落したものかもしれない。他の周囲にも若干石材が存在するが、列石状にはならない。墳丘西側にはほとんど石材がない。	奥壁 右側壁・左側壁	石室は上部が飛ばされている可能性あり。内部は埋没。	0.9	0.75	0.6	3.7	—	—	
22号墳	—	—	横穴式石室の崩壊か？主軸方向が南西を向いており、不安が残る。	墳丘前部に列石状の石材あり。石室直前には非常に大振りの石材が2点見られるが、崩落したものかもしれない。他の周囲にも若干石材が存在するが、列石状にはならない。墳丘西側にはほとんど石材がない。	視認できず	石材見られず。	—	—	—	—	—	—	
23号墳	4.1	4.8	西側斜面に拳大〜人頭大の石材が書石状に確認される。前庭部東に2石列石が座っている。石室は埋没。天井石は動いている。	墳丘前部に列石状の石材あり。石室直前には非常に大振りの石材が2点見られるが、崩落したものかもしれない。他の周囲にも若干石材が存在するが、列石状にはならない。墳丘西側にはほとんど石材がない。	奥壁 右側壁・左側壁	無袖。天井石は動いているものの側壁は残り、基底石が残っているようである。ただし東側壁の一部は根により損壊している。ほぼ埋没。	4.8	0.45	0.45	2.3	3.2	0.55	
24号墳	—	—	古墳状隆起か。	墳丘前部に列石状の石材あり。石室直前には非常に大振りの石材が2点見られるが、崩落したものかもしれない。他の周囲にも若干石材が存在するが、列石状にはならない。墳丘西側にはほとんど石材がない。	—	—	—	—	—	—	—	—	
25号墳	5.0	5.0	周辺に拳大〜人頭大の石材が散乱。書石か。裾部と少し上ったところに列状に並ぶ箇所あり。	墳丘前部に列石状の石材あり。石室直前には非常に大振りの石材が2点見られるが、崩落したものかもしれない。他の周囲にも若干石材が存在するが、列石状にはならない。墳丘西側にはほとんど石材がない。	天井石・奥壁 右側壁・左側壁	奥壁側の天井石が抜き取られているが玄室部分はほぼ完存と思われる。羨道部はかなり壊されているか埋まっている。墳丘自体はかなり低いので、主体部は横穴式石室なのか不明。横穴式石室の可能性はある。その場合は内法で縦200cm、横70cmとなる。	0.35	0.7	0.7	2.0	—	0.7	
26号墳	6.0	5.75	墳丘表面に拳大〜人頭大の石が少し見られる。墳丘前庭部を面として視認できるが、石室は全壊。唯一、羨道部入口の両基底石と1石のみ残る。基底部は残っている可能性あり。墳丘西側に列石明瞭。前庭部に石が散乱し、南西だけ一段高いところあり。低いところに基壇状に盛った？もしくは掻き出しの土がある。石列の可能性あり。	墳丘前部に列石状の石材あり。石室直前には非常に大振りの石材が2点見られるが、崩落したものかもしれない。他の周囲にも若干石材が存在するが、列石状にはならない。墳丘西側にはほとんど石材がない。	右側壁・左側壁	無袖か。	0.75	—	—	—	3.5	0.95	
27号墳	4.3	5.2	東側に集中して拳大〜人頭大の石材が散乱。	墳丘前部に列石状の石材あり。石室直前には非常に大振りの石材が2点見られるが、崩落したものかもしれない。他の周囲にも若干石材が存在するが、列石状にはならない。墳丘西側にはほとんど石材がない。	天井石 右側壁・左側壁	無袖か。	0.7	1.1	1.1	3.0	—	0.9	

表4 周世宮裏山古墳群 古墳データ (2)

立地 西側の7号墳から11号墳にかけて東西に並ぶ9基は、緩傾斜地に築かれており、その山側にあたる1、4、5、6、12号墳が傾斜地に築かれているのと対照的である。その東に所在する16～18号墳は、傾斜地といえども1号墳などの立地と比べると傾斜は緩く、標高よりも微地形が影響していると言える。前述のように、盾形の墳丘をもつ本古墳群のなかで、より山側に立地する4、5、6、12、13号墳は円墳であり、かつ規模の大きいものである点で、周世宮裏山古墳群のなかで優位性があるかのように見える。

4 築造変遷の検討

(1) 墳丘形状と築造変遷

先の項目で述べたように、墳丘形状は4、5、6、12、13号墳で構成される円形の墳丘をもつ古墳と、それ以外のいわば「盾形」の墳丘をもつ古墳とに分けることができる。前者の墳丘規模は、石室主軸方向で6.6～8mを測り、4～8.4mを測る後者の墳丘規模を考慮すると、比較的大型の部類に入ることがわかる。まず、これを有意な差と見るべきなのかについて考える。

かつて行った木虎谷古墳群の検討では、石室の変遷として、大型から小型の流れがあることが判明し、事実、木虎谷古墳群では、何らかの属性を共有するいくつかの小支群が、山側から谷側にかけて、上下関係をもって変遷していることが想定された(荒木2006)。この想定が本古墳群でも適用できるとすれば、4、5、6、12、13号墳は相対的に山側にあることから、周世宮裏山古墳群でも古相に位置づけることができ、13号墳から18、16、15、17号墳などへの変遷を、また4、5、6、12号墳からより低い位置への古墳群への変遷を考えることができる。

しかし、4、5、6、12、13号墳は急傾斜地に立地しており、この場所に古墳を築くと自ずと主軸方向の規模は大きくなるし、労力を減らすと円墳になる、との見方も可能かもしれない。ここで例外に注目する。19号墳は、墳丘規模が8.4×6.5mと、周世宮裏山古墳群で最大規模と言えるものであるが、緩傾斜地に立地しており、「盾形」墳丘である。また、1号墳は、4、5号墳等と同様、急傾斜地に立地するが、石積みをもつ基壇が見られ「盾形」墳丘をもっている。

つまり、立地と墳丘形状は相関していないということになり、円墳には外護列石や基壇状地形が見られないことから、やはり時期差を反映していると考えたほうが良さそうである。明確な出土遺物が確認されていない中での推定の域を出ないが、周世宮裏山古墳群では、まず円墳である4、5、6、12、13号墳が築造されたと考えられる。その後、比較的大規模な古墳である1、19号墳が築造され、残りの古墳が最後に築かれる、という変遷を推定しておきたい。

(2) 奥壁用石法との相関性

上記で推定した築造変遷と、奥壁用石法との相関性について考える。本古墳群において古相と判断した4、5、6、12、13、19号墳では、すべて奥壁が確認できる。全ての奥壁は基底石が確認できているわけではないが、各古墳の奥壁石材を下から天井石までを数字で記していくと、4号墳の奥壁は1石+長手積み3段、5号墳は1石+2石並列、6号墳は1石+1石、12号墳は2石+2石+2石で天井石、13号墳は崩落している可能性のため保留、19号墳は2石

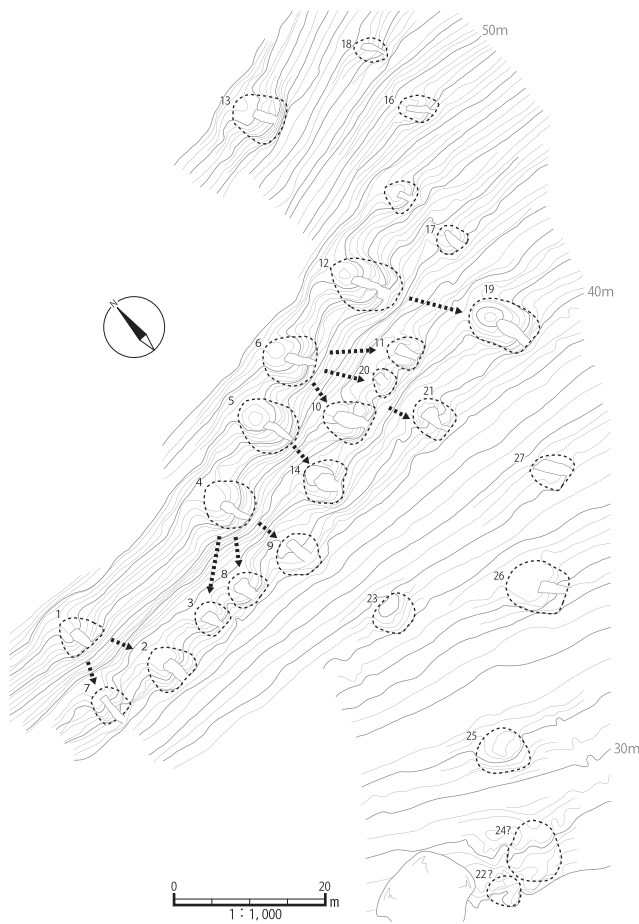


図36 周世宮裏山古墳群 変遷推定図 (S = 1 : 1,000)

(3) 立地との相関性

以上の築造変遷をさらに大きく捉えるため、本古墳群は、独立的にそれぞれ石室主軸方向をたがえて立地する円墳と、石室主軸方向が類似し、周溝を共有するように立地している「盾形」墳によって構成されていることはすでに述べた。上記の築造変遷も踏まえ、「盾形」墳のグルーピングを積極的に行ってみると、石室主軸が類似し、かつ周溝を共有しているのは3、8、9号墳、10、20、11号墳となるが、7、2、3号墳の取り扱いは判断が難しい。ただ、このようにグルーピングすることで、1号墳から7、2号墳へ、4号墳から3、8、9号墳へ、5号墳から14号墳へ、6号墳から10、20、11号墳、21号墳へ、12号墳から19号墳へ、という築造変遷がおぼろげながら明らかとなってこよう(図36)。もちろん、これらの変遷推定は現段階の暫定的なものであり、調査研究の進展により修正されることは多分にあると思われる。今後の調査を待ちたい。

+2石+1石(長手積み)となる。一方、それ以外の古墳の奥壁を見ていくと、1号墳は1石+乱積み、2号墳は1石+1石+2石、7号墳は1石+1石、10号墳は2石+1石、11号墳は1石+1石、15号墳は1石+1石、17号墳は1石+1石となる。基底石が見えていないため判断が難しいが、ここで注目したいのは12号墳と19号墳である。両者とも奥壁が3段見えており、12号墳は2石+2石+2石、19号墳は2石+2石+1石である。周囲の古墳が1石積みで占められるなか異質であり、測量図上では独立して立地しているかのように見える19号墳は、実は12号墳の系譜をもっている可能性を考慮することができないだろうか。つまり、12号墳から19号墳へ築造が移っていった可能性を考えたい。

第4章 本書のまとめ

本書では、赤穂市内における代表的な中期古墳である蟻無山古墳群、代表的な後期群集墳である塚山古墳群、周世宮裏山古墳群の測量調査成果を報告した。成果をまとめれば、以下のとおりである。

蟻無山古墳群

蟻無山古墳群は、3基で構成される古墳時代中期の古墳群である。

蟻無山1号墳は全長52mの造出し付き帆立貝形古墳である。

円丘部は二段築成で、直径44mを測り、突出部、造出し部と葺石をもつ。

採集遺物には、初期須恵器のほか、円筒埴輪、朝顔形埴輪、形象埴輪がある。

形象埴輪には、家、馬、鳥、盾、蓋、鞍、船が認められる。

須恵質の円筒埴輪片が伝蟻無山採集としてあるが、それを除くと須恵質ものはない。

埴輪には黒斑のあるものが目立つ。

蟻無山2号墳は直径10m、蟻無山3号墳は直径8mの円墳である。

2号墳は墳丘や周溝が良好に残存している。

3号墳は一部が破壊されているものの、概ね良好に遺存している。

塚山古墳群

塚山古墳群の従来知られていた3支群中、調査では第Ⅰ、第Ⅱ支群を明らかにした。

第Ⅰ、Ⅱ支群あわせて44基の古墳が確認された。

第Ⅰ支群は立地からⅠa～Ⅰd支群にまで分けられた。

第Ⅰ支群は、それぞれの支群により古墳の規模や立地にまとまりがある。

第Ⅱ支群は立地からⅡa～Ⅱe支群にまで分けられた。

第Ⅱ支群中にも、間仕切りをもつ横穴式石室が3基認められた。

Ⅱ-15号墳は、方形もしくは多角形の墳丘をもつ終末期古墳の可能性がある。

周世宮裏山古墳群

周世宮裏山古墳群には、古墳として確定できるものは25基ある。

そのほか、古墳の可能性のある地形隆起が2例認められる。

古墳は概して小さく、石室幅は最大でも1m強のものである。

一部には墳丘前面に基壇状地形があり、また石積みが見られるものもある。

墳丘規模と石室用石法から、築造変遷を推定した。

参考文献

- 有年考古館 1952『兵庫県赤穂郡西野山三號墳』
- 松岡秀夫 1962「播磨千種川流域の古代遺跡について」『考古学研究』第9巻第1号 考古学研究会
- 赤穂市教育委員会・赤穂市文化財調査委員会編 1969『赤穂の埋蔵文化財』
- 西野山古墳発掘調査研究会編 1973『中山古墳群調査報告』
- 川西宏幸 1978「円筒埴輪総論（上）」『考古学研究』第64巻第2号
- 川西宏幸 1979「円筒埴輪総論（下）」『考古学研究』第64巻第4号
- 松岡秀夫 1979「赤穂地方出土の円筒埴輪とその編年」『考古学研究』第102号 考古学研究会
- 石田善人 1981「中世の赤穂」『赤穂市史』第一巻 赤穂市
- 松岡秀夫 1981「考古学からみた赤穂」『赤穂市史』第一巻 赤穂市
- 松岡秀夫 1984「赤穂市の考古遺跡と遺物」『赤穂市史』第四巻 赤穂市
- 松本正信 1984「前方後円墳の時代」『龍野市史』第四巻 龍野市史編纂専門委員会編
- 宮崎素一ほか編 1984『周世入相遺跡発掘調査報告書』赤穂市教育委員会
- 岸本道昭 1985「西播磨地域の首長墓とその動向」『松岡秀夫傘寿記念—兵庫史の研究』神戸新聞出版センター
- 宮崎素一 1986「周世入相遺跡（第1次調査）」『兵庫県埋蔵文化財調査年報—昭和58年度』兵庫県教育委員会
- 宮崎素一ほか編 1986『周世入相遺跡確認調査報告書Ⅱ』赤穂市教育委員会
- 山崎信二 1986『横穴式石室構造の地域別比較研究』（1984年度文部省科学研究費奨励研究A）
- 櫃本誠一 1987「播磨における古墳の展開」『文化史論叢』横田健一先生古稀記念論文集刊行会
- 櫃本誠一 1988「千種川下流域の古墳」『高井梯三郎先生喜寿記念論集—歴史学と考古学』高井梯三郎先生喜寿記念事業会
- 宮崎素一 1988「周世入相遺跡（第2次調査）」『兵庫県埋蔵文化財調査年報—昭和60年度』兵庫県教育委員会
- 宮崎素一ほか編 1988『周世入相遺跡確認調査報告書Ⅲ』赤穂市教育委員会
- 河原隆彦 1990「千種川流域の石柵をもつ横穴式古墳の研究」『今里幾次先生古稀記念—播磨考古学論叢』今里幾次先生古稀記念論文集刊行会
- 甲斐昭光編 1990『周世入相遺跡—県道高尾—有年横尾線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—』兵庫県教育委員会
- 西播磨流域史研究会編 1991『有年考古館藏品図録』財団法人有年考古館
- 平田博幸・西口圭介編 1991『有年原・田中遺跡発掘調査報告』兵庫県教育委員会
- 宮崎素一・藤田忠彦編 1991『有年原・田中遺跡』赤穂市教育委員会
- 広瀬和雄 1992「第3章 前方後円墳の畿内編年」『前方後円墳集成』近畿編 株式会社山川出版社
- 松本正信 1992「播磨」『前方後円墳集成』山川出版社
- 植野浩三 1994「兵庫県千種川中・下流域の初期須恵器」『韓式系土器研究』Ⅴ 韓式系土器研究会
- 岸本一宏 1994『播磨国風土記』と渡来文化』『風土記の考古学2 播磨国風土記の巻』同成社
- 藤田忠彦 1994「有年原・田中遺跡出土の初期須恵器と軟質土器」『韓式系土器研究』Ⅴ 韓式系土器研究会
- 石野博信編 1995『全国古墳編年集成』雄山閣
- 中田宗伯編 1995『津村古墳』赤穂市教育委員会
- 村川行弘編 1996『兵庫県の考古学』吉川弘文館
- 藤田忠彦編 1997『兵庫県赤穂市 東有年・沖田遺跡発掘調査報告書—ガソリンスタンド改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査—』赤穂市教育委員会
- 中田宗伯編 1998『周世入相遺跡発掘調査報告書Ⅳ』赤穂市教育委員会
- 太田宏明 1999「畿内型石室の属性分析による社会組織の検討」『考古学研究』46—1 考古学研究会
- 富山直人 1999「兵庫県千種川流域の横穴式石室について—支流矢野川流域を中心として—」『古代文化』51—11（財）古代学協会
- 中田宗伯編 1999『東有年・沖田遺跡の風景—ほ場整備事業に伴う発掘調査の記録—』赤穂市教育委員会
- 岸本道昭 2000「播磨の前方後円墳研究序説—測量調査と集成による基礎作業—」『播磨学研究』播磨学研究会
- 岸本道昭 2001「前方後円墳からみた政治構造」『前方後円墳からみた播磨』第1回播磨考古学研究会
- 中浜久喜 2002「播磨における横穴式石室の構造と変遷」『横穴式石室からみた播磨』記録集 第2回播磨考古学研究会実行委員会
- 荒木幸治 2003「千種川流域の弥生時代中期—後期の集落動態」『播磨の弥生社会を探る—弥生中期から後期における集落動態—第4回播磨考古学研究会の記録』第4回播磨考古学研究会実行委員会
- 中田宗伯編 2003『東有年・沖田遺跡発掘調査報告書—ほ場整備に伴う発掘調査—』赤穂市教育委員会
- 味香秀和編 2003『上菅生遺跡—農林総合整備事業（モデル型）ほ場整備に伴う発掘調査—』赤穂市教育委員会
- 第5回播磨考古学研究会編 2003『渡来系文物からみた古墳時代の播磨』資料集
- 第5回播磨考古学研究会編 2004『渡来系文物からみた古墳時代の播磨』記録集
- 富山直人 2004「横穴式石室の諸段階とその地域性—初期国家再編過程への一視点」『古代文化』56-9・10（財）古代学協会
- 荒木幸治編 2006『木虎谷11号墳発掘調査報告書』赤穂市教育委員会
- 高松雅文・榊 真麻 2007「地域別概説 播磨の横穴式石室」『近畿の横穴式石室』横穴式石室研究会
- 富山直人 2007「後期前方後円墳の消長と横穴式石室からみた6世紀の社会」『近畿の横穴式石室』横穴式石室研究会
- 横穴式石室研究会編 2007『近畿の横穴式石室』
- 荒木幸治編 2008『有年原・クルミ遺跡発掘調査報告書—有年土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ—』赤穂市教育委員会
- 上郡町教育委員会 2008『中山13号墳発掘調査現地説明会資料』
- 上田健太郎 2009「古墳時代における渡来系の要素を持つ遺物について」『竹万宮ノ前遺跡』兵庫県教育委員会
- 島田 拓編 2009『井の端古墳群（調査編）』上郡町教育委員会
- 荒木幸治編 2010『有年牟礼・井田遺跡発掘調査報告書—有年土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ—』赤穂市教育委員会
- 中久保辰夫 2010「渡来文化受容の格差—古墳時代中期の播磨地域を中心に—」『待兼山考古学論集Ⅱ—大阪大学考古学研究室20周年記念論集—』大阪大学考古学研究室編
- 第12回播磨考古学研究会編 2011『大型古墳からみた播磨』資料集
- 兵庫県立考古博物館 2011『有年牟礼・井田遺跡現地説明会資料』

蟻無山古墳群



蟻無山1号墳の墳丘（南から）。手前に突出部があり、その奥に円丘部が見える。



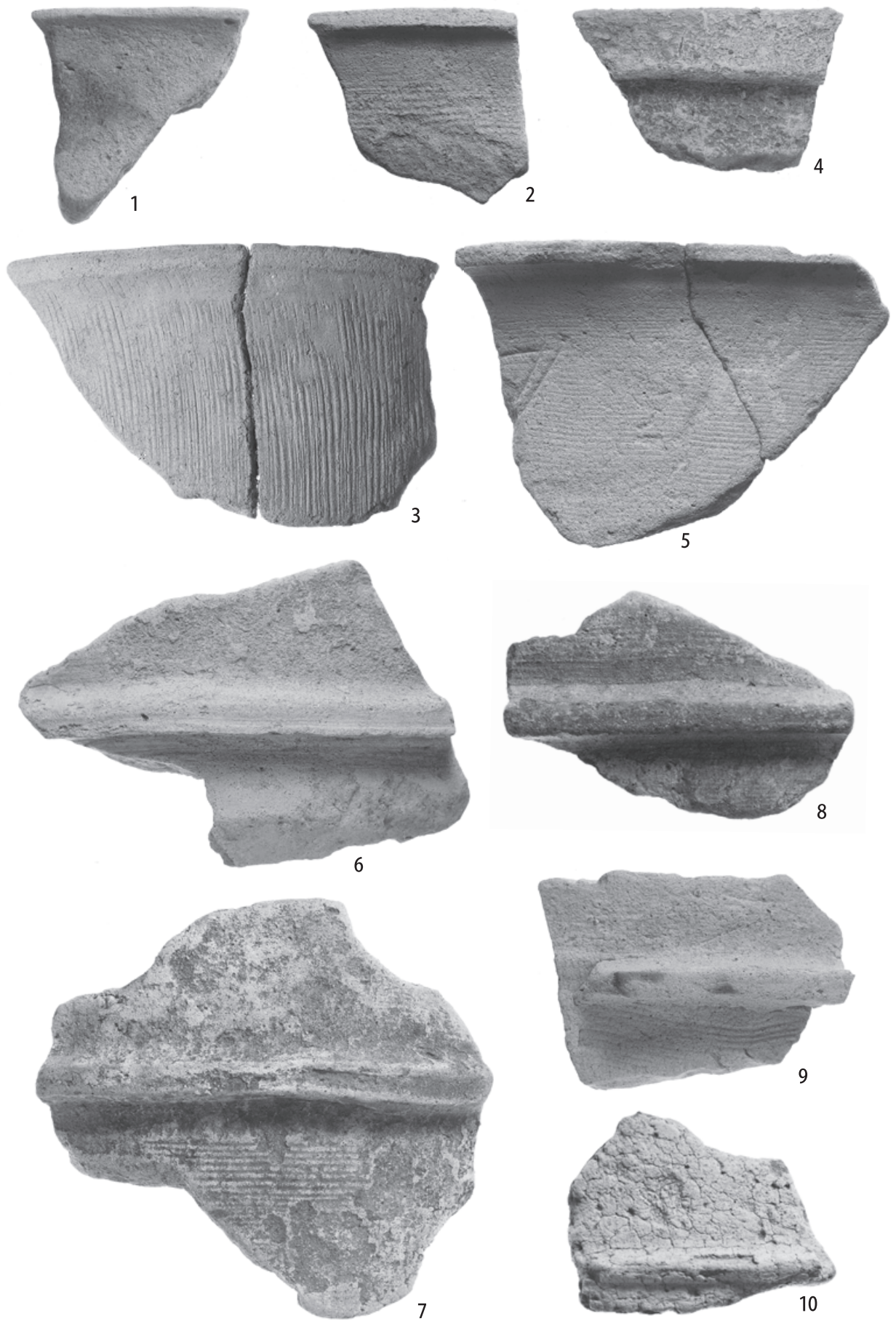
蟻無山1号墳の北斜面。墳丘周囲にテラスが巡る。



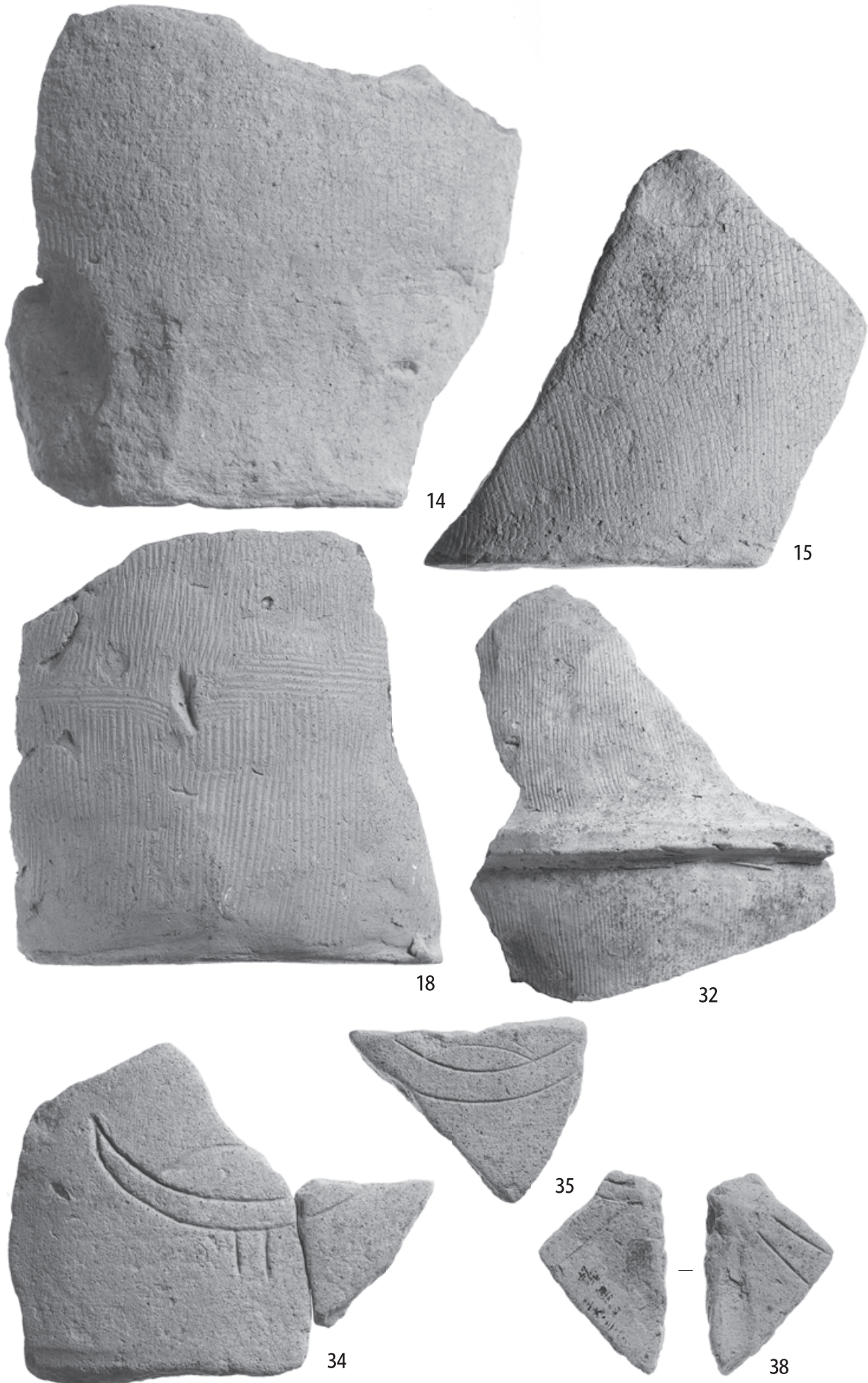
蟻無山1号墳の東墳丘（南から）。円丘部（写真左）の周囲に巡るテラスは、南の突出部と東の造出し部（写真右）で大きく矩形に張り出す。



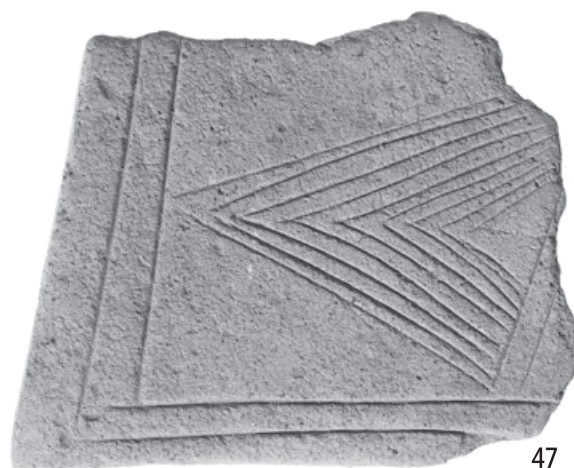
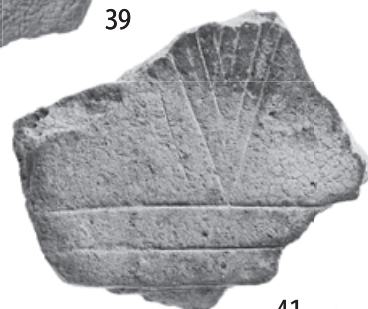
蟻無山1号墳墳頂部から北側（上郡町）を見る。ここから西周りに270度見下ろすことができる。



蟻無山古墳群 採集埴輪 (1)



蟻無山古墳群 採集埴輪 (2)



蟻無山古墳群 採集埴輪 (3)



蟻無山古墳群 採集埴輪 (4)



蟻無山古墳群 採集埴輪 (5)



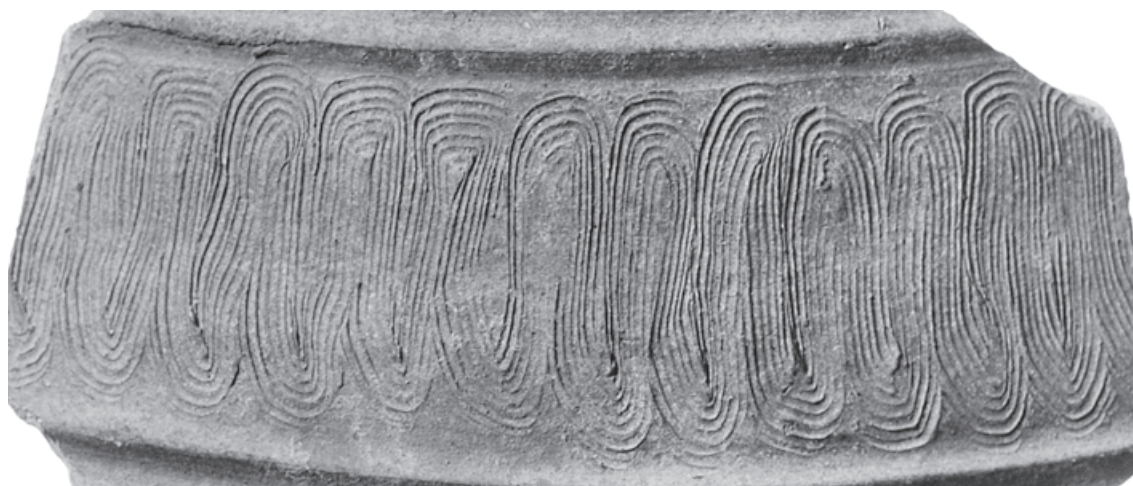
蟻無山古墳群 採集埴輪 (6)



蟻無山古墳群 採集須恵器



蟻無山古墳群 採集須恵器 62 の文様詳細



蟻無山古墳群 採集須恵器 61 の文様詳細



蟻無山古墳群 採集須恵器（右 3 点は蟻無山 2 号墳出土とされる。）

塚山古墳群



塚山古墳群 I a 支群 I-1号墳墳丘



塚山古墳群 I a 支群 I-1号墳石室



塚山古墳群 I a 支群 I - 2 号墳墳丘



塚山古墳群 I a 支群 I - 2 号墳石室



塚山古墳第Ⅰa支群 I-4号墳墳丘



塚山古墳第Ⅰa支群 I-4号墳石室



塚山古墳群 I a 支群 I-6号墳墳丘



塚山古墳群 I a 支群 I-6号墳石室・奥壁



塚山古墳群 I a 支群 I - 7 号墳石室



塚山古墳群 I a 支群 I - 8 号墳石室



塚山古墳群 I b 支群 I - 12 号墳墳丘



塚山古墳群 I b 支群 I - 14 号墳石室



塚山古墳群Ⅱ a 支群 Ⅱ-2号墳石室



塚山古墳群Ⅱ a 支群 Ⅱ-4号墳石室



塚山古墳群Ⅱ a 支群 Ⅱ-6号墳墳丘



塚山古墳群Ⅱ a 支群 Ⅱ-6号墳石室



塚山古墳群Ⅱc支群 Ⅱ-9号墳墳丘



塚山古墳群Ⅱc支群 Ⅱ-9号墳石室



塚山古墳群Ⅱc支群 Ⅱ-10号墳墳丘



塚山古墳群Ⅱc支群 Ⅱ-10号墳石室



塚山古墳群Ⅱc支群 Ⅱ-12号墳墳丘



塚山古墳群Ⅱc支群 Ⅱ-12号墳石室



塚山古墳群Ⅱc支群 Ⅱ-14号墳墳丘



塚山古墳群Ⅱc支群 Ⅱ-14号墳石室



塚山古墳群 II d 支群 II - 15 号墳墳丘



塚山古墳群 採集遺物 (有年考古館蔵)

周世宮裏山古墳群



周世宮裏山古墳群 全景



周世宮裏山古墳群 1号墳石室奥壁



周世宮裏山古墳群 2号墳墳丘



周世宮裏山古墳群 2号墳石室



周世宮裏山古墳群 4号墳石室



周世宮裏山古墳群 4号墳石室奥壁



周世宮裏山古墳群 5号墳石室



周世宮裏山古墳群 5号墳石室奥壁



周世宮裏山古墳群 6号墳墳丘



周世宮裏山古墳群 6号墳石室奥壁



周世宮裏山古墳群 7号墳墳丘



周世宮裏山古墳群 7号墳石室奥壁



周世宮裏山古墳群 8号墳石室



周世宮裏山古墳群 9号墳石室



周世宮裏山古墳群 10号墳石室



周世宮裏山古墳群 11号墳石室



周世宮裏山古墳群 12号墳墳丘



周世宮裏山古墳群 12号墳石室奥壁



周世宮裏山古墳群 13号墳墳丘（写真右側）



周世宮裏山古墳群 13号墳石室奥壁



周世宮裏山古墳群 15号墳石室



周世宮裏山古墳群 15号墳石室奥壁



周世宮裏山古墳群 16号墳墳丘



周世宮裏山古墳群 16号墳石室



周世宮裏山古墳群 17号墳墳丘



周世宮裏山古墳群 17号墳石室奥壁



周世宮裏山古墳群 18号墳墳丘



周世宮裏山古墳群 18号墳石室奥壁



周世宮裏山古墳群 19号墳墳丘



周世宮裏山古墳群 19号墳石室



周世宮裏山古墳群 採集遺物（有年考古館蔵）



周世宮裏山古墳群 採集遺物（有年考古館蔵）

報 告 書 抄 録

ふりがな	ありなしやまこふんぐん・つかやまこふんぐん・すせみやうらやまこふんぐんそくりょうちょうさほうこくしよ
書名	蟻無山古墳群・塚山古墳群・周世宮裏山古墳群測量調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	赤穂市文化財調査報告書
シリーズ番号	73
編著者名	荒木幸治
編集機関	赤穂市教育委員会生涯学習課
所在地	〒678-0292 兵庫県赤穂市加里屋81番地
発行年月日	西暦2011年3月31日

所収遺跡名	ふりがな 所在地	コ ー ド		(世界測地系)		調査期間 (全面調査)	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	北 緯	東 経			
ありなしやま 蟻無山古墳群	ひょうごけんあこうし 兵庫県赤穂市 うねはら 有年原	28212	130154	34°	134°	20110111	7,890㎡	範囲確認
			130156	50′ 23″	11″	20110311		
つかやま 塚山古墳群	ひょうごけんあこうし 兵庫県赤穂市 うねむれ 有年牟礼	28212	130058	34°	134°	20100219	6,000㎡	範囲確認
			130077	50′ 25″	00″	20100331		
すせみやうらやま 周世宮裏山 古墳群	ひょうごけんあこうし 兵庫県赤穂市 すせ 周世	28212	130204	34°	134°	20020424	5,400㎡	範囲確認
			130230	48′ 39″	30″	20020331		

所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
ありなしやま 蟻無山古墳群	古 墳	古墳中期	帆立貝形古墳 1基 円墳2基	初期須恵器 埴輪	造出しをもつ 円筒・朝顔形埴輪 馬、鳥、盾、船、蓋、 盾、鞍形埴輪
つかやま 塚山古墳群	古 墳	古墳後期	古墳44基 横穴式石室	須恵器	44基を確認 第三群集墳を足すと 合計51基となる 間仕切りもつ古墳4基
すせみやうらやま 周世宮裏山 古墳群	古 墳	古墳後期	古墳27基 横穴式石室	須恵器 耳環	27基からなる古墳群 小規模群集墳
要 約	<p>古墳中期及び古墳後期の古墳群について、範囲確認のための測量調査及び踏査を実施した。調査の結果、蟻無山1号墳は造出しをもつ全長52mの帆立貝形古墳であることが判明した。また有年考古館収蔵資料を再整理した結果、従来知られていなかった鳥、船、鞍形埴輪の存在が明らかになった。</p> <p>塚山古墳群の調査では、これまで20基とされてきた古墳の数が、総計51基となった。</p> <p>周世宮裏山古墳群の調査では、その詳細な立地が明らかとなった。</p>				

赤穂市文化財調査報告書 73

蟻無山古墳群・塚山古墳群・周世宮裏山古墳群
測量調査報告書

平成23年3月31日発行

編集・発行 赤穂市教育委員会 生涯学習課
〒678-0292 兵庫県赤穂市加里屋81番地
TEL 0791-43-6962 FAX 0791-43-6895

印刷 東洋紙業合資会社
〒678-0239 兵庫県赤穂市加里屋89番地
TEL 0791-45-2123
